BASS POD XT

ULTIMATE TONE FOR BASS

BASS POD XT PRO

ULTIMATE TONE FOR BASS + DIG I/O

取扱説明書

LINE 6

安全上のご注意

ご使用になる前に必ずお読みください

ここに記載した注意事項は、製品を安全に正しくご使用いただき、あなたや他の方々への危害や損害を未然に防ぐためのものです。
注意事項は誤った取り扱いで生じる危害や損害の大きさ、または切迫の程度によって、内容を「警告」、「注意」の2つに分けています。これらは、あなたや他の方々の安全や機器の保全に関わる重要な内容ですので、よく理解した上で必ずお守りください。

マークについて

製品には下記のマークが表示されています。

マークには次のような意味があります。

このマークは、機器の内部に絶縁されていない「危険な電圧」が存在し、感電の危険があることを警告しています。

このマークは注意喚起シンボルであり、取扱説明書などに一般的な注意、警告、危険の説明が記載されていることを表しています。

火災・感電・人身障害の危険を防止するには

図記号の例

	△ 記号は、注意（危険、警告を含む）を示しています。 記号の中には、具体的は注意内容が描かれています。左の図は「一般的な注意、警告、危険」を表しています。
	⃠ 記号は、禁止（してはいけないこと）を示しています。 記号の中には、具体的な注意内容が描かれることがあります。左の図は「分解禁止」を表しています。
	● 記号は、強制（必ず行うこと）を示しています。 記号の中には、具体的な注意内容が描かれることがあります。左の図は「電源プラグをコンセントから抜くこと」を表しています。

以下の指示を守ってください

⚠警告

この注意事項を無視した取り扱いをすると、
死亡や重傷を負う可能性が予想されます

- **電源プラグは、必ずAC100Vの電源コンセントに差し込む。**
- **電源プラグにほこりが付着している場合は、ほこりを拭き取る。**
  感電やショートの恐れがあります。
- **本製品はコンセントの近くに設置し、電源プラグへ容易に手が届くようにする。**

- **次のような場合には、直ちに電源を切って電源プラグをコンセントから抜く。**
  ○電源コードやプラグが破損したとき
  ○異物が内部に入ったとき
  ○製品に異常や故障が生じたとき
  修理が必要なときは、お買い上げの販売店、最寄りのコルグ営業所、またはサービス・センターへ修理を依頼してください。

- **本製品を分解したり改造したりしない。**

- **修理/部品の交換などで、取扱説明書に書かれている以外のことは絶対にしない。**
- **電源コードを無理に曲げたり、発熱する機器に近づけない。また、電源コードの上に重いものを乗せない。**
  電源コードが破損し、感電や火災の原因になります。
- **大音量や不快な程度の音量で長時間使用しない。**
  万一、聴力低下や耳鳴りを感じたら、専門の医師に相談してください。
- **本製品に異物（燃えやすいもの、硬貨、針金など）を入れない。**
- **温度が極端に高い場所（直射日光の当たる場所、暖房機器の近く、発熱する機器の上など）で使用や保管はしない。**
- **振動の多い場所で使用や保管はしない。**
- **ホコリの多い場所で使用や保管はしない。**

- **風呂場、シャワー室で使用や保管はしない。**

- **雨天時の野外などのような湿気の多い場所で、使用や保管はしない。**
- **本製品の上に液体の入ったもの（水や薬品等）を置かない。**
- **本製品に液体をこぼさない。**

- **濡れた手で本製品を使用しない。**

⚠注意

この注意事項を無視した取り扱いをすると、傷害を負う可能性
または物理的損害が発生する可能性があります

- **正常な通気が妨げられない所に設置して使用する。**
- **ラジオ、テレビ、電子機器などから十分に離して使用する。**
  ラジオやテレビ等に接近して使用すると、本製品が雑音を受けて誤動作する場合があります。また、ラジオ、テレビ等に雑音が入ることがあります。
  本製品をテレビ等の横に設置すると、本製品の磁場によってテレビ等の故障の原因になることがあります。
- **外装のお手入れは、乾いた柔らかい布を使って軽く拭く。**
- **電源コードをコンセントから抜き差しするときは、必ず電源プラグを持つ。**

- **長時間使用しないときは、電源プラグをコンセントから抜く。**

- **他の電気機器の電源コードと一緒にタコ足配線をしない。**
  本製品の定格消費電力に合ったコンセントに接続してください。
- **スイッチやツマミなどに必要以上の力を加えない。**
  故障の原因になります。
- **外装のお手入れに、ベンジンやシンナー系の液体、コンパウンド質、強燃性のポリッシャーは使用しない。**
- **不安定な場所に置かない。**
  本製品が転倒してお客様がけがをしたり、本製品が故障する恐れがあります。
- **本製品の上に乗ったり、重いものをのせたりしない。**
  本製品が損傷したり、お客様がけがをする原因となります。
- **地震時は本製品に近づかない。**
- **本製品に前後方向から無理な力を加えない。**
  本製品が転倒する危険性があります。

データについて

操作ミス等により万一異常な動作をしたときに、メモリー内容が消えてしまうことがあります。データの消失による損害については、当社は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

*掲載されている会社名、製品名、規格名などは、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Please Note:

Vetta, Amp Farm, Modeler, POD, PODxt, Line 6及びLine 6ロゴは、Line 6社の登録商標です。このマニュアルに掲載されている写真、イメージ、登録商標、アーティスト名はそれぞれの所有者の権利に基づくものであり、このマニュアルではLine 6のデジタルモデリングテクノロジーを駆使し、独自に開発された音を適切に表現するためだけに使用されています。また、これらの写真、イメージ、登録商標、アーティスト名の使用において、いかなる協力やエンドースメントも関わるものではありません。

SELECTノブ／エフェクトボタンガイド

- EDIT、SAVE、TUNERボタン点灯時、ページ選択ノブ
- 上記以外はチャンネルメモリー選択ノブ

- キャビネットシミュレート使用中はCAB/A.I.R.ボタン点灯
- 各エフェクトボタンを2回押して、そのエディットページを表示
- EQ、STOMP、MOD、DELAYボタン点灯時は各エフェクトがオン

EDITページ

1. アンプ設定
2. A.I.R.設定
3. EQ設定
4. EQ設定（ページ2）
5. ペダル選択、設定
6. モジュレーション選択、設定
7. モジュレーション設定（ページ2）
8. ディレイ選択、設定
9. ディレイ設定（ページ2）
10. モジュレーション、ディレイ／リバーブクロスオーバー
11. ワウ、ボリューム設定
12. エフェクトツウィーク 、テンポ設定
13. ゲート、DI設定

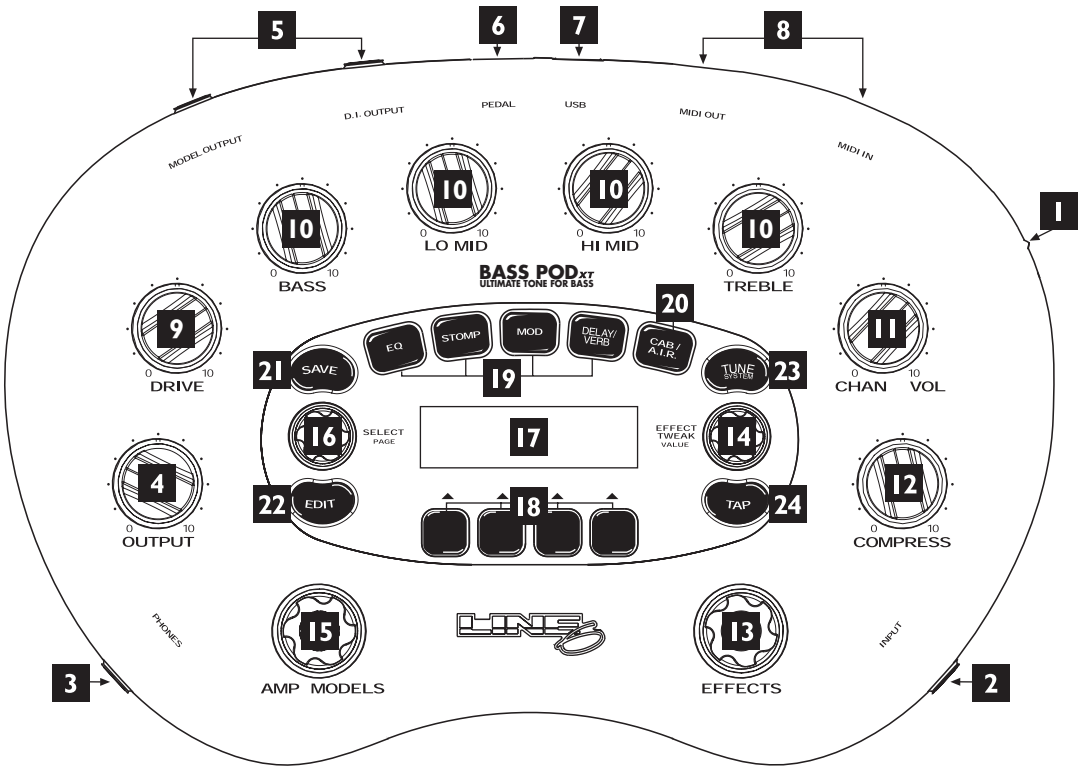
SAVEページ

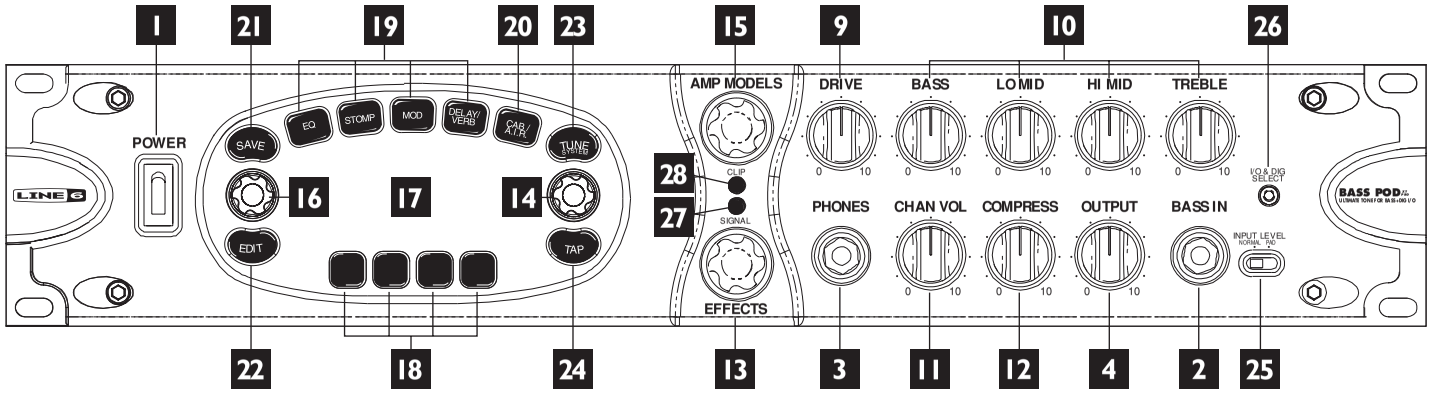
1. サウンド、チャンネルメモリーセーブ
2. アンプモデルのカスタムセーブ
3. エフェクトセットアップのカスタムセーブ
4. 1つの初期設定チャンネルのリコール
5. 初期設定リコール
6. MIDIダンプ

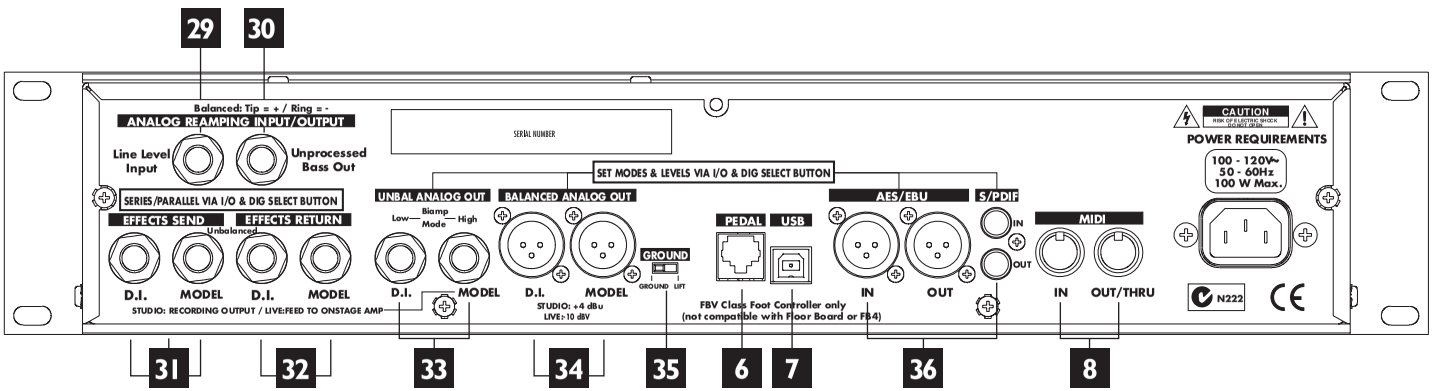
TUNERページ

1. チューナー
2. 入力／デジタル出力（Bass POD$_{XT}$PROのみ）
3. 接続選択
4. バイアンプ設定
5. ディスプレイコントラスト
6. MIDI
7. Bass POD$_{XT}$ソフトウエアバージョン表示

BASS POD$_{XT}$ コントロール／端子




1
21
19
20
23
15
9
10
26
POWER
SAVE
EQ
STOMP
MOD
DELAY/ VERB
CAB/ A.I.R.
TUNE
TAP TEMPO
AMP MODELS
DRIVE
BASS
LO MID
HI MID
TREBLE
I/O & DIG SELECT
16
17
14
28
27
CLIP
SIGNAL
EDIT
PHONES
CHAN VOL
COMPRESS
OUTPUT
BASS IN
INPUT LEVEL
NORMAL
PAD
EFFECTS
22
18
24
13
3
11
12
4
2
25


29
30
Balanced: Tip = + / Ring = -
ANALOG REAMPING INPUT/OUTPUT
Line Level Input
Unprocessed Bass Out
SERIAL NUMBER
SET MODES & LEVELS VIA I/O & DIG SELECT BUTTON
CAUTION
POWER REQUIREMENTS
100 - 120V~
50 - 60Hz
100 W Max.
SERIES/PARALLEL VIA I/O & DIG SELECT BUTTON
UNBAL ANALOG OUT
BALANCED ANALOG OUT
AES/EBU
S/PDIF
EFFECTS SEND
EFFECTS RETURN
Unbalanced
Low
Biamp Mode
High
PEDAL
USB
MIDI
GROUND
GROUND LIFT
D.I.
MODEL
D.I.
MODEL
D.I.
MODEL
STUDIO: RECORDING OUTPUT / LIVE:FEED TO ONSTAGE AMP
STUDIO: +4 dBu
LIVE: -10 dBV
FBV Class Foot Controller only
(not compatible with Floor Board or FB4)
IN
OUT
IN
OUT
IN
OUT/THRU
N222
31
32
33
34
35
6
7
36
8

アンプモデル

#	アンプモデル	
0	BYPASS	(Bypasses the Amp Model)
1	TUBE PREAMP	LINE 6 ORIGINAL
2	L6 CLASSIC JAZZ	LINE 6 ORIGINAL
3	L6 BRIT INVADER	LINE 6 ORIGINAL
4	L6 SUPER THOR	LINE 6 ORIGINAL
5	L6 FRANKENSTEIN	LINE 6 ORIGINAL
6	L6 EBONY LUX	LINE 6 ORIGINAL
7	L6 DOPPELGANGER	LINE 6 ORIGINAL
8	SUB DUB	LINE 6 ORIGINAL
9	AMP 360	ACOUSTIC 360
10	JAGUAR	AGUILAR DB750
11	ALCHEMIST	ALEMBIC F-2B
12	ROCK CLASSIC	AMPEG SVT
13	FLIP TOP	AMPEG B-15
14	ADAM AND EVE	EDEN TRA VELLER
15	TWEED B-MAN	FENDER BASSMAN COMBO
16	SIL VERFACE BASS	FENDER BASSMAN HEAD
17	DOUBLE SHOW	FENDER DUAL SHOWMAN
18	EIGHTIES	GK 800 RB
19	HIW AY 100	HIW ATT DR-103
20	HIW AY 200	HIW ATT 200DR
21	BRITISH MAJOR	MARSHALL MAJOR
22	BRITISH BASS	MARSHALL SUPER BASS
23	CALIFORNIA	MESA BOOGIE BASS 400+
24	JAZZ TONE	POLYTONE MINIBRUTE
25	ST ADIUM	SUNN COLISEUM
26	STUDIO TONE	SWR SM-500
27	MOTOR CITY	VERSATONE PAN-O-FLEX
28	BRIT CLASS A100	VOX AC-100

キャビネットモデル

#	キャビネットモデル	対象モデル
0	NO CAB	N/A
1	1X12 BOUTIQUE	EUPHONICS CXL-112L
2	1X12 MOTOR CITY	VERSATONE PAN-O-FLEX
3	1X15 FLIP TOP	AMPEG B-15
4	1X15 JAZZ TONE	POLYTONE MINIBRUTE
5	1X18 SESSION	SWR BIG BEN
6	1X18 AMP 360	ACOUSTIC 360
7	1X18 CALIFORNIA	MESA BOOGIE
8	1X18+12 STADIUM	SUNN COLISEUM
9	2X10 MODERN UK	ASHDOWN ABM 210T
10	2X15 DOUBLESHOW	FENDER DUAL SHOWMAN D130F
11	2X15 CALIFORNIA	MESA BOOGIE
12	2X15 CLASS A	VOX AC-100
13	4X10 LINE 6	LINE 6 ORIGINAL
14	4X10 TWEED	FENDER BASSMAN COMBO
15	4X10 ADAM EVE	DAVID EDEN
16	4X10 SILVERCONE	HARTKE 410
17	4X10 SESSION	+HORN SWR GOLIATH
18	4X12 HIWAY	HIWATT BASS CAB
19	4X12 GREEN 20'S	'67 MARSHALL BASKETWEAVE
20	4X12 GREEN 25'S	'68 MARSHALL BASKETWEAVE
21	4X15 BIG BOY	MARSHALL MAJOR
22	8X10 CLASSIC	AMPEG SVT

エフェクトモデル

ペダル	対象モデル
BASS OVERDRIVE	LINE 6 ORIGINAL
SCREAMER	IBANEZ TS 808
CLASSIC DIST	PRO CO RAT
FACIAL FUZZ	ARBITER FUZZ FACE
FUZZ PI	BIG MUFF PI
OCTAVE FUZZ	TYCOBRAH OCTAVIA
BRONZE MASTER	LINE 6 ORIGINAL
BLUE COMP	BOSS CS-1
RED COMP	MXR DYNA COMP
VETTA COMP	LINE 6 ORIGINAL
AUTO WAH	MUTRON III

ディレイ	対象モデル
DELUXE CHORUS	LINE 6 ORIGINAL
ANALOG CHORUS	BOSS CE-1 CHORUS
DELUXE FLANGER	LINE 6 ORIGINAL
JET FLANGER	ADA FLANGER
PHASER	MXR PHASE 90
U-VIBE	UNI VIBE
OPTO TREM	FENDER OPTO
BIAS TREM	VOX BIAS
ROTARY DRUM	FENDER VIBRATONE

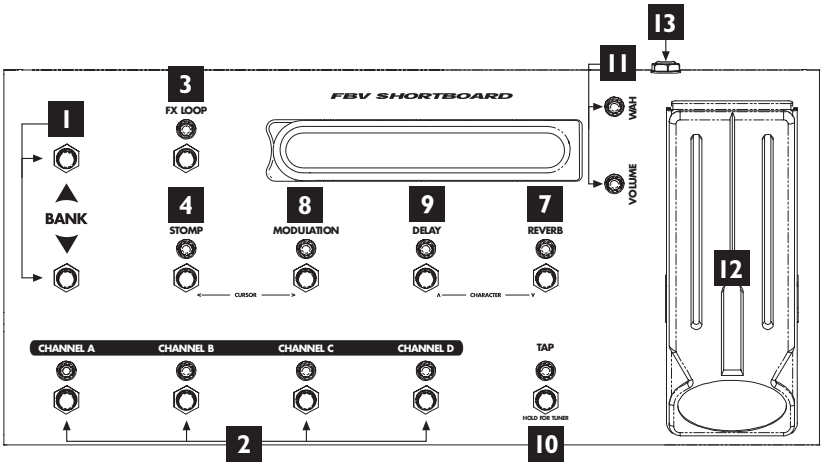
ディレイ	対象モデル
ANALOG DELAY	BOSS DM-2
ANALOG W/MOD	EH MEMORYMAN
TUBE ECHO	EP-1 ECHOPLEX
MULTI-HEAD	ROLAND SPACE ECHO
SWEEP ECHO	LINE 6 ORIGINAL
DIGITAL DELAY	LINE 6 ORIGINAL
REVERSE	LINE 6 ORIGINAL

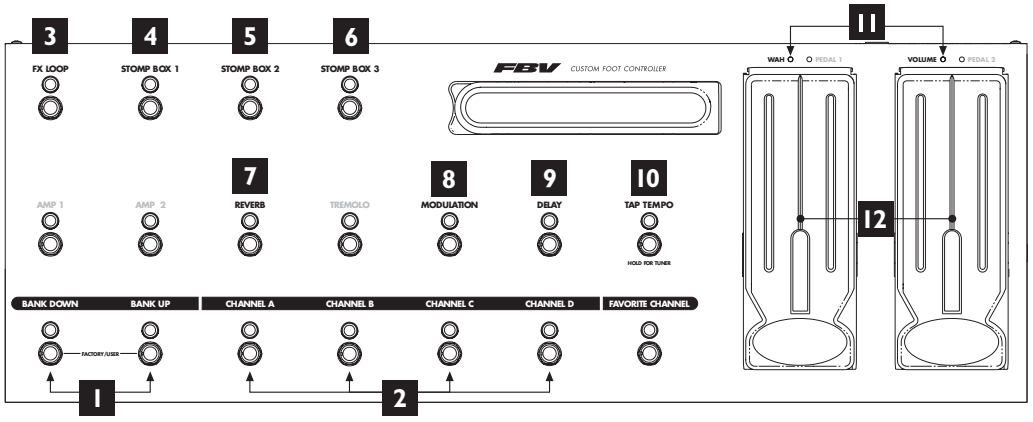
リバーブ

LUX SPRING	SMALL ROOM	DARK HALL	RICH CHAMBER	SLAP PLATE
STD SPRING	TILED ROOM	MEDIUM HALL	CHAMBER	VINTAGE PLATE
KING SPRING	BRITE ROOM	LARGE HALL	CAVERNOUS	LARGE PLATE

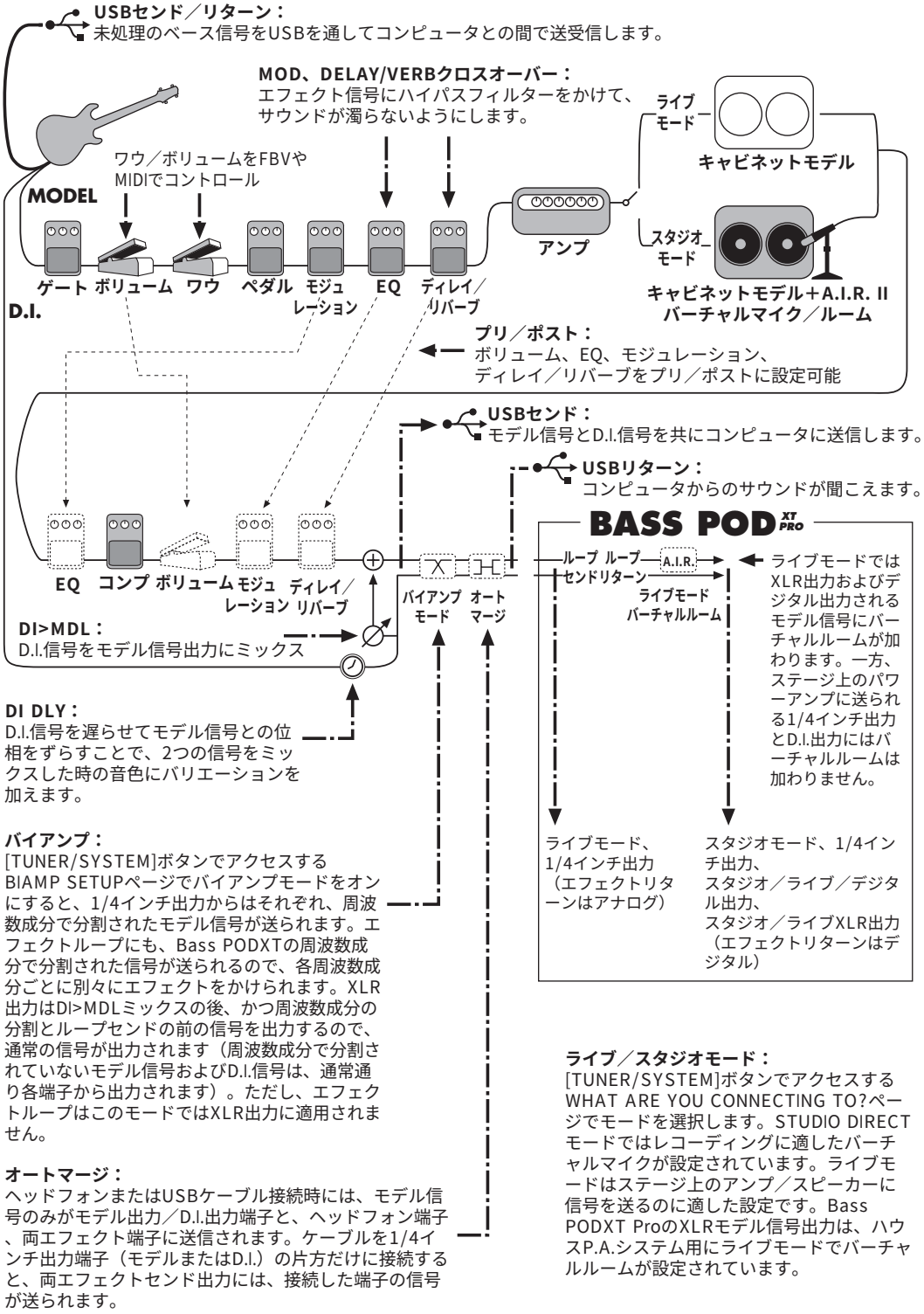
アンプ名、キャビネット名、エフェクト名はそれぞれの所有者の商標で、Line 6社と関係はありません。このマニュアルではLine 6のデジタルモデリングテクノロジーを駆使し、独自に開発された音を適切に表現するためだけに使用されています。

FBVシリーズ・フット・コントローラ





信号の流れ／エフェクトルーティング



ユーザー登録のお願い

この度はLINE 6 Bass PODxt/Bass PODxt Proをお買い上げいただき誠にありがとうございます。

ユーザーサービスをご利用いただくためにはユーザー登録が必要になります。(登録は無料です)

登録後、次のようなサービスを受けることができますので、必ずご登録くださいますようお願い致します。

- コルグ・カスタマー・サポートLINE 6 登録ユーザー窓口の利用(IDナンバーをご確認させていただきます)
- バージョンアップのお知らせや、機能追加などの情報提供(無料)
- メジャー・バージョンアップ時の日本語マニュアルの配布(無料)
- 日本語マニュアルの再発行(有料)
- 破損CD-ROMの再発行(CD-ROM添付商品の場合－有料)

ご登録方法

1. オンラインでのご登録
   コルグ・ホームページ (http://www.korg.co.jp/Support/) にアクセスして必要事項をご入力ください。ご登録内容の変更もできます。

2. ご愛用者カードでのご登録
   保証書と対になっているご愛用者カードに必要事項をご記入の上、切り離して投函してください。登録が完了しますと、弊社から個人IDナンバーを記入したユーザー登録完了通知をお送りいたします。
   ※ メールでの連絡をご希望の方は、愛用者カードに「メール希望」とお書き添えいただき、「E-MAIL」欄にメールアドレスをご記入ください。
   ※ ご愛用者カードをお送りいただいた後に変更が生じた場合は、新旧登録内容を明記の上、FAX、郵便、eメールのいずれかでご連絡ください。

   FAX番号:03-3323-5945
   E-MAILアドレス:kid-master@korg.co.jp
   〒168-0073　東京都杉並区下高井戸1-15-12
   株式会社コルグ　KIDユーザー登録係

   注) ご登録には「シリアルNo.」が必要です!
   シリアルNo.は外箱、及び本体裏面に貼付されているバーコードの右上に記載されている数字を記入してください。
   (例 (21)SPD5H5246002059)

保証書と対になっている愛用者カードは、ソフトウェアのバージョンアップ等のお知らせのために必要になりますので、必ず弊社にご返送ください。

目 次

クイックスタートガイド ..... 1•1

はじめに ..... 1•2

Bass PODxtの生い立ち ..... 1•2
Line 6 のご紹介 ..... 1•2
モデリング ..... 1•3
アンプ／キャビネット／エフェクトモデル ..... 1•3
A.I.R.マジック ..... 1•4
D.I. ..... 1•5
いよいよ本題に••• ..... 1•5

パネルコントロールノブ、端子 ..... 2•1

Bass PODxt Pro ..... 2•8

セットアップ ..... 3•1

基本操作 ..... 3•1
Bass PODxt — スタジオ内でのセットアップ ..... 3•1
接続先（WHAT ARE YOU CONNECTING TO?）ページ ..... 3•1
入出力 ..... 3•2
レベルの設定 ..... 3•2
電子機器のノイズについて ..... 3•3
ペダル機能 ..... 3•3
MIDI機能 ..... 3•3
Bass PODxt — ライブでのセットアップ ..... 3•4
ラックマウント ..... 3•4
セットアップ方法 ..... 3•4
接続先（WHAT ARE YOU CONNECTING TO?）ページ ..... 3•4
アンプでベストなサウンドを出すには ..... 3•5
外部ペダルとBass PODxt ..... 3•5
バイアンプモード ..... 3•6
Bass PODxt Pro — 接続と設定 ..... 3•7
入力の選択 ..... 3•7

入力／デジタル出力の設定 ..... 3・8
FORMATパラメータ ..... 3・8
MODEパラメータ ..... 3・8
GAINパラメータ ..... 3・9
接続先（WHAT ARE YOU CONNECTING TO?）ページ ..... 3・9
FX LOOP（エフェクトループ）パラメータ ..... 3・10
AES/EBUフォーマットとS/PDIFフォーマット ..... 3・11
バイアンプモード ..... 3・11
電子機器のノイズについて ..... 3・12
ペダル機能 ..... 3・13
MIDI機能 ..... 3・13
Bass POD xt Proでのリアンプ ..... 3・13
アナログのリアンプ ..... 3・13
デジタルのリアンプ ..... 3・14

サウンドの作成と保存 ..... 4・1
チャンネル・メモリーの呼び出し ..... 4・1
エフェクト設定の呼び出し ..... 4・1
ペダル感覚のコントロール ..... 4・1
エディットの基本操作 ..... 4・2
2回押しで簡単なアクセス ..... 4・2
エディットメニューの中身 ..... 4・2
アンプノブ設定 ..... 4・2
キャビネット／マイク設定 ..... 4・3
エフェクトのエディット ..... 4・4
CONFIGパラメータ ..... 4・4
モデル音色の選択 ..... 4・5
音色をテンポに合わせる ..... 4・5
モジュレーションとディレイ／リバーブのクロスオーバー ..... 4・6
ワウとボリューム ..... 4・6
FX TWEAKのノブ機能割り当て／テンポの割り当て ..... 4・7
ゲートの設定 ..... 4・7
D.I.設定 ..... 4・8
保存操作 ..... 4・8
チャンネル・メモリーの保存 ..... 4・9
アンプモデルのカスタムセーブ ..... 4・9
エフェクト設定のカスタムセーブ ..... 4・10
1つのチャンネルの呼び出し ..... 4・11

プリセット一式の呼び出し ..... 4・11
MIDIダンプ ..... 4・11

アンプ＆キャビネットモデル ..... 5・1
モデルとなったアンプ＆キャビネットについて ..... 5・1
AMP 360 ..... 5・2
JAGUAR ..... 5・2
ALCHEMIST ..... 5・3
ROCK CLASSIC ..... 5・3
FLIP TOP ..... 5・4
ADAM AND EVE ..... 5・4
TWEED B-MAN ..... 5・4
SILVERFACE BASS ..... 5・5
DOUBLE SHOW ..... 5・5
EIGHTIES ..... 5・6
Hiway 100 ..... 5・6
Hiway 200 ..... 5・6
BRITISH MAJOR ..... 5・7
BRITISH BASS ..... 5・7
CALIFORNIA ..... 5・8
JAZZ TONE ..... 5・8
STADIUM ..... 5・9
STUDIO TONE ..... 5・9
MOTOR CITY ..... 5・9
BRIT CLASS A100 ..... 5・10
Line 6のオリジナルモデル ..... 5・10
L6 CLASSIC JAZZ ..... 5・11
L6 BRIT INVADER ..... 5・11
L6 SUPER THOR ..... 5・11
L6 FRANKENSTEIN ..... 5・11
L6 EBONY LUX ..... 5・12
L6 DOPPELGANGER ..... 5・12
SUB DUB ..... 5・12
TUBE PREAMP ..... 5・12
BYPASS ..... 5・13
キャビネットモデル ..... 5・14

ペダル、モジュレーション、ディレイ／リバーブのエフェクトモデル ... 6•1

エフェクト大好き人間集まれ! ... 6•1

ペダル・エフェクターのモデル ... 6•1

ディストーションとオーバードライブ ... 6•1

ペダル・エフェクター：コンプレッサー ... 6•2

BASS OVERDRIVE ... 6•2

SCREAMER ... 6•2

CLASSIC DIST ... 6•3

FACIAL FUZZ ... 6•3

FUZZ PI ... 6•3

OCTAVE FUZZ ... 6•4

BRONZE MASTER ... 6•4

コンプレッサー ... 6•5

BLUE COMP ... 6•5

RED COMP ... 6•5

VETTA COMP ... 6•6

AUTO WAH ... 6•6

モジュレーションのモデル ... 6•6

DELUXE CHORUS ... 6•6

ANALOG CHORUS ... 6•7

DELUXE FLANGER ... 6•7

JET FLANGER ... 6•7

PHASER ... 6•8

U-VIBE ... 6•8

Opto Trem ... 6•9

Bias Trem ... 6•9

ROTARY DRUM ... 6•9

ディレイ・エフェクト ... 6•9

ANALOG DELAY ... 6•9

ANALOG W/MOD ... 6•10

TUBE ECHO ... 6•10

MULTI-HEAD ... 6•11

SWEEP ECHO ... 6•11

DIGITAL DELAY ... 6•11

REVERSE ... 6•12

VERB ... 6•12

スプリングリバーブ ... 6•12

ルームリバーブ ... 6•13

ホール ... 6•13

プレート ... 6•14

エディットとMIDIコントロール ..... 7・1

MIDIの基本 ..... 7・1

MIDIとは？ ..... 7・1

MIDI IN、MIDI OUT ..... 7・1

MIDIチャンネル ..... 7・2

MIDIメッセージ ..... 7・3

Bass PODxtのプログラムを他の機器にバックアップ ..... 7・4

全チャンネルの送信 ..... 7・4

一部データの送信 ..... 7・4

データの呼び出し ..... 7・5

MIDIを使ってできること ..... 7・5

MIDIプログラムチェンジでBass PODxtのチャンネル切り替え ..... 7・5

MIDIコントローラーを使ったBass PODxtのサウンド調整 ..... 7・6

Bass PODxtのMIDIオートメーション ..... 7・6

MIDIセットアップ時のトラブルシューティング ..... 7・7

フット・コントローラの利用 ..... 8・1

FBVシリーズ・フット・コントローラ ..... 8・1

FBV Shortboardについて ..... 8・1

FBV Shortboardの接続 ..... 8・1

スイッチ操作 ..... 8・1

FBV Shortboardを使った保存とネーミング ..... 8・3

EX-1の使用 ..... 8・4

付録A：アンプモデル ..... 9・1

付録B：MIDIプログラムチェンジ ..... 9・2

付録C：MIDIコントロール ..... 9・3

付録D：FBVシリーズMIDIコントロール ..... 9・7

インターネットの利用

Line 6は最新のパワフルな技術をミュージシャンの皆様にご利用いただくことを使命としています。その一部としてインターネットがLine6のユーザーの皆様にとって価値ある情報ソースとなりますよう力を注いでいます。

Line6ホームページ(**http://www.line6.com**)

Line 6のホームページは皆様に情報をおとどけする効果的な手段です。Bass PODxt/Bass PODxt Proを最大限ご利用いただくためにいろんな情報を満載しています。Eメールで製品サポート、使い方のヒントやコツ、USBドライバや他の無償ソフトウェアなどの情報を手に入れたり、Line 6での最新ニュースや製品情報を読んだりとさまざまなことができます。

サウンドや意見をやりとりする**Line 6フォーラム:ホームページ**では他のBass PODxt/Bass PODxt Proユーザーとサウンドやアドバイスをやりとりしたり、チャットできます。

インターネットはまだ？そんな方はこれが思いきってインターネットにのるチャンスです。

注意

Line 6のホームページは日本語表記はありません。
又、Line 6のホームページを利用して発生したいかなる問題についても弊社は責任を負いかねますのであらかじめご了承の程お願い致します。

クイックスタートガイド

*このページでは基本的な操作を手短に説明します。Bass PODxt Proをお持ちの方で標準のベースギター入力／アナログ出力以外の端子を使う場合は、第2章のコントロール類についてお読みになり、***3-7ページ「Bass PODxt Pro－接続と設定」***で入出力について詳しく学んでください。*

1. **[OUTPUT]**ノブをゼロに下げます。
2. **[D.I]**端子と**[MODEL]**端子をレコーダーやミキサーの入力端子に接続するか、**[MODEL]**端子をベースギターアンプの入力端子に接続します。ヘッドフォンをBass PODxtの**[PHONES]**端子に接続すれば、ヘッドフォンだけで演奏が聴けます。
3. 付属のACアダプタ(Bass PODxt)、電源コード（Bass PODxt Pro）を本機に接続し、もう一端をコンセントに差し込みます。
4. ベースギターをBass PODxtの**[INPUT]**端子（Bass PODxt Proは**[BASS IN]**端子）に接続します。
5. **POWER**スイッチをオンにして電源を入れます。
6. Bass PODxtは直接レコーディングシステムに接続してすぐに使えるようになっています。*ベースギターアンプに接続する場合は、ベストな音色が使えるよう、どんなアンプに接続するかをBass PODxtに教え込むことが大切です。*
   [TUNE/SYSTEM]ボタンを押し**[SELECT]**ノブを1目盛りだけカチッと右に回します。**DEST**（デスティネーション）パラメータの下にあるボタンを押してから**[EFFECT TWEAK]**ノブを回して、接続するアンプのタイプを設定します。この設定はヘッドフォンを接続すると自動的にキャンセルされます。
7. **[AMP MODELS]**ノブでアンプモデルを選択します。**[CHAN VOL]**ノブを最大に設定し、**[DRIVE]**ノブ、**[BASS]**ノブ、**[LO MID]**ノブ、**[HI MID]**ノブ、**[TREBLE]**ノブを好みに合わせて設定します。**[OUTPUT]**ノブで出力レベルを設定します。
8. **[EFFECTS]**ノブでエフェクトをロードし、**[COMPRESS]**ノブと**[EFFECT TWEAK]**ノブを回してサウンドを好みに合わせて調整します。**[TAP]**ボタンを押して、ディレイとモジュレーションのスピードを設定します。
9. **[SELECT]**ノブ、またはディスプレイ下の4つのボタンのいずれかを押してプリセットの音色を選びます。この4つのボタンのどれかを2回押すと、各ノブの実際の位置がそのまま音色に適用される、**「マニュアルモード」**になります。

はじめに

Bass PODxtの生い立ち

このたびはBass PODxtをお買い上げいただきありがとうございます。Bass PODxtはレコーディング、練習、プリアンプ、そしてクリエイティブなデジタルエフェクターとして、さまざまな用途でお使いいただけます。もちろん1台に限らず複数台使ってもOKです。ギター／ベースアンプが初めて使われて以来、Bass PODxtの登場は画期的な出来事なのです。

Bass PODxtはLine 6 Vettaシリーズのアンプでご好評を得た**Point to Point Modeling**（ポイント・トゥ・ポイント・モデリング）技術を採用し、今ではギター／ベースレコーディング業界の標準とまでなった、コンパクトでユニークなPODのパッケージデザインを採用し、素晴らしいサウンドを生み出します。前世紀のギター／ベースアンプやエフェクトペダルの音色を引き継ぐとともに、妥協のない優れたレコーディング／ダイレクトサウンドを可能にします。

Line 6 のご紹介

ご存じの方も多いでしょうが、Line 6は数年前、新しいタイプのギターアンプを片手にデビューしました。ギタリストのために、デジタル・ソフトウェア・モデリング技術をコンボアンプに採用した最初の会社です。ギタリスト／ベーシストは録音時のアンプサウンドにこだわりますが、クラシックアンプを狭いスタジオに積み上げたり、お金に糸目をつけずに腕利きのレコーディングエンジニア達に協力してもらうなどは、実際には不可能です。そこで、当社のモデリング技術をインゲン豆の形をした小さなPODという製品に集約したのです。こうしてPODはギター／ベース録音の世界を永久に塗り替えてしまいました。

PODが世界を震撼させてから、今度はこのモデリング技術をステップアップさせてみよう、ということになりました。一つの山を制覇したら次に別の山に挑戦する、というのが登山家の精神です。そこで当社の天才エンジニアたちを極秘の研究室に集め、更にアンプやペダルエフェクタ類をそろえて、Point to Point Modeling（ポイント・トゥ・ポイント・モデリング）と呼ぶ技術を開発しました。この技術は、評判の高い当社Vettaアンプに初めて採用されました。このアンプは夢のようなアンプ／キャビネット／エフェクトモデルと他に類を見ないサウンドで、世界アンプ・ヘヴィーウエイト級チャンピオンの候補になっています。そして今回、この新技術をおなじみのPODにも注ぎ込んでできたのが、Bass PODxtです。

素晴らしいギタートーンをBass PODxtからいつでも生み出せる、その秘密は・・・・・。

モデリング

ギターサウンドという課題に、チューブアンプについてのすべてを研究しようと、作業にとりかかりました。3年かかって分析し学んだ事は、色々なギター／ベースアンプの状態によって、異なる種類のチューブがどう反応するか、ということです。入力信号の処理方法、信号にトーン（音色）やシェイプ（形）ができあがる過程、歪み始める点、歪みの音質と特性、どれも複雑なものばかりですが全てをデータ化することに成功しました。

すべてを調べ上げた後、デジタルについての専門知識を駆使して、チューブやスピーカーキャビネットの信号処理をデジタル領域内でシミュレートするソフトウェアを開発したのです。

こうして革新的なDSP（デジタル信号処理）ソフトウェアを基礎にしたモデリング技術はBass PODxtなどのLine6製品に創造という力を与えたのです。

アンプ／キャビネット／エフェクトモデル

世界中のギタリスト／ベーシストたちが「クラシックサウンド」「ヴィンテージサウンド」と呼ぶ数々の機材をもとにした音色とノウハウが、アンプ／キャビネット／エフェクトモデルとしてBass PODxtに入っています。

音量レベルや音色、ゲインコントロールの設定を変えることによってどんな効果があるかを耳でモニターしながら、ミュージシャンにインスピレーションを与えた実物の機器によるサウンドを注意深く科学的に比較して、これらのモデルをていねいに調整しました。またモデルにした機器のゲインとイコライザー特性を注意深く測定し、ノブを変更したときに、実物のアンプを使ってサウンドを調整したときと同じ効果が出るようにしました。

トーンコントロールの中心周波数、スロープ、カット／ブーストレンジの精密な分析、加えて各機器をユニークなものにしている主たるファクターをも分析しました。古いアンプやエフェクトは非常に敏感に相互反応する回路を搭載しているので、ノブを1つ回しただけで別のノブによる調整具合も変わってきます。Bass PODxtでは、このような細部にもこだわって設計されています。

こうしてできあがったアンプ／キャビネット／エフェクトモデルがBass PODxtの基礎となりました。更に明言しますと、

1 **Line 6のモデリングはLine 6が特許を持つ100%デジタル技術です。**

2 **Line 6のモデリングはサンプリングでもソリッドステートでもありません。特別なベースギターやピックアップ、ケーブルは必要ありません。**

A.I.R.マジック

Line 6のもう一つの革新的な技術は、A.I.R.ダイレクトレコーディングアウトです。A.I.R.は**a**coustically **i**ntegrated **r**ecordingの略で、レコーディング中にアンプ、キャビネット、スピーカー、マイク、レコーディング室などの相互作用によって作り出される音色特性を十分に研究した結果生まれたものです。

多くのプリアンプ、アンプ、ダイレクトボックススタイルのアンプでは、キャビネットやスピーカーのシミュレーションに限界があり、スピーカー、木質、その他デザイン要素から生じる様々な音色や変化の再現が不可能なのです。ですから、従来の多くの製品ではマイクの選択やマイク位置が音色へ与える多大な影響なども再現できませんし、レコーディングに於ける空間の微妙なアンビエンスも再現できないのです。

Bass PODxtではアンプモデルとA.I.R.技術を組み合わせ、納得のいくベースギターサウンドが録音できるような土台を作り、本物のアンプやスピーカーキャビネットを通して演奏したときと同じフィーリングを持つトーンを作ることによって、優れたサウンドを提供します。

- ベースギターアンプ回路の違いによる音の差は、選択したアンプモデルに表われます。それぞれのモデルに長期に渡る研究の成果を見ることができます。
- ベースギターアンプではベースギターの信号が回路を通ると、スピーカーキャビネットのスピーカーに出力されます。スピーカーのスペック、スピーカーの数、スピーカーの並び方でベースギターのトーンがかなり違ってきますし、木の箱自体の構造によっても違ってきます。たとえば開放型のキャビネットに入った12インチのスピーカー搭載Marshallヘッドアンプでは、密閉型の4x12（12インチスピーカー4個搭載）キャビネットのMarshallヘッドアンプとはサウンドがかなり違います。Line 6はバーチャルスピーカーキャビネットとして綿密に構築して、本物のキャビネットが素晴しいベースギターサウンドを生む上での影響をシミュレートしました。
- サウンドがスピーカーキャビネットから出ると、レコーディング場面で次に重要なことは、そのサウンドを受け取るマイクロフォンです。レコーディングでは色々なマイクロフォンを選んで、これを色々な位置に置いてサウンドを作ります。スピーカーコーンに直接向いたマイクロフォンは、方向をはずしたマイクロフォンとはまた違う音を拾います。Line 6ではマイクがベースギターサウンドに加える音色とマイクの位置を色々変えたときの影響を注意深く分析して、細かなマイク位置をBass PODxt上で設定可能にしました。
- ベースギターアンプ、キャビネット、マイクロフォン以外にも部屋には色々なものがあります。その部屋の様子がベースギターサウンドにもかなり影響します。リバーブで基本的な空間の特性をつかみ、部屋の壁や床、天井に反射するサウンドの効果をシミュレートします。ところがサウンドがスピーカーとマイクの間の空気を伝わるときの、サウンドの「広がり」にかかわってくる微妙な要素があ

ります。この最後の要素が、部屋の中の聞き手の位置、サウンドが出てくる方向、ベースギターと聞き手の距離に対する感覚を与えるカギとなります。

このようなサウンドを形作る重要な要素のすべてをBass PODXTでは考慮に入れています。[AMP MODELS]ノブを回して任意のアンプシミュレーションを選んでください。Bass PODXTは自動的に、適切なキャビネットとマイクセットアップを使ったアンプのモードとなり、レコーディングスタジオ空間にある空気を伝わってくるようなサウンドを出します。リバーブを適当にかけてやれば、マイクで拾ったようなリアルなサウンドが録音できます。ボタンを押してノブを回せば、別のキャビネットに変えたり、マイクやマイク位置を変えたり、あるいは仮想スタジオ内の音の「広がり」を調整することができます。

A.I.R.ダイレクトレコーディングアウトはLine 6の専用であり、アンプ／キャビネット／エフェクトモデルとの組み合わせがBass PODXTのダイレクトレコーディングサウンドへの要となっています。

D.I.

素晴らしいベースギターレコーディングやライブのベースギターサウンドは、D.I.（ダイレクト入力）や、アンプとD.I.とを組み合わせて作くることが多いので、Bass PODXTにも、[MODEL]出力端子とともに[D.I.]出力端子を装備しています。これによって、未処理のダイレクトなラインレベルのベース信号と、[MODEL]出力から出るアンプ／キャビネット／マイク／エフェクトのかかったサウンドとをタイミング／フェーズを合わせて出力できます。

いよいよ本題に・・・

お気に入りのベースギターをBass PODXTに接続し、本取扱説明書巻頭のイラストを参照しながら次章のコントロール類、接続端子についてお読みください

パネルコントロールノブ、端子

本取扱説明書巻頭のイラストを参照しながら、本書をお読みになることをおすすめします。また、イラストには簡単な操作方法も記載されています。本書の説明で出てくる四角の白ヌキ数字は、巻頭のイラストの番号に対応しています。巻頭のイラストページにはFBV、FBV Shortboardフット・コントローラのイラスト、信号経路図、接続図もあります。

1 POWERスイッチ

Bass PODxtの電源をオン／オフします。Bass PODxt Proには標準のIECグラウンド電源コードが同梱されています。Bass PODxtは付属の**ACアダプターPX-2**を必ずお使いください。

2 [INPUT] (Bass PODxt)、[BASS IN] (Bass PODxtPro)端子

ベースギターをここに接続します。モノ、アンバランス型接続端子です。

3 [PHONES]端子

練習時など外に音を出したくないときにヘッドフォンをここに接続します。ヘッドフォンの音量は**[OUTPUT]**ノブで調整します。ヘッドフォンを付けた時に大音量で鼓膜が破れないよう、音量を必ず確認してください。最初は[VOLUME]ノブを10時の位置に設定してからヘッドフォンを付け、必要に応じて音量を調整してください。

ヘッドフォンからサウンドが適切に聞こえるよう、Bass PODxtはヘッドフォンを接続すると自動的に「スタジオモード」に入ります *(詳細は**3-1**ページ「接続先（WHAT ARE YOU CONNECTING TO ?）ページ」をお読みください)*。

4 [OUTPUT]ノブ

全体の出力レベルとヘッドフォンのレベルを調整します。このレベルを変更しても音質は変わりませんので、音量レベルに関係なく自分の好きなサウンドが演奏できます。Bass PODxtのメモリーに設定を保存するとき、このレベル設定は保存されません。

*Bass PODxt Proでは、このノブ設定はライブモード時のXLR出力レベルには影響しません。(ライブモードの詳細は、***3-4***頁*「接続先（WHAT ARE YOU CONNECTING TO ?）ページ」*をお読みください。)*

この出力レベルが最大のとき、Bass PODxtのSN比は最適になります。低めに設定すると余分なノイズが入る可能性があります。レコーディング、ミキシングなどで出力レベルをできるだけ最大に設定するには、マイクやベースギターのレベル入力ではなく、**ラインレベルで動作する機器に**Bass **PODxtを接続してください**。ラインレベル入力な

らBass PODxtの出力レベルをほぼ最大まで上げると最適なサウンドが得られます。お使いの機材がマイク／ラインレベル入力端子を持っているなら、トリム設定でその入力を最小レベルに落とし、Bass PODxtの出力レベルを最大に上げます。

5 [D.I OUTPUT] [MODEL OUTPUT]端子（Bass PODxt Proでは33、34）

バランス型1/4インチTRS（チップ／リング／スリーブ）フォン端子です。業務用＋4dBuのバランス型機器に対応します。また、アンバランス型－10dBV機器と標準のベースギターケーブルにも対応します。

6 [PEDAL]端子

オプションのLine 6 FBVまたはFBV Shortboardフット・コントローラを接続します。Line 6 Floor BoardおよびFB4には対応していません。

7 [USB]端子

本機の[USB]端子をコンピュータに接続し、さまざまなレコーディングソフトでレコーディングできます。付属のUSBケーブルと、Bass PODxtドライバ・ソフトウェアをお使いください。このドライバ・ソフトウェアと使い方は、**www.korg.co.jp/KID/Line6/PodxtPro/**にてご確認ください。

8 [MIDI IN] [MIDI OUT]端子（Bass PODxt Proでは[MIDI IN][MIDI OUT/THRU]）

MIDI機器に接続して、プログラム・チェンジ・メッセージでチャンネル・メモリーを選択したり、コントローラやSysexでBass PODxtを自動設定します。Bass PODxtの**MIDI OUT**端子は別のMIDI機器のMIDI IN端子に、Bass PODxtのMIDI IN端子は別の機器の**MIDI OUT**端子に接続します。MIDI機器とのセットアップやMIDIでできることなどについては、**第7章「エディットとMIDIコントロール」**をお読みください。

9 [DRIVE]ノブ

選んだアンプモデルの入力にどれだけドライブをかけるかを設定します。マスターボリュームのないベースギターアンプの入力レベルコントロールと同じで、設定を大きくするほど歪んだサウンドになります。

10 トーンコントロールノブ[BASS] [LO MID] [HI MID] [TREBLE]

ふつうのベースギターアンプと同じで、アンプモデルを変更するとノブの反応も変わります。選んだアンプモデルの元となった実物のアンプのトーンコントロールと同様の動作をします。

11 [CHAN VOL]ノブ

使用チャンネルの音量レベルをコントロールします。2つのチャンネルメモリーに保存するサウンド（たとえば クリーンなベースギター音と歪んだベースギター音）のレベルバランスをとります。ふつうはこのノブをなるべく高く設定してS/N比を最適にします。ただし、ディスプレイにCLIPインジケータが点灯したら、ボリュームを下げてください。

[ヒント]: *[CHAN VOL]を最大にしてクリーンなチャンネルを保存してから、[CHAN VOL]を下げてクランチサウンドやリード音色を保存するといいでしょう。*

[ヒント]: *気に入ったサウンドはなるべく音量を大きくして弾きたいけれど、普通のベースギターとリードベースサウンドとの音量差、あるいは、クリーンなサウンドと歪んだサウンドの音量差も適度に付けたい、というのであれば、うまいバランスを出すために、まず好みのクリーンサウンドから設定します。ベースギターを思いっきり弾いた時にディスプレイのCLIPインジケータが点灯しない程度で、各クリーンサウンドの[CHAN VOL]をなるべく高く設定して保存します。次に、各サウンド間のバランスをチェックして、音量が大きすぎるものがあれば他のサウンドと同じくらいになるよう下げます。今度は歪んだクランチ／リード音色を選び、これがクリーンサウンドとうまく噛み合うよう、[CHAN VOL]ノブのレベルを多少低く設定して保存します。*

あとでBass PODXTを使うときは、[OUTPUT]ノブで出力レベルを必要に応じて設定するだけです。こうすれば、音色間の音量差を心配せずに各種サウンドを切り替えることができます。

12 [COMPRESS]ノブ

Bass PODXTには、クラシックなチューブのスタジオコンプレッサーLA-2Aをモデルにした音色が入っています。このノブは圧縮レベルを調整します。ノブを回すほど、強く弾いた音と軽く弾いた音の音量の差が小さくなります。逆に設定を小さくするほど、演奏ダイナミクスがそのまま再現されます。コンプレッサーは音量の大きい音ほど音量を下げて、静かに弾いた音量との差を縮めるため、全体の音量が低くなりがちです。しかし、Bass PODXTのコンプレッサーには自動ゲイン補正機能が内蔵されており、コンプレッションをかけても全体的な出力音量は一定に保たれます。

13 [EFFECTS]ノブ

エフェクトやエフェクトの組み合わせの設定を選ぶノブです（エフェクトの詳細は**6章の「ペダル・エフェクトとエフェクト」**をお読みください）。エフェクト設定は、アンプモデルと組み合わせることができる、仮想のペダルボードやラックマウントのエフェクタのようなものです。このノブを回すと、ロードされるエフェクト設定が表示され、エフェクトがすぐに変わるのがわかります。エフェクトボタンが点灯するので、どのエフェクトがオンになっているかわかります。64のプリセットエフェクトが搭載されています。

14 [EFFECT TWEAK]ノブ

選んだエフェクトを調整します。ノブを右に回すほどエフェクトの効果が深く、大きく、速く、長く、あるいはもっと単調になります（つまり、効果が増大します）。調整内容はディスプレイに表示されます。エフェクトのディレイタイムは**[TAP]**ボタンで設定します。詳細は、**4章の「サウンドの作成と保存」**をお読みください。対象のエフェクトがオフになっていると、この**[EFFECT TWEAK]**ノブを回しても何の効果もありません。また、**[EDIT]**ボタンまたは**[TUNE/SYSTEM]**ボタンが点灯していると、**[EFFECT TWEAK]**ノブはパラメータ値を調整します。

15 [AMP MODELS]ノブ

このノブを回してアンプサウンドを切り替えます。Bass PODxt内部の電子「回路」を変更するようなものです。（詳細は、**5章の「モデルアンプ／キャビネット」**をお読みください。）アンプモデルを選ぶと、自動的にキャビネット／マイクモデルも選択されます。たとえばTWEED B-MANモデルを選ぶとこれに適したキャビネットモデルもあわせて選択されます。別のキャビネット／マイクを選ぶには**[CAB/A.I.R.]**ボタン（2-6ページ参照）を使います。

つまり、**[AMP MODELS]**ノブを回すと、自動的にアンプ関連の設定がすべて選択されるわけです。DRIVE、BASS、LO MID、HI MID、TREBLE、CAB/A.I.R.、などはすべて選んだアンプモデルによって設定も決まるので、このノブを回すだけですぐに使えるサウンドが出ます。操作に慣れたらこのアンプ関連の設定を調整してアンプモデルをそれぞれ自分なりにカスタム化できます。*ただし、マニュアルモードでは、DRIVE、BASS、LO MID、HI MID、TREBLE、CHAN VOL、COMPRESSはアンプモデルで自動設定されるのではなく、実際のノブ位置の値が適用されます。この詳細は**5章**で説明します。*

16 [SELECT]ノブ

Bass PODxtにはLine 6があらかじめプログラムしたアンプ／エフェクト設定の数々を保存する64個のチャンネルロケーションがあります。これが4つのチャンネルごとに16個のバンクに分類されています。（この4つのチャンネルは**A、B、C、D**と呼ばれます。）各バンクを、仮想の4チャンネルベースギターアンプとして考えてみるとわかりやすいでしょう。この分類は、オプションのフット・コントローラ（FBVおよびFBV Shortboard）でも使われています。このコントローラーについては**8章**で説明します。

Bass PODxtのチャンネルは**[SELECT]**ノブで選びます。ディスプレイの下にある4つの**「ソフトボタン」**のうちの一つを押すと、現在のバンク内の別のチャンネルがロードされます。任意のチャンネルを呼び出すときに、**[BASS]**ノブが最小位置になっていても、呼び出したチャンネルではその設定が最大になっていることがあります。この場合、[BASS]の設定を変更したい場合は、**[BASS]**ノブを適度に回してください。またマニュ

アルモードにするには、ディスプレイ下の任意のボタンを2回押します。**マニュアルモード**に入ったことがディスプレイに表示され、実際のノブ位置がそのままサウンドの要素に影響します。あとでもっと詳しく説明します。

[EDIT]、**[SAVE]**、**[TUNE/SYSTEM]**のいずれかのボタンが点灯していると、**[SELECT]**ノブはページ画面を切り替える役目を果たします。**[EDIT]**ボタンを押した場合はこのノブでエフェクト／チャンネルパラメータのページ画面が選択できます。また**[TUNE/SYSTEM]**ボタンを押した場合はチューナーとシステム全体の設定に関する画面が、**[SAVE]**ボタンを押した場合はアンプ／エフェクトのカスタマイズ機能やMIDIファイル操作に関する画面が選択できます。画面の左に上下のスクロールバーが表示されている場合は、その前後にもページ画面があることを示しています。

17 ディスプレイ

このLCD画面には各種パラメータや設定が表示されます。

1. **[EDIT]**、**[SAVE]**、**[TUNE/SYSTEM]**のいずれかのボタンが点灯している時、画面上の左にあるスクロールバーを見れば、一連の複数ページの中で現在どのページが表示されているかがわかります。試しに、このいずれかのボタンを押してスクロールバーを確認してみましょう。スクロールバーのドット（点表示）はページの位置を示しています。**[SELECT]**ノブを回すとページ画面が切り替わるとともに、このドットも動きます。最初のページではドットは一番上にあります。最後のページを出すと、ドットは一番下に来ます。
2. 各ページ画面の下には、調整できるパラメータ名が表示されています。該当パラメータ名のすぐ下のボタンを押してから**[EFFECT TWEAK]**ノブで調整します。

18 ソフトボタン

エディット内容によって機能の異なるボタンです。バンク内の4つのうちの1つのチャンネルを瞬時にロードしたり、2回押すごとに**マニュアルモードをオン／オフ**したり（前ページ**[SELECT]**ノブ参照）します。**[EDIT]**、**[SAVE]**、**[TUNE/SYSTEM]**のいずれかのボタンが点灯している時、任意の**ソフトボタン**を押すと、そのボタンの上に表示されているパラメータが選択されます。パラメータの値は**[EFFECT TWEAK]**ノブで調整します。

19 エフェクト切り替えボタン

該当するエフェクトをオン／オフします。オンになるとボタンが点灯します。

[EQ]ボタン：6バンド・セミパラメトリックEQをオン／オフします。

[STOMP]ボタン：ロードされたペダル・エフェクトをオン／オフします。

[MOD]ボタン:ロードされたモジュレーション・エフェクトをオン／オフします。

[DELAY]ボタン:ロードされたディレイあるいはリバーブ・エフェクトをオン／オフします。

このうちの**任意のボタンを2回押すと、**ロードされたエフェクトの調整や別のエフェクトのロードができます。たとえば**[EQ]**ボタンを2回素早く押すと、EQエディット画面に入ります。**[STOMP]**ボタンを2回押すと、ペダル・エフェクトの最初のエディット画面に入ります。同じボタン（あるいは[EDIT]ボタン）を2回押すとエディットモードを抜けます。

20 [CAB/A.I.R.]ボタン

このボタンを1回押すと、アンプモデルと組み合わせるキャビネットモデルを選択し、キャビネットで使用するマイク、マイクが音を拾うスペースの量を設定できます。エフェクト切り替えボタンと違って、オン／オフ切り替えではありません。**キャビネットとマイクを切り替えるボタンです。**

キャビネットがオフの時、このボタンは消灯します。

21 [SAVE]ボタン

Bass POD XTで調整したサウンドを保存するときにこのボタンを使います。詳しくは**第4章「サウンドの作成と保存」**をお読みください。

プリセットのサウンドを使うとき、現在のバンクナンバー、チャンネルの文字、チャンネル名が画面上部に表示されます。エディットモードのページ画面でノブを回したりパラメータを変更したりすると、バンクナンバーの横に＊印が表示されます。これは保存されているチャンネルの設定を変更したので、調整内容をとっておきたければ保存しなさい、という意味です。

変更内容をチャンネルメモリーに保存するには**[SAVE]**ボタンを押します。ボタンが点滅します。ロードしているチャンネルに同じ名前で上書きする場合は、もう1度**[SAVE]**ボタンを押します。先ず名前を変更したい場合は真中の2つの**ソフトボタン18**を使って文字を選び、右のソフトボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブを回して変更します。**[DEST]**の下のソフトボタンを押して**[EFFECT TWEAK]**ノブを回すと保存メモリーが変更できます。16あるバンクのチャンネルA、B、C、Dが切り替わります。保存先を一つ選んでもう一度**[SAVE]**ボタンを押します。ボタンの点滅が止まり、選んだメモリーには以前のサウンドに代わって現在のサウンドが保存されます。

保存できたら**[SELECT]**ノブを回すだけでこのサウンドをいつでも呼び出せます。（これをフットコントロールでコントロールする方法は**第8章**をお読みください。）

Bass POD XTのチャンネルメモリーを使わず、マニュアルモードでノブ調整したサウンドをメモリーに保存するのも同じ方法です。**[SAVE]**ボタンを押してから**DEST表示下の**

ソフトボタン（▲）、**[EFFECT TWEAK]**でメモリーを選び、もう一度**[SAVE]**ボタンを押します。

保存を始めているときに、保存したくない、と気が変わったら他のいずれかのボタンを押すと保存操作がキャンセルできます。（または**[SAVE]**ボタンを押してから15秒以上何も操作しないでいると自然に保存操作がキャンセルされます。）

また、あやまって大切なサウンドの上に上書きしてしまってもだいじょうぶです。**[SAVE]**ボタンでアクセスするページから、チャンネルメモリーの工場プリセットをそのまま呼び出すことができます。詳細は、4章をお読みください。

[SAVE]ボタンを使って、アンプモデルやエフェクト設定を自分の好みにカスタム化することもできるので、**[AMP MODELS]**ノブや**[EFFECTS]**ノブを回すとすぐにカスタム化されたアンプやエフェクトも選べます。詳細は、**4章**をお読みください。

22 [EDIT]ボタン

[EDIT]ボタンを押してサウンドを満足ゆくまでエディットできます。このボタンが点灯している時に**[SELECT]**ノブを回すと、チャンネルメモリーを構成しているすべてのパラメータを搭載した各ページが選択できます。ここでエフェクトパラメータを設定したり、キャビネットとマイクを選択したり、パラメータを**[EFFECT TWEAK]**ノブに割り当てたりします。エディットの詳細は**4章**をお読みください。

23 [TUNE/SYSTEM]ボタン

このボタンを押すと、デジタルのクロマチックチューナー機能を使用することができます。アンプモデルもエフェクトもすべてバイパスされるので、弦の音がはっきりきこえます。

弦を弾くと、該当音符名と、それがナチュラルかフラットかという表示が出ます。つまりG#の場合はA♭と表示されます。チューニングしたい弦の音程をペグで上下させるとそれにつれて表示がシャープやフラットになり、小さな丸印が、シャープなら右へ、フラットなら左へ動きます。正しい音程にチューニングできていると真ん中で止まります。**[TUNE/SYSTEM]**ボタンをもう一度押すとチューナーモードから抜け出て通常使用モード状態に戻ります。

チューニングのバイパス／音量：チューニング中はサウンドはミュートされます。チューニング音を聞きたい場合は「ＭＵＴＥ」表示下のソフトボタンを押して**[EFFECT TWAEK]**ノブを回してバイパスを選びます。あるいはFBV、FBVシュートボードを接続している場合は、ボリュームペダルでも調整できます。

チューニングの基準：A=440Hz以外の基準ピッチを使いたいときは、チューナーモードのときに「440Hz」表示下の**ソフトボタン**を押してディスプレイを見ながら**[EFFECT TWEAK]**ノブを回します。ディスプレイ表示が変わり、基準ピッチは436Hz～445Hzの間で設定できます。変更した基準ピッチは、毎回設定する必要はありません。

24 [TAP]ボタン

モジュレーションエフェクトとディレイエフェクトのタイム（またはスピード）を設定します。任意のテンポでボタンをタップして（押して）ください。エディット画面の最後のページにはテンポに関するパラメータもあります。これはタップ設定を微調整したいときに便利です。エフェクトがタップしたテンポに従うよう設定するには、**4章**をお読みください。

Bass PODXT Pro

以下のコントロール類、端子はBass PODXT Proにのみ搭載されています。

25 [INPUT LEVEL]スイッチ

ふだんはこのスイッチをNORMALに設定します。CLIPインジケータ**28**が点灯する場合はBass PODXT Proの入力が過負荷状態になっています。これが頻繁に発生するようであれば、スイッチをPADに設定してください。アクティブ・ピックアップ搭載のベースギター、キーボードやその他の音源など、高レベルな信号に対応した回路に切り替わります。ベースギター以外の音源は、リアパネルの**[Line Level Input]**端子**29**も便利です。これはバランス型TRSコネクタです。内蔵DSPでクリッピングが生じている場合は、ディスプレイに別のCLIPインジケータが点灯します。

26 [I/O & DIG SELECT]ボタン

ベストなサウンドが得られるようBass PODXT Proに接続先を教え込むため、またデジタルオーディオやその他のオプションを選択する時にこのボタンを押します。

- 一度押すと、入力音源を接続するBass PODXT Proの端子を指定し、デジタル出力から出力したい信号を選択します。
- もう一度押すと、Bass PODXT Proをスタジオで使用するかライブで使用するか、エフェクトループをどのように接続したか、またBass PODXT Proにどんなデジタル機器を接続したかを設定します。
- 更にもう一度押すと、Bass PODXT Proのバイアンプモードの設定ができます。
- 最後にもう一度押すと、ページがクリアされ、ディスプレイはこのボタンを押す前の状態に戻ります。

27 [SIGNAL]インジケータ

信号が入力されていることを表示するインジケータです。オーディオ信号がBass PODXT Proに入っているはずなのに、音が聞こえず、このインジケータも点灯しない場合は、[I/O & DIG SELECT]ボタン**26**を押して、選択した入力ソースが正しいかを確認してください。（このインジケータはUSBからの入力信号を表示しません、ご注意ください。）

28 [CLIP]インジケータ

入力レベルが高すぎることを表示するインジケータです。（このインジケータもUSBからの入力レベル表示ではありません、ご注意ください。）本機に入る信号レベルを下げるか、**[INPUT LEVEL]**スイッチ**25**をPADに設定してください。ベースギター以外の音源は、次の**[Line Level Input]**端子を使用します。

29 [Line Level Input]端子

ベースギター以外の音源、あるいはワイヤレスベースのラインレベル出力用のバランス型端子です。すでにレコーディングしたベースギターをもう一度Bass PODXT Proに入力して再処理する、という「リアンプ処理」にも使用します。この端子を使うには、**[I/O & DIG SELECT]**ボタン**26**を押してライン入力を選択してください。信号が入力されているかは、フロントパネルの**[SIGNAL]**インジケータ**27**でわかります。また入力信号が過負荷ぎみで入力信号レベルを下げる必要がある場合は、**[CLIP]**インジケータ**28**が点灯します。

30 [Unprocessed Bass Out]端子

この端子には少なくとも2種類の使い方があります。ラックマウントのチューナーをお持ちの場合は、この端子にチューナーを接続できます。しかし、主な使い道は、**Pro ToolsでLine 6のAmp Farmプラグインをお使いの方が活用したい機能**で、レコーディング後でもサウンドに多少の調整ができるものです。

この端子からの信号を録音してから、ミックス時にその録音をBass PODXT Proの**[Line Level Input]**端子**29**に戻して、アンプやエフェクトなどのレコーディング音色の要素を変える、というわけです。

アンプやエフェクトからのサウンドを聞かずに満足ゆくベースギターのテイクを録音するのはむずかしいですよね。エフェクトも何もかかっていないドライサウンドでソロを弾くなんて、考えられますか？録音中は、この未処理の信号を聞かずに、Bass PODXT Proの左右出力（処理済み信号）をモニターします。未処理のベースギター信号と処理された左右出力からの信号を同時に録音できるので、後で音色調整するのも自由自在です。もちろん、すでに録音したものをそのまま使ってもかまいません。詳細は**3-14**ページをお読みください。

信号をデジタルで録音したい場合は、Bass POD XT Proのデジタル出力から未処理の信号を送り出すこともできます。この設定は、**[I/O & DIG SELECT]**ボタン**26**を押して表示させるディスプレイのページで行います。

31 32 [EFFECTS SEND] [EFFECTS RETURN]端子

このエフェクトループはラックマウントのエフェクタなどのラインレベル用にデザインされており、ペダル・エフェクターはフロントパネルに接続します。モノでセンド／リターンするには左の端子を使います。**[I/O & DIG SELECT]**ボタン**26**を押して表示させるディスプレイのページで、ループをシリーズ（直列）にするかパラレル（並列）にするかを選択します。ループをシリーズに設定しても[RETURN]端子に何も接続されていないと、ループは自動的にキャンセルされるので、サウンドが途切れることはありません。詳細は**3-10**ページをお読みください。D.I.信号のみをループをさせたい場合は、EFFECTS SEND [MODEL]端子にケーブルを接続してください。接続しないと、D.I.ループ信号としてモデル信号とD.I.信号の両方が送られてしまいます。

33 [UNBAL ANALOG OUT]端子

[I/O & DIG SELECT]ボタン**26**を押して表示させるディスプレイのページで、この出力端子をスタジオ用かライブ用かバイアンプモードにするかを設定します。

- スタジオモードでは、この端子をレコーダーのアンバランス型-10 dBV入力端子に接続できる設定になっています。
- ライブモードではスピーカーのシミュレーション設定はなく、ステージ上のパワーアンプに接続できる設定になっています。
- バイアンプモードにすると、信号の低周波成分が[D.I.]端子に、高周波成分が[MODEL]端子に送られるので、各端子に別個のアンプ／スピーカーキャビネットを接続して高域、低域別々に増幅することができます。

いずれにしても、フロントパネルの[OUTPUT]ノブ**4**でこの端子からの出力レベルを設定します。

34 [BALANCED ANALOG OUT]端子

[I/O & DIG SELECT]ボタン**26**を押して表示させるディスプレイのページで、この出力端子がスタジオ用かライブ用かを設定します。スタジオモードでは、この端子をレコーダーのバランス型+4 dBu入力端子に接続できる設定になっています。ライブモードでは、-10 dBVの信号をハウスのサウンドシステムやP.A.に送る設定になっており、フロントパネルの**[OUTPUT]**ノブ**4**の設定は、この端子からの信号レベルに影響しないので、P.A.のレベルを変えずに自分の音量だけをステージ上で調整できます。

35 [GROUND]スイッチ

XLRバランス型アナログ出力端子のアースを解除するスイッチです。他の接地済み機器に接続している時にグラウンドループのハムノイズが生じる場合は、このスイッチでアースを解除してください。

36 [AES/EBU] & [S/PDIF]入出力端子

デジタルオーディオ信号を送受信する端子です。**[I/O & DIG SELECT]**ボタン**26**を押して表示させるディスプレイのページで、使用する端子、サンプリングレート、ワード長（量子化ビット数）などの詳細を設定します。デジタル入力とアナログ出力を同時に、またアナログ入力とデジタル出力を同時に、あるいはその任意の組み合わせで使えます。デジタルオーディオのBass PODxt Proへの入力とBass PODxt Proからの出力を、異なるサンプリングレート、ワード長にすることも可能です。

Bass PODxt Proには独立したクロック端子はありませんが、アナログ入力でオーディオをBass PODxt Proに送り込んでいる場合でも、任意のデジタル入力端子でデジタルオーディオを受信して、そのクロックに同期できます。たとえば、デジタルミキサーからのデジタル出力信号をBass PODxt ProのS/PDIF入力端子に入力する場合、**[I/O & DIG SELECT]**ボタン**26**を押して、**FORMAT**（フォーマット）パラメータを**MATCH SPDIF**（SPDIFに一致）に設定すれば、Bass PODxt Proはミキサーからの入力信号に同期します。また、入力信号のフォーマットに合わせて出力デジタルオーディオのフォーマットを設定します。

セットアップ

白ヌキ数字は本取扱説明書巻頭のイラストにある数字に対応しています。

Bass PODxtは何を接続しても、世界一流のサウンドを出してくれます。ステージ上で使い慣れた自分のアンプに接続することも、最高級のレコーディングシステムに接続することもできます。本章では以下の内容について説明します。

Bass PODxt—スタジオ内でのセットアップ

Bass PODxt—ライブでのセットアップ

Bass PODxt Pro—接続と設定

基本操作

1. 電源をコンセントとBass PODxtの電源端子に接続します。
2. ベースギターを**[INPUT]**（Bass PODxt Proは[BASS IN]）**2**に接続します。
3. Bass PODxtの出力をアンプなどの機材に接続します。**[OUTPUT]**端子**5**はバランス型1/4インチTRS（チップ／リング／スリーブ）フォン端子です。業務用＋4dBuのバランス型機器に対応します。また、アンバランス型－10dBV機器と標準のベースギターケーブルにも対応します。
   Bass PODxt Pro：リアパネルの出力ペア端子**33**、**34**を使用します。本章後述の「接続と設定」をお読みください。**[I/O & DIG SELECT]**ボタン**26**を押して、入力ソースとしてベースギター（またはご使用になる楽器）を選択します。

Bass PODxt—スタジオ内でのセットアップ

Bass PODxt Proをお持ちの方は本章3-7ページの「Bass PODxt Pro—接続と設定」に進んでください。

USB端子を使うには、Line 6ホームページwww.line6.comでBass PODxt USBドライバ・ソフトウェアをダウンロードしてください。ファイルに含まれているUSBドライバ・ソフトウェアの使用説明もお読みください。

接続先（WHAT ARE YOU CONNECTING TO?）ページ

接続機材によって、Bass PODxtのサウンドを最適な状態にしてやることが必要です。**[TUNE/SYSTEM]****23**ボタンを押し**[SELECT]****16**ノブを右に回し、次の画面を表示します。

DESTパラメータの下のソフトボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]** 14 ノブで**STUDIO: DIRECT**モードを選択します。このモードではLine 6オリジナルのA.I.R. II DSPが起動します。このDSPを使うと普通のベースギターアンプやマイク設定では物足りなくなるような、仮想のスピーカー／キャビネット／雰囲気／マイク体験ができます。

DESTパラメータ設定は記憶されるので、電源を入れるたびに設定しなくてもすみます。これを一時的な用途で別の設定に変えた時は、忘れずに元の設定に戻しておいてください。ヘッドフォンをBass PODXTに接続すると、自動でSTUDIO:DIRECTが選択されるので、周りに音を出さずにベストなサウンドで練習ができます。

入出力

Bass PODXTをレコーダー、ミキサーなどの機器に接続する場合は、マイクレベル入力やベースギターレベル入力ではなくラインレベル入力にBass PODXTの出力を接続してください。Bass PODXTはSSLのような業務用コンソールからカセットレコーダーまで、様々な機器に対応できます。Bass PODXTの出力端子をスタジオの他の機器に接続するときは必ず他の機器のラインレベル入力端子に接続してください。（マイクレベルやベースギターレベルの入力端子には適応しません。）これは最適なSN比でノイズを最低に抑え、サウンドの良質な部分を拾うためです。機器によってはマイクレベルソースでもラインレベルソースでも同じ入力端子を使い、入力時点で低レベルの信号（マイク信号など）をトリムで持ち上げるものがあります。そのような入力端子にBass PODXTをつなぐ場合は、トリムを最低に落として、Bass PODXTの**[OUTPUT]** 4 ノブと**[CHAN VOL]** 11 ノブを最大に設定してください。接続機器にラインレベル専用の入力端子が2つあるなら、それを使ったほうが、レンジの広いマイク／ラインレベル入力でトリムを使うよりも、よい結果が得られます。

レベルの設定

まず、Bass PODXTを使いたいサウンドに設定し、ベースを思いっきり弾いた時にディスプレイのCLIPインジケータが点灯しない程度で、**[CHAN VOL]** 11 を最大に設定します。次に**[OUTPUT]**ノブとシステムの入力ボリュームを調整しながら弾いて、システムへの入力信号にオーバードライブがかかりすぎて不要なディストーションがかからない程度に、Bass PODXTからの出力サウンドを最大レベルにします。

[ヒント]：*気に入ったサウンドはなるべく音量を大きくして弾きたいけれど、通常のベースギターと別のサウンドとの音量差、あるいはクリーンなサウンドと濁ったサウンドの音量差も適度に付けたい、というのであれば、うまいバランスを出すために、まず好みのク*

リーンサウンドから設定します。ベースギターを思いっきり弾いた時にディスプレイのCLIPインジケータが点灯しない程度で、各クリーンサウンドの[CHAN VOL]をなるべく高く設定して保存します。次に、各サウンド間のバランスをチェックして、音量が大きすぎるものがあれば他のサウンドと同じくらいになるよう下げます。今度は濁ったクランチ／リード音色を選び、これがクリーンサウンドとうまく噛み合うよう、[CHAN VOL]ノブのレベルを多少低く設定して保存します。あとでBass PODXTを使うときは、[OUTPUT]ノブで出力レベルを必要に応じて設定するだけです。こうすれば、音色間の音量差を心配せずに各種サウンドを切り替えることができます。

電子機器のノイズについて

特にシングルコイルのピックアップのベースギターを使っている場合、ベースギターの近くにあるコンピュータのモニターからノイズがかなり入りやすくなります。CRTディスプレイは一日中、光量子を放射しています。ギターのピックアップはこのモニターが放射する電子磁気を受信し増幅して、オーディオ信号にハムノイズを生じさせます。モニターから離れギターがコンピュータの画面に向かないようにして最小限に抑えてください。それでも狭いスタジオでどうしても録音する必要がある場合、そしてこのモニターによるノイズに悩まされる場合は、次の手段を試してみてください。録音準備をしてプリロールを始めたら、コンピュータの画面の電源を切ります。ベースギターのパートだけ録音したら録音を止めてモニターの電源を入れます。再生してノイズが入っていないか確かめてください。

フラットなLCDモニターではこの問題はありません。ところでLine 6の**Variax**ギターは従来の磁気ピックアップを使用していないので、このようなハムノイズとは無縁です。

ペダル機能

Bass PODXTのオプションとして二種類のフット・コントローラ：**Line 6 FBV**および**FBV Shortboard**があります。詳細は後半の章で説明しますが、どちらのペダルでもBass PODXTのチャンネルを選択したり、エフェクトのスピード、タイム、テンポをタップ入力したり、チューニングモードに切り替えたり、ワウ／ボリュームコントロールとして使用したりします。いずれのペダルも[PEDAL] 6 端子に接続します。以前のLine 6 Floor BoardおよびFB4には対応しておりませんので、ご注意ください。

MIDI機能

MIDI機能を使ったスタジオではMIDIでBass PODXTのコントロールができます。MIDIでチャンネルを選んだり、パラメータを自動設定したりします。詳細は、**「エディットとMIDIコントロール」**の章をお読みください。

Bass PODXT — ライブでのセットアップ

Bass PODXT Proをお持ちの方は本章3-7ページの「Bass PODXT Pro — 接続と設定」に進んでください。

ラックマウント

ステージ上でBass PODXTを手元の便利な場所に置きたい、というのが人情です。オプションのBass PODXTマイクスタンド／アンプトップアダプターを使用するといいでしょう。Line 6のホームページではこのアダプターについてご紹介しています。またそのページでご購入もできます。また買うハメになるの？と思われるかもしれませんが、ライブ演奏中にいろいろ操作したい場合はとても便利です。そうそう、専用のキャリーケースもおすすめです。

セットアップ方法

ライブでBass PODXTを使用する時はさまざまなセットアップ方法があります。Bass PODXTの出力をハウスシステムに直接接続して、マイクやキャビネット、その他のステージ上の機材を使わずに素晴らしいサウンドを聞かせる方法。あるいは、Bass PODXTをパワーアンプ／スピーカーキャビネットに接続して、究極のプリアンプとして使う手もあります。はたまた、ギターとギターアンプの間に入れて、Bass PODXTをアンプのフロントエンドでのトーン・シェーピングとして使用する方法。いずれにしても、まずどんな接続をするのかを、Bass PODXTに教えてあげることが親切というものです。

接続先（WHAT ARE YOU CONNECTING TO?）ページ

3種類の接続先から選択します。まず**[TUNE/SYSTEM]** 24 ボタンを押してから[SELECT] 16 ノブを回して以下の画面を表示します。

STUDIO DIRECT:
直接PAに接続するかモニターシステムを使う場合は、この設定を選択します。**DEST**パラメータの下のソフトボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]** 14 ノブで**STUDIO DIRECT**を選びます。Line 6独自のA.I.R処理によって、、普通のベースアンプやマイク設定では物足りなくなるような、仮想のスピーカー／キャビネット／空間／マイク体験ができます。これならPAシステム全体と同じくらいパワフル。ミックスに入ることも間違いなしです。

LIVE W HORNまたはLIVE NO HORN
コンボアンプ、ヘッドアンプとベースキャビネット、あるいはパワーアンプとベースキャビネットに接続している時に選択します。ホーンスピーカーまたは高域のドライバーがない場合、あるいはオフにして使いたい場合は**NO HORN**を選んでください。システムにホーンスピーカーまたはその他の高域ドライバーがある場合は**W HORN**を選んでください。A.I.R.のマイクコンポーネントはオフになり、キャビネットモデルは選択したセットアップに合ったサウンドになります。
DESTパラメータ設定は記憶されるので、電源を入れるたびに設定しなくてもすみます。これを一時的に別の設定に変えた時は、あとで忘れずに元の設定に戻しておいてください。

アンプでベストなサウンドを出すには

Bass PODXTをコンボアンプに接続するときは、そのアンプが「ニュートラル」の状態から始めてください。つまり、アンプにボリュームコントロールが1つだけある場合は、これを十分低く設定してクリーンなトーンが得られるようにします。このようにしてBass PODXTのサウンドをなるべく混じり気のないピュアなサウンドに保つようにします。ボリュームコントロールのほかにマスターボリュームがある場合は、最初のボリュームコントロールでマスターボリュームを歪ませないように設定します（こうしてクリーンなサウンドを保ちます）。アンプによって多少違うかもしれませんが、クリーンで歪みのないサウンドを得るには、ふつうインプットボリュームをマスターボリュームより小さくします。通常の（パッシブ）トーンコントロールがある場合は、MIDを最大に、TREBLEとBASSをゼロにします（これはほとんどのアンプでは「フラット」なイコライゼーションとなります）。Bass PODXTの音に余分な音色が加わらないよう、アンプを歪ませないでください。アンプ入力時の歪みを避けるためBass PODXTの出力レベルに注意してください。

ベースギターアンプにエフェクトリターン端子がある場合やパワーアンプの入力に直接接続できる端子がある場合は、Bass PODXTの出力をその端子に接続すると、アンプのトーンコントロールをバイパスするのでBass PODXTのサウンドに余分な音色がつきません。エフェクトリターンやパワーアンプの入力に直接接続した場合は、接続先（WHAT ARE YOU CONNECTING TO?」ページで**LIVE NO HORNまたはLIVE W HORN**を選択してください。

外部ペダルとBass PODXT

ベースギターを長年弾いていれば、好みのペダルをお持ちのことでしょう。Bass PODXTとともにお使いになれる最新のエフェクトペダルやラックエフェクトもありますが、これまで使い慣れているペダルもそのまま利用できます。このようなペダルをBass PODXTの前に接続すると、Bass PODXTで選択したアンプモデルによって様々な異なるサウンドが出ます。組み合わせが違うとサウンドも違ってくるからです。ディストーションペダル

からBass PODXTに入る信号レベルを最大に上げると、かなり耳にキツいディストーションがかかる場合もあります。ペダルのボリュームを下げて、Bass PODXTの**[DRIVE]**ノブでゲインを上げるか、Bass PODXT内のエフェクトを使うといいでしょう。

バイアンプモード

Bass PODXTにはバイアンプモードがあります。バイアンプ接続とは、クロスオーバーを使って信号を高域と低域成分に分割し、それぞれを別々のアンプシステムに送信することです。低域は、ワット数の高くスピーカー径も大きいパワーアンプに、高域は小さい径のスピーカー／ホーンへ送信します。Bass PODXTのバイアンプモードではスロープ(SLOPE)とフリーケンシー(FREQ)を選択できます。

Bass PODXTのアンプモードをオンにして設定するには、**[TUNE/SYSTEM]**ボタン **24** を押してから**[SELECT]**ノブ **16** で「BIAMP SETUP」というタイトルのページを表示させます。

SLOPEパラメータの下にある、一番左のソフトボタンを押して次の選択肢の中から選びます。

OFF
バイアンプモードはオフです。モデル信号が[MODEL]端子から、またD.I.信号は[D.I.]端子から出力されます。

6dB, 12dB, 18dB, 24dB
バイアンプモードがオンです。低域成分が[D.I.]端子へ、高域成分は[MODEL]端子へ送られるというメッセージが画面右端に表示されます。

6dB　単極クロスオーバーのゆるやかなスロープで位相と増幅が同期しています。スロープがゆるやかなのは、かなりの量の低域成分が高域成分内に残っており、また同時にかなりの高域成分が低域成分内に残っているためです。

12dB　2次Linkwitz-Rileyクロスオーバーで、6dBの設定よりも低域と高域の分離がはっきりしています。高域成分の経路は位相からはずれています。

18dB　これは3次Butterworthクロスオーバーで、低域と高域の分離がさらにはっきりしていますが、位相と増幅は同期を保っています。

24dB　これは4次Linkwitz-Rileyクロスオーバーで、低域と高域の分離が一番はっきりしています（位相と増幅はフラット）。スロープが急なので、

低域から高域成分をほとんど除去し、一方、高域から低域成分をほぼ除去しています。

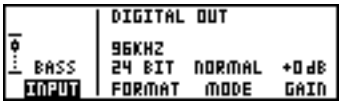
FREQパラメータの下にある、左から2番目のソフトボタンを押して、バイアンプクロスオーバーの周波数（250Hz～1050Hz）を選択します。

Bass PODXT Pro — 接続と設定

USB端子を使うには、Line 6ホームページwww.line6.comでBass PODXT USBドライバ・ソフトウェアをダウンロードしてください。ファイルに含まれているUSBドライバ・ソフトウェアの使用説明もお読みください。

入力の選択

[I/O & DIG SELECT]ボタン**26**を1回押し下記の画面を表示します。ここではBass PODXT Proのアナログ／デジタル入力を選択します。



INPUTパラメータの下にある一番左のソフトボタンを押し、以下から選択します。

BASS INPUT: ベースギターをフロントパネルの**[INPUT]**端子**2**に接続時は、これを選択します。リアパネルのラインレベル入力、デジタル入力は無視されます。

LINE INPUT: Bass PODXT Proに通したい音源がリアパネルの**[Line Level Input]**入力端子**29**に接続されている時選択します。フロントパネルからの入力とデジタル入力のオーディオは無視されます。

AES LEFT/AES RIGHT/AES L+R: リアパネルの**[AES/EBU]**デジタル入力端子**36**を使う時選択します。Bass PODXT Proはモノ入力のみを受け付けるので、**AES L+R**を選択した場合、左右のAES入力がモノになります。フロントおよびリアパネルのアナログ入力はすべて無視されます。

SPDIF LEFT/SPDIF RIGHT/SPDIF L+R: リアパネルの**[S/PDIF]**デジタル入力端子**36**を使う時選択します。Bass PODXT Proはモノ入力のみを受け付けるので、S/PDIF L+Rを選択した場合、左右の**S/PDIF**入力がモノになります。フロントおよびリアパネルのアナログ入力はすべて無視されます。

入力／デジタル出力の設定

[I/O DIG SELECT]ボタン**26**を押して下記の画面を表示させ、入力やデジタル出力の設定を行います。

FORMATパラメータ：

サンプリング周波数、ワード長（量子化ビット数）、クロックソース

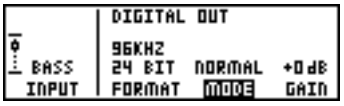
FORMATパラメータの下にあるソフトボタンを押し**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**を回して、16/20/24ビット、44.1/48/88.2/96 kHzの中から選択します。Bass PODxt Proは内部クロックを使って設定サンプリング周波数を発生します。

FORMATパラメータの**MATCH AES IN**または**MATCH SPDIF IN**を選択すると、Bass PODxt Proのクロックは受信した信号のサンプリング周波数に同期して、同じ周波数／ビット数でデータを出力します。

外部機器へのクロック同期：（アナログのBASS INやLINE INなども含め）選択した入力が何であろうと、**FORMAT**パラメータの**MATCH AES IN**または**MATCH SPDIF IN**を選択して、Bass PODxt Proを他のデジタル機器に同期させることもできます。たとえば、デジタルミキサーの出力をBass PODxt Proのデジタル入力に接続して、**FORMAT**パラメータで該当するソースを選択すると、Bass PODxt Proはスレーブ機器になりデジタルミキサーのクロックに同期し、そのデジタルオーディオフォーマットに合わせます。

MODEパラメータ：

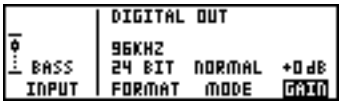
NORMAL/DRY BASS



MODEパラメータの下にあるソフトボタンを押し**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**を回して、**NORMAL**（デジタル出力からアンプ／キャビネット／エフェクト／マイク／ルーム処理したサウンドを出力）か、**DRYBASS**（デジタル出力から未処理のベースギターサウンドを出力）を選択します。詳細は**3-13**ページをお読みください。

GAINパラメータ：

デジタル出力のゲイン増加



GAINパラメータの下にあるソフトボタンを押し**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**を回して、デジタル出力のみのゲインを12 dBまで上げます。ディストーションがあまりかかっていないデジタル信号や、レベルを上げるような設定をしていないデジタル信号の出力レベルを上げます。

注意！

エフェクトのかかっていないベースギターのドライ信号をデジタル出力から録音し、後でBass PODxt Proにデジタル接続でフィードバックして信号をリアンプ処理する場合は、**ゲインをあげずに、**信号レベルを+0 dBに保ったまま、レコーダーからBass PODxt Proのデジタル入力へレベル調整せずに戻してください。これを守らないと、最初に録音した時とは違うレベルで、信号がBass PODxt Proにフィードバックされるので、Bass PODxt Proへの入力ゲインが変わったことで、クリーンなサウンドが得られなくなったり、思ったよりゲインの上がらないサウンドになってしまいます。もちろん、リアンプ中に思いがけない結果を期待している場合は別ですが…。詳細は**3-13**ページをお読みください。

接続先（WHAT ARE YOU CONNECTING TO?）ページ

接続先を3種類から選択します。**[I/O & DIG SELECT]**ボタン**26**を2回押して以下の画面を表示します。

STUDIO DIRECT:

Bass PODxt Proを直接PAに接続するかモニターシステムを使う場合は、**DEST**パラメータの下にあるソフトボタンを押し**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**を回して、**STUDIO DIRECT**を選択します。このモードではLine 6オリジナルのA.I.R. II DSPが起動するので、普通のベースギターアンプやマイク設定では物足りなくなるような、仮想のスピーカー／キャビネット／ルーム／マイク体験ができます。これならPAシステム全体と同じくらいパワフルでミックスに入ることも間違いなしです。

LIVE NO HORNまたはWITH HORN:
ギターキャビネットとパワーアンプに接続している時に選択します。A.I.R.のマイク（MIC）とルーム（ROOM）の要素がオフになり、キャビネットモデルも選んだスピーカーに合わせたサウンドになります。
DESTパラメータ設定は記憶されるので、電源を入れるたびに設定せずにすみます。これを一時的に別の設定に変えた時は、忘れずに元の設定に戻しておいてください。

FX LOOP（エフェクトループ）パラメータ

FX LOOPパラメータの下にあるソフトボタンを押し**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**を回して、ループを**SERIES**（シリーズ）か**PARALLEL**（パラレル）に設定します。

ループを**SERIES**に設定すると、Bass PODxt Proから信号全体がエフェクターに送られ、エフェクターから戻った信号が出力されます。エフェクトをオフにするか出力レベルをゼロにすると、何も聞こえません。ループに接続されたエフェクターのミックスコントロールを使って、ウェット／ドライ信号のバランスを調整します。

ループを**PARALLEL**に設定すると、Bass PODxt Proからループに信号が送られるのと同時に、出力端子にも信号が送られます。サウンドの一部だけがエフェクトを通るので元の音色の輪郭がそこなわれず、この設定を好む人もよくいます。パラレルの時は、ループに接続したエフェクターのミックスコントロールを100%ウェットに設定してください。ドライ／ウェット信号のバランスは接続エフェクターの出力ボリュームコントロールで調整します。

注意：*パラレル設定にすると、満足いくエフェクトサウンドにならない場合があります。これは、エフェクターから戻ってくる信号が、Bass PODxt Pro内でエフェクターに送られなかった信号とフェイズが合っていないためです。これは、外部エフェクトが100%ウェットの設定であれば、ディレイやリバーブでは通常問題ありません。ところが、未処理のサウンドと処理済みのサウンドが混じるモジュレーション・エフェクト（コーラス、フェーズ、フランジなど）、コンプレッションなどでは問題になることがよくあります。このようなエフェクトでは、ループをシリアルに設定した方がいいでしょう。*

注意：*ダイレクト（D.I.）信号だけでループする時も、EFFECTS SEND [MODEL]端子にケーブルを接続してください。接続しないとD.I.ループにはモデル信号とD.I.信号の両方が送られてしまいます。*

ループのオン／オフはFBVフット・コントローラ、または**EDIT**画面の最後のページにあるLOOP ON/OFFパラメータで設定します。このオン／オフ状態はチャンネルと一緒に

保存されるので、ループがオンのチャンネル、ループがオフのチャンネルの両方が共存することになります。

AES/EBUフォーマットとS/PDIFフォーマット

Bass PODxtのAES/EBUとS/PDIFの両方のデジタル出力は常に同時にアクティブとなっており、各デジタルフォーマットに対応した電気特性を持っています。0と1で構成され、AES/EBUおよびS/PDIFフォーマットで転送されるデジタルデータの中身はほとんど同じです。

Bass PODxt Proの実際のデジタル出力端子は常に同じデータを送り出すので、AES/EBU、S/PDIFのどちらでデータをフォーマットするかを、**DIGOUT**パラメータで設定します。デジタル機器のほとんどはどちらのフォーマットにも対応しますが、どちらのフォーマットにするかわかっている場合は、このパラメータを設定してください。

バイアンプモード

Bass PODxtにはバイアンプモードがあります。バイアンプ接続とは、クロスオーバーで信号を高域と低域成分に分割し、それぞれを別々のアンプシステムに送信することです。低域は、ワット数の高くスピーカー径も大きいパワーアンプに、高域は小さい径のスピーカー／ホーンへ送信します。

Bass PODxtのバイアンプモードをオンにしてその設定をするには、**[TUNE/SYSTEM]**ボタン**24**を押してから**[SELECT]**ノブ**16**で「BIAMP SETUP」というタイトルのページを表示させます。

SLOPEパラメータの下にある、一番左のソフトボタンを押して次の選択肢の中から選びます。

OFF:
バイアンプモードはオフです。モデル信号が[MODEL]端子から、またD.I.信号は[D.I.]端子から出力されます。

6dB, 12dB, 18dB, 24dB:
バイアンプモードがオンです。低域成分が[D.I.]端子へ、高域成分は[MODEL]端子へ送られるというメッセージが画面右端に表示されます。

6dB　単極クロスオーバーのゆるやかなスロープで位相と増幅が同期しています。スロープがゆるやかなのは、かなりの量の低域成分が高域成分内に残っており、また同時にかなりの高域成分が低域成分内に残っているためです。

12dB　2次Linkwitz-Rileyクロスオーバーで、6dBの設定よりも低域と高域の分離がはっきりしています。高域成分の経路は位相からはずれています。

18dB　これは3次Butterworthクロスオーバーで、低域と高域の分離がさらにはっきりしていますが、位相と増幅は同期を保っています。

24dB　これは4次Linkwitz-Rileyクロスオーバーで、低域と高域の分離が一番はっきりしています（位相と増幅はフラット）。スロープが急なので、低域から高域成分をほとんど除去し、一方、高域から低域成分をほぼ除去しています。

FREQパラメータの下にある、左から2番目のソフトボタンを押して、バイアンプクロスオーバーの周波数（250Hz～1050Hz）を選択します。

注意：バイアンプモードがオンの場合、Bass PODXT Proのエフェクトセンドはモデル信号とD.I.信号の組み合わせではなく、バイアンプされたモデル信号が送られますので、エフェクトループによって、低域と高域別々にエフェクトをかけることができます。

電子機器のノイズについて

特にシングルコイルのピックアップのベースギターを使っている場合、ギターの近くにあるコンピュータのモニターからノイズがかなり入りやすくなります。CRTディスプレイは一日中、光量子を放射しています。ギターのピックアップはこのモニターが放射する電子磁気を受信し増幅して、オーディオ信号にハムノイズを生じさせます。モニターから離れギターがコンピュータの画面に向かないようにして最小限に抑えてください。それでも狭いスタジオでどうしても録音する必要がある場合、そしてこのモニターによるノイズに悩まされる場合は、次の手段を試してみてください。録音準備をしてプリロールを始めたら、コンピュータの画面の電源を切ります。ベースギターのパートだけ録音したら録音を止めてモニターの電源を入れます。再生してノイズが入っていないか確かめてください。フラットなLCDモニターではこの問題はありません。ところで**Line 6のVariaxギター**は従来の磁気ピックアップを使用していないので、このようなハムノイズとは無縁です。

ペダル機能

Bass PODxt Proのオプションとして二種類のフット・コントローラ：**Line 6 FBV**および**FBV Shortboard**があります。詳細は後半の章で説明しますが、どちらのペダルでもBass PODxt Proのチャンネルを選択したり、エフェクトのスピード、タイム、テンポをタップ入力したり、チューニングモードに切り替えたり、ワウ／ボリュームコントロールとして使用したりします。いずれのペダルも[PEDAL] 端子 **6** に接続してください。以前のLine 6 Floor BoardおよびFB4には対応しておりませんので、ご注意ください。

MIDI機能

MIDIが使えるスタジオではMIDIでBass PODxt Proのコントロールができます。MIDIでBass PODxt Proのチャンネルを選んだり、パラメータを自動設定したりします。詳細は、**「エディットとMIDIコントロール」**の章をお読みください。

Bass PODxt Proでのリアンプ

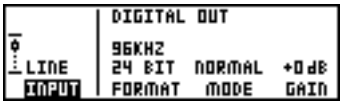
未処理の「ドライ」なサウンドを録音し、ミックス時にこれをエフェクトをかけて処理すれば、音色調整が自在にできます。この過程がリアンプ処理です。これは、リバーブをかけずにボーカルを録音する手法と似ています。ボーカル録音中はリバーブを多少かけてモニターしますが、レコーダーに送られるボーカル信号にはリバーブがかかっていません。このため、ミックス時に最終的なリバーブの音色や量を決めることができます。常にリアンプに頼るつもりはなくても、リアンプできるドライなサウンドと、すでにエフェクトをかけたベースギターサウンドの二種類を録音して、どうしても必要になった時はドライサウンドのリアンプを行うようにすれば便利です。

アナログのリアンプ

いつもの録音と同じ要領でベースギターをBass PODxt Proのフロントパネルの**[BASS IN]**端子 **2** に接続し、Bass PODxt Proの左右の**アナログ出力**をオーディオシステムに接続してモニターできるようにします。ベースギターを弾いてサウンドを確かめます。

次に、リアパネルの**[Unprocessed Bass Out]**端子 **30** をレコーダーのアナログ入力に接続し、録音トラックにパッチします。これがレコーディング後のミックス時にリアンプ処理できる信号です。Bass PODxt Proの左右の出力信号も同時にレコーダーに録音することもできます。

未処理のサウンドが入る録音トラックからのモニター出力を、Bass PODxt Proリアパネルの**[Line Level Input]**端子に接続します。**[I/O & DIG SELECT]**ボタン **26** を1回押し、以下の画面を表示します。



INPUTパラメータの下にあるソフトボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**を回して**LINE INPUT**を選択します。これで、Bass PODxt Proの**[Line Level Input]**端子で受信した信号が処理され、同時に未処理のベースギター信号が**[Unprocessed Bass Out]**端子に送られます。

いつものように音色を調整して録音します。ドライ信号が録音され、同時にアンプ、キャビネット、エフェクト処理されているBass PODxt Pro内のサウンドが聞こえます。録音中にリバーブのかかったボーカルを聞きながら、録音トラックにはリバーブのかからないボーカルが入る、という手法と同じです。

ミックス時にはベースギターサウンドを心ゆくまで調整できます。[DRIVE]ノブを多少上げたり、[Chorus]を抑えたり。あるいはアンプモデルを変えたり、異なるモデルのマイク選択を使ったり。こうして処理したサウンドに満足したら、左右のアナログ出力、またはデジタル出力からレコーディングシステムに録音します。

デジタルのリアンプ

ここではBass PODxt Proのアナログ出力を録音する一方で、ベースギターのドライサウンドをデジタルで録音して、あとで必要に応じてこのドライサウンドを使って音色調整できるようにします。

ベースギターをBass PODxt Proのフロントパネル上の**[BASS IN]**端子に接続し、Bass PODxt Proの左右の**アナログ出力**をオーディオシステムに接続してモニターできるようにします。ベースギターを弾いてサウンドを確かめます。

以下の画面が表示されていなければ、**[I/O & DIG SELECT]**ボタン**26**を1回押して表示させます。

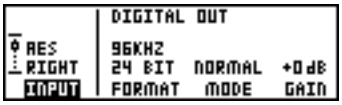
INPUTパラメータの下にあるソフトボタンを押し**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**を回して**BASS INPUT**を選択します。**MODE**パラメータは**DRYBASS**に設定します。Bass PODxt Proの**[AES/EBU]**または**[S/PDIF]**デジタル出力をレコーダーに接続します。レコーディング中に、この信号はモニターしません。この信号はあとで必要に応じてミックス時に調整するためのものです。

GAINパラメータが+0 dBであることを確認してください。録音トラックにこれより高レ

ベルな信号を入れるためにゲインを上げても、SN比が良くなるとか音質が向上することはありません。むしろ、この信号を使って後でリアンプする際に問題が生じてしまいます。これ以上ゲインを上げないようにしてください。

メインのアナログ出力をレコーダーに録音しながら、ベースギターのドライサウンドを別のトラックに録音するわけですが、エフェクトのかかったベースギター信号をモニターしながらパンチイン／アウトするのも、他のアナログ信号をレコーディングソフト／機器に録音するのと同じ要領で行ないます。ここでの特典は、未処理のベースギター信号もデジタル録音されるので、それを使って後でまったく新しいサウンドを作ったり加えたりできることです。

ところで、デジタル録音したベースギターのドライサウンドを利用したい場合は、これをレコーダーからBass PODxt Proのデジタル入力端子に送ります。**INPUT**パラメータは、この例では**AES RIGHT**を選択しています。



この時、ドライサウンドの再生音量を変えないでください。録音されたレベルを変えずにそのままBass PODxt Proに送ります。次に、Bass PODxt Proのアナログまたはデジタル出力をレコーダーに接続し、必要に応じて音色を調整したサウンドを録音します。

サウンドの作成と保存

本章ではBass PODxtでサウンドをエディットする方法について説明します。音色のロードや変更から始まって、アンプ／エフェクトモデルをまったくカスタム化するまでをカバーします。すでにBass PODxtを使いこなしている方でも、様々なヒントやトリックが学べますので、続けてお読みください。

チャンネル・メモリーの呼び出し

最初に電源を入れると、次のような画面が表示されます。

[SELECT]ノブ**16**で16バンク内に分類されているチャンネルを選択します。各バンクには4つのチャンネル・メモリー（A、B、C、D）が入っています。（**8章**では“ 足 ”を使った操作方法を説明します。）

[SELECT]ノブ**16**を回して好きなサウンドを探しましょう。もっとベースをかけたい、もっとドライブをかけたいなど、トーン、ボリューム、**コンプ**用ノブの他に、便利なエフェクトのオン／オフ切り替えボタン、大切なエフェクトのパラメータがすぐに変更できる**[EFFECT TWEAK]**ノブ**14**もあります。

エフェクト設定の呼び出し

Bass PODxtの便利な機能の一つは、カスタムのエフェクト設定を作成、保存できることです。つまり、すでに接続したペダルボードやプログラム済みのラックマウントのエフェクタがすでにあるようなものです。本体内に64個の設定が保存でき、**[EFFECTS]**ノブを回してこれにアクセスします。このノブを回して次々と表示される名前を確認し、そのサウンドを聴いてみましょう。本章後半ではカスタムのエフェクト設定を保存する方法を説明します。

ペダル感覚のコントロール

いつもお使いのペダルと同じような要領で、Bass PODxtの4つのエフェクトがオン／オフできます。**ディスプレイの上にあるボタンを使います。**

EQ：Bass PODxtの6バンド・セミ・パラメトリックEQをオン／オフします。2回続けて押すと、EQの調整ができるエディット画面に入ります。

STOMP：ディストーション・ペダルやその他のペダル・コンプレッサーが入っています。ボタンを押してオン／オフ、2回続けて押すと**エディット画面**に入ります。

MOD：Bass PODxtにはいくつかのモジュレーション・エフェクトをが入っています。このボタンを1回押してロードしたエフェクトをオン／オフし、2回押して**エディット画面**に入ります。

DELAY/VERB：ディレイ、リバーブのモデルが入っています。1回押してオン／オフ、2回押して**エディット画面**に入ります。

エディットの基本操作

ここではBass PODxtの調整方法を説明します。ノブ、ボタン、ディスプレイを使えば詳細な設定がダイレクトに行なえます。元祖PODではコンピュータにつないで詳細設定を行いましたが、このモデルではそれが不要です。

エディットモードに入るには、**[EDIT]**ボタンを押してボタンを点灯させます。次に**[SELECT]**ノブを回すと、どんな設定でも選ぶことができます。ディスプレイに表示されたパラメータの変更は、その下にある**ソフトボタン**を押して、**[EFFECT TWEAK]**ノブを回します。ここで調整した内容は**[SAVE]**ボタンを押して保存先のチャンネル・メモリーを選ぶと記憶されます。

2回押しで簡単なアクセス

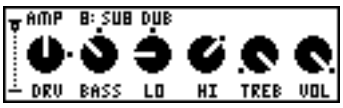
モジュレーション・エフェクトを変更したりディレイを切り替えたい場合は？**[EQ]**、**[STOMP]**、**[MOD]**、**[DELAY/VERB]**ボタンのいずれかを2回続けて押すと、該当エフェクトの最初の**エディット画面**に入ります。もう一度同じボタンを2回続けて押すと、エディット画面から抜け出ます。（ただし**[CAB/A.I.R.]**ボタンだけは1回押すだけで**エディット画面**へ入ります。）

エディットメニューの中身

[EDIT]ボタンが点灯している時は、ディスプレイの左にグラフ（スクロールバー）が表示されています。[SELECT]ノブを回すと、そのスクロールバーの中の四角が上下に動きます。スクロールバーの中の各ドット（点）が、そのエフェクトのEDITページ画面を示します。このバーで、現在の**エディット画面**の位置がわかります。

アンプノブ設定

[EDIT]ボタン点灯時に**[SELECT]**ノブを左に回して、エディットメニューから最初のページ画面を選択します。このページには次のように、現在のチャンネルのノブ設定が表示されています。



ディスプレイ上部にはアンプモデル名も表示されています。ここで**[AMP MODELS]**ノブを回してトーン・コントロールがどのように変化するか見ましょう。これはLine 6のエンジニアたちがアンプモデルごとにプログラムした設定です。これをどのようにカスタム化するかを説明します。

ところでノブのそばにある小さな点が見えますか？これは、最後に保存されたノブの設定位置です。[DRIVE]ノブを回してみてください。ディスプレイ上のノブアイコンも動くはずです。一方、小さな点は移動しないので、保存されている設定との比較ができます。

キャビネット／マイク設定

アンプノブが表示されたら**[SELECT]**ノブを1目盛り右へ回します。（または、直接**[CAB/A.I.R.]**ボタンを押します。）次のような画面が表示されます。

これはA.I.R.の詳細設定画面で、キャビネットとアンプを組み合わせたりマイク設定を調整したりします。

ディスプレイの**CAB**という文字のすぐ下にあるボタンを押してから**[EFFECT TWEAK]**ノブを回してキャビネットモデルを選びます。

同じ要領でマイクを入れ替えたり部屋の空間の広がりを変更したりします。**MIC**という文字の下にあるボタンを押してから**[EFFECT TWEAK]**ノブを回してマイクを選び、**ROOM**の下のボタンを押して空間の広がりを調整します。

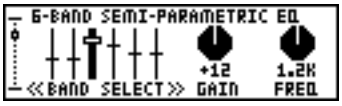
このような設定でA.I.R.と呼ばれる仮想の録音環境によるサウンドを完璧にカスタム化できます。このエディット画面に入るには、**[CAB/A.I.R.]**ボタンを1回押すだけです。

エフェクトのエディット

Bass PODxtのエフェクトも同じようにエディットできます。任意のエフェクトボタンを2回押してエディット画面の最初のページを表示させ、調整したいパラメータの下にあるボタンを押してから、**[EFFECT TWEAK]**ノブで調整します。他のページに移るには、**[EDIT]**ボタン点灯時に**[SELECT]**ノブを回します。左のスクロールバーで現在のページ画面の位置がわかります。

ほとんどのエフェクトパラメーターは2ページに収っており、よく使うパラメータは最初のページにあります。目的のパラメータが最初のページにない場合は、**[SELECT]**ノブを右に一目盛り回して次のページを表示させてください。

[EQ]ボタンを2回押すと、次のようなエディット画面の最初のページが表示されます。



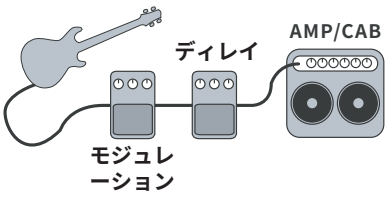
6本のスライダーが画面左半分にあり、Bass PODxtの6バンド・セミ・パラメトリックEQの各バンドのゲイン設定がわかります。左のスライダーほど周波数域が低く、右のスライダーほど高くなり、各スライダーでゲインと周波数を調整します。現在選択されているバンドのスライダーが太く表示されています。BAND **SELECT**表示より左にある2つのソフトボタンのいずれかを押して調整します。

この2つのソフトボタンを両方とも同時に半秒ほど押すとEQがフラットになるので、どのバンドのゲインも0になり、フリーケンシーは初期設定に戻ります。左から3つ目のソフトボタンを押して**[EFFECT TWEAK]**ノブを回すと、選択バンドの**ゲイン**調整ができます。また、一番右のソフトボタンを押して**[EFFECT TWEAK]**ノブを回すと、選択バンドの**フリーケンシー**が調整できます。作業中、いつでも**[EQ]**ボタンを押してオフ（消灯）またはオン（点灯）すれば、エディット中のサウンドと元々のサウンドを比較できます。

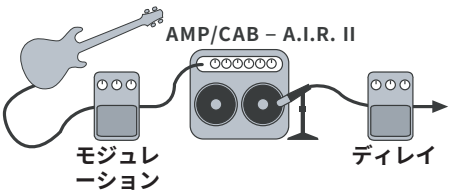
CONFIGパラメータ

EQエディット画面の最初のページで**[SELECT]**ノブを回すと、次のページが開きます。このページにある**CONFIG**パラメータは、信号経路の中でEQをアンプの前**(PRE)**にかけるか、後**(POST)**にかけるかを設定します。**モジュレーション、ディレイ／リバーブ**、ボリュームペダルにも同様の設定があります。裏表紙の見開きに掲載したBass PODxtの信号経路図をご覧ください。

右の図は**MOD**と**DELAY**を**PRE**に設定した場合です。

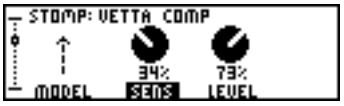


右の図は**DELAY**を**POST**に、**MOD**を**PRE**のままにした場合です。



モデル音色の選択

STOMP、**MOD**、**DELAY/VERB**の各エフェクトには、それぞれ複数のモデルから一つずつ選択できます。**[STOMP]**ボタンを2回押すと、ペダル・エフェクターのエディット画面が表示されます。この画面には一番左に**MODEL**パラメータが入っています。



MODELパラメータの下にある一番左のソフトボタンを押し**[EFFECT TWEAK]**ノブを回して、数々のモデルから選択します。モデルを選択すると初期設定のままでロードされるので、必要に応じて調節します。変更した設定を保存する方法は、4-10ページの「エフェクト設定のカスタムセーブ」をお読みください。

音色をテンポに合わせる

エフェクトにグルーヴ感を与えるカギはノート値です。ノート値は現在のテンポを使用し、計算を行って音楽に完全にノッたディレイタイムやモジュレーションスピードを設定します。たとえば16分音符のトレモロを付点8分音符のディレイに合わせる、という芸当ができるわけです。

以下の手順で、モジュレーションスピードやディレイタイムにグルーヴ感を加えましょう。

1. ディレイの**TIME**パラメータまたはモジュレーションの**SPEED**パラメータの下にあるボタンを押します。
2. **[EFFECT TWEAK]**ノブを左に回して、ミリ秒やヘルツ値が表示されるところに、小さな音符を表示させます。
3. **[TAP]**ボタンを2回タップしてテンポとディレイまたはモジュレーションがタップテンポに合うように設定します。

ディレイがたとえば付点八分音符になるよう設定したら、**TIME**パラメータは次のようになります。

テンポの数値がはっきりわかっていてタップ設定を使いたくない場合は、**[EDIT]**ボタンを押して点灯させ、**[SELECT]**ノブを右一杯に回して**エディット**画面の最後のページを表示させます。このページに**TEMPO**パラメータがあります。このテンポ値は現在のチャンネルのテンポ（拍数／分）で、チャンネル内のノート値を使ったエフェクトすべてもこの設定に従います。

モジュレーションとディレイ／リバーブのクロスオーバー

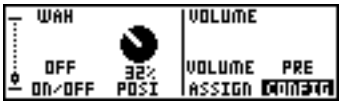
エフェクトは便利ですが、設定次第では腰のないサウンドになってしまうことがあります。特に、低域にエフェクトがかかると、音がたちまち濁ってしまいます。エフェクトをかけてもパンチ力のあるサウンドになるよう、Bass POD XTのMOD、DELAY/VERBエフェクトの信号経路にクロスオーバーを一式入れました。

DELAY/VERBエディット画面の最後のページで**[SELECT]**ノブを右に一目盛り回すと、次のようになります。

MODパラメータの下にあるソフトボタンを押してノブを最小設定まで回すと、**OFF**になりMODエフェクトのクロスオーバーは無効になります。あるいはノブを右に回して周波数を25Hz～800Hzの間で選択します。この周波数より上の信号にはMODエフェクトはかかりません。**DELAY/VERB**クロスオーバーについても同様です。DLY/VERBパラメータの下にあるソフトボタンを押し、ノブで**OFF**を選択するか周波数を設定します。

ワウとボリューム

モジュレーションやディレイ／リバーブクロスオーバーのエディット画面で**[SELECT]**ノブを一目盛り右へ回すと、次のように**WAH**、**VOLUME**パラメータが表示されます。



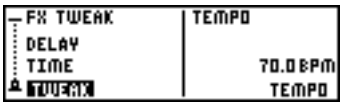
まずワウを見てください。PODユーザーの方々から、ワウのオン／オフ状態をチャンネル・メモリーに保存する機能があるといい、というリクエストを受けました。そうすれば、そのチャンネルを呼び出した時にワウが自動的にオンになるからです。そこで、この機能を取入れました。しかも、ワウの位置も保存できます。この位置設定は**POSI**（ポジション）パラメータの下のボタンを押して**[EFFECT TWEAK]**ノブを回します。

VOLUMEパラメータは、Line 6 EX-1などのエクスプレッション・ペダルをオプションのFBV Shortboardに接続した時の動作を設定します。**PEDAL**パラメータが**VOLUME**に設定されていると、EX-1はBass POD$_{XT}$のボリュームをコントロールし、Shortboard搭載ペダルが専用のワウ・コントロールになります。一方、**PEDAL**が**TWEAK**になっていると、ペダルをヒール・ポジションからトー・ポジションに動かすと、次に説明するように**FX TWEAK**で割り当てたパラメータが最小値から最大値に変化します。

FX TWEAKのノブ機能割り当て／テンポの割り当て

たとえばとても大事なコンサートの真っ最中に、どうしてもエフェクト・パラメータを調整したくなったら・・・。

次の**エディット画面**では**[EFFECT TWEAK]**ノブの割り当てができます。

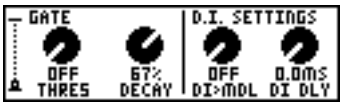


ここでは、チャンネル・メモリー内で**[EFFECT TWEAK]**ノブが調整するパラメータを指定します。**TWEAK**パラメータの下にあるボタンを押して、**[EFFECT TWEAK]**ノブでパラメータを選択します。

ディスプレイの右には、このチャンネル・メモリーのテンポが表示されています。このテンポを使って、ディレイやモジュレーションのタイム／スピードが計算されます。テンポ設定は、**[TAP]**ボタンを2回押すか、TEMPOパラメータの下にあるボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブを回して希望のテンポを指定します。

ゲートの設定

最後のエディット画面ページではノイズゲートとD.I.設定を調整します。**[SELECT]**ノブを右一杯に回すと次のような画面になります。

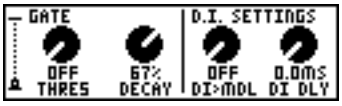


左側の2つはノイズゲートのパラメータで、演奏していない時の不要なノイズを削減します。特に高ゲインのサウンドには便利です。ゲートは通したいものをサッと通すためにすぐに開き、用のないものは通さないよう、すぐに閉るものでないといけません。**THRESH**を最小にするとゲートは無効になります（**THRESH**パラメータの値は**OFF**になります）。**THRESH**パラメータは、どれだけのレベルで演奏したらゲートが開くかを設定します。値が小さいほど（画面のコントロールノブ表示が左に回るほ

ど）、演奏ボリュームが小さくてもゲートが開きます。値が大きいほど（画面のコントロールノブが右に回るほど）、ボリュームを大きくして演奏しないとゲートは開かなくなります。**DECAY**はゲートが閉る速度を設定します。ゲートを急いで閉めるほど足を挟んでしまう可能性が大きくなるように、ゲートによって弾いた音符の尻尾の部分をカットしてしまうことになります。ゲートを閉めるのが遅いと、自分の後に誰か続いて入って来てしまうことがあるように、弾いた音のディケイ部分と一緒に不要なノイズも入って来ることがあります。**DECAY**パラメータの設定は、使用するギター、演奏スタイル、サウンド設定などに合わせて適度になるよう、いろいろと試してみてください。

D.I.設定

[SELECT]ノブを右一杯に回すと、次のD.I.設定用のエディット画面が表示されます。



右の2つがD.I.信号とモデル信号とのミックスを調整するパラメータです。このうち左のパラメータは、D.I.信号の一部をモデル信号経路にミックスするので、そのミックスされた信号がBass PODxtの[MODEL]端子に送られます。**DI>MDL**パラメータの下にあるソフトボタンを押しノブを細小に設定すると、パラメータは**OFF**になり、D.I.信号はモデル信号経路に送られません。ノブを右に回していくと、D.I.信号がだんだんとモデル信号経路にミックスされていきます。これはBass PODxtの[D.I.]端子から出力されるD.I.信号のレベルには影響ありません。

一番右の**DI DLY**パラメータは、モデル信号に対してD.I.信号を多少ディレイさせます。ディレイの程度は1ミリ秒単位です。このディレイはとても小さいので、耳でわからないほどです。でも、このようにディレイをD.I.信号にかけてモデル信号との位相をわずかにずらすと、お互いに位相のずれた2つの信号が組み合わさって、位相が同期しているモデル信号とD.I.信号の組み合わせよりも、すばらしいサウンドがうまれることがよくあります。このディレイのかかったD.I.信号は[MODEL]端子から出力されます。また、モデル信号経路に送られるD.I.信号の量は**DI>MDL**パラメータで調整します。

保存操作

全部で64個の音色がBass PODxtに保存できます。出荷時にはプリセットの音色がすでに入っていますが、自由にエディットして上書き保存してください。まずプリセット音色を試して、どの音色をとっておきたいか、どの音色なら上書きしてもいい

かを決めてください。プリセット音色は後で説明するように、いつでも呼び出すことができます。またwww.line6.comでトーン・トランスファー用データベースをチェックしてダウンロードしたり、逆にあなたの自慢のサウンドをアップロードすることもできます。

チャンネル・メモリーの保存

一番簡単な操作は、チャンネル・メモリーを呼び出して調整し、名前を変更せずにそのままそのチャンネルに保存することでしょう。エディットしたチャンネルをそのまま保存するには、**[SAVE]**ボタンを2回押すだけです。

別の場所に保存したり名前を変更することも簡単にできます。

エディットした音色を新しい場所に保存：サウンドをエディットし、**[SAVE]**ボタンを押します。次のような画面が表示されます。

ディスプレイの**DEST**（デスティネーション：保存先）パラメータの下にあるボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブで別のチャンネル・メモリーを選択します。**[SAVE]**ボタンをもう一度押して保存操作を確定しチャンネル・メモリーに上書きします。

音色の名前を変更：サウンドをエディットし、**[SAVE]**ボタンを押します。上の画面が表示されるので、**カーソル[◄]/[►]**ボタンで変更したい文字の下にカーソルを移動します。**CHAR**（キャラクタ：文字）パラメータの下にあるボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブで文字を変更します。最後に**[SAVE]**ボタンを押して完了します。

アンプモデルのカスタムセーブ

カスタム化した特別な音色ばかりを保存して、これを**[AMP MODELS]**ノブを回すことでロードします。このカスタム化した音色には、キャビネットモデル、マイク設定、ルーム設定も含まれます。これなら、たとえば[AMP MODELS]ノブを回してPLEXI-45モデルをロードしようとすると、実際にはカスタム化されたPLEXI-45（コントロール類もすべて自分用に設定済み）がロードされます。次の手順に従ってください。

任意のアンプモデルを選択し、キャビネットを変更し、ルームを調整、別のマイクを指定します。**[SAVE]**ボタンを押してから[SELECT]ノブで次のような画面を表示させます。

これが**CUSTOM SAVE**（カスタムセーブ）画面です。このアンプモデルと一緒に現在の設定を呼び出せるようにするには、**[SAVE]**ボタンを押します。

アンプモデルと一緒に次のコントロール 設定が保存され、後で[AMP MODELS]ノブを回せばその設定もロードされます。

カスタム化できるコントロール設定
アンプモデル
キャビネットモデル
マイクモデルとルームサイズ
DRIVE、BASS、MIDDLE、TREBLE、PRESENCE設定
チャンネルボリューム

エフェクト設定のカスタムセーブ

すでに述べたように、**[EFFECTS]**ノブを回すだけで、ペダル・ボードやラックマウントの64種類のエフェクトに簡単にアクセスできます。すでにプリセットの設定は入っていますが、たとえば、エディットしたファズボックスを好みに設定したアナログ・ディレイ・ペダルにつなぎ、アンプの後でフェーズをいっぱいにかけて、それをいろんなアンプモデルと組み合わせて何回も使う、という場合は、自分のカスタムエフェクト設定をまず作ってください。そうすれば、カスタム化したアンプモデルとその設定をいつでも組合わせることができます。

[SAVE]ボタンを押し、**[SELECT]**ノブで次の画面を表示させます。

保存先：DEST（デスティネーション：保存先）パラメータの下にあるボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブで保存先を選択します。現在の位置、または64個の位置の中から選択します。

名前：エフェクト設定に名前を付けます。**カーソル[◄]/[►]**キーで、変更したい文字の下にカーソルを移動し、**CHAR**（キャラクタ：文字）パラメータの下にあるボタンを押して、**[EFFECT TWEAK]**ノブで文字を選択します。

保存確定：[**SAVE**]ボタンをもう一度押すと、現在の**COMP**、**EQ**、**STOMP**、**MOD**、**DELAY**、**REVERB**設定が保存されます。

1つのチャンネルの呼び出し

気に入ったプリセットを上書きしてしまっても心配はいりません。以下の手順で好きなプリセットが呼び戻せます。

[**SAVE**]ボタンを押し、[**SELECT**]ノブで以下の画面を表示させます。

もう一度[**SAVE**]ボタンを押して、選択されたチャンネル・メモリーを呼び出します。または、[**EFFECT TWEAK**]ノブを回して別のチャンネル・メモリーを選びます。もう一度[**SAVE**]ボタンを押せば、なくしたプリセットがよみがえります。

プリセット一式の呼び出し

Bass POD$_{XT}$のメモリー全部を出荷時のプリセットにリセットしたい場合は、以下の手順で行ないます。[**SAVE**]ボタンを押し、[**SELECT**]ノブで次の画面を表示させます。

このまま操作を進めていいかよく考え、それでも進めたい場合は、[**SAVE**]ボタンをもう一度押します。これで工場出荷時のメモリー状態に戻ります。

重要注意：この操作によって、すべてのチャンネル、カスタム化されたアンプやエフェクト設定がすべて消えてしまいます。十分注意して操作してください。

MIDIダンプ

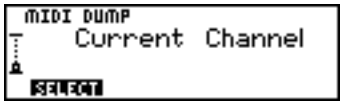
2台のBass POD$_{XT}$間で音色を転送したり、Bass POD$_{XT}$とMIDIデータレコーダー、ワークステーション、コンピュータ、シーケンサーなどとの間で音色をやりとりしたい場合は、MIDIケーブルでBass POD$_{XT}$の**MIDI OUT**と受信機器の**MIDI IN**を接続します。

以下のデータが転送できます。

- **全チャンネル**
- **現在のチャンネル**
- **エフェクト設定**
- **アンプ設定（カスタム設定も含む）**

全チャンネル・メモリーの送信：チャンネル・メモリーを全てMIDIで送信してバックアップします。

[SAVE]ボタンを1回押し、**[SELECT]**ノブで次の画面を選択します。

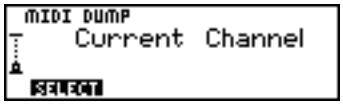


SELECTパラメータの下にあるボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブを左に回してAll Channelsを選択します。

[SAVE]ボタンをもう一度押すと、64個のチャンネル・メモリーがすべてMIDI端子から送信されます。もう1台のBass PODxtが接続されていると、そのBass PODxt内にこのデータが入るので、Bass PODxtチャンネルのクローンができるわけです。

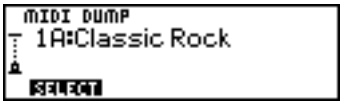
指定チャンネルのみの送信：1つまたは複数の特定チャンネル・メモリー、エフェクト設定、またはアンプモデルだけを別のBass PODxtに転送するには、以下の手順で行ないます。

[SAVE]ボタンを1回押し、**[SELECT]**ノブで次の画面を選択します。



[EFFECT TWEAK]ノブを回して転送したい内容を選択します。

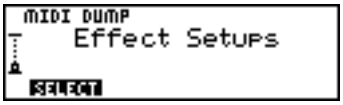
任意のチャンネル・メモリー



全チャンネル・メモリー

全アンプモデル

全エフェクト設定



[SAVE]ボタンをもう一度押すと、選択したMIDIダンプデータが受信側のBass POD XTまたはコンピュータなどのMIDI機器に送信されます。

アンプ＆キャビネットモデル

モデルとなったアンプ＆キャビネットについて

Line 6のスタッフは皆、サウンドを追求して止まないタイプです。あるアンプのソフトウェア・エミュレーションを作ろうとなったら、研究対象となるアンプの中でも最良のモデルを選びます。このように一つ一つていねいに選んだアンプ、スピーカーキャビネットをもとにしてBass PODxtのソフトウェアモデルを作り上げました。

アンプモデルの名前は長年変わらなくても、回路の改善や部品の代替などによって回路設計が大幅に変更されることがあります。たとえば57年、62年、65年、67年、75年、2001年の各アンプは同じモデル名であっても、音色や周波数特性、外観がまったく違うことがあります。

また、同じ回路設計で同じ時代に作られた2つのアンプでもサウンドがみごとに異なる場合もあります。これは、コンポーネントの耐久性等々、の違いによっても影響を受けます。また、年数を経てどんなキャラクターに落ち着くか、というのも個々のアンプによって異なります。それはまるで人間のようで、年とともに性格が丸くなる人もいれば、そうでない人もいます。このような理由から、Bass PODxtのモデルとして選んだアンプは、すべて最高品質のサンプルを手に入れるよう努力しました。また、本書ではアンプサウンドを再現したBass PODxtのモデルを説明する時に、実際にどのアンプをモデルにしたかがよくわかるよう、写真も掲載しています。

[AMP MODELS]ノブを回してアンプとキャビネットの組み合わせを選びます。**[CAB/A.I.R.]**ボタンを押して別の組み合わせを選び、**[EFFECT TWEAK]**ノブを回して別のキャビネットモデルを選ぶことができます。**(第4章**ではこの組み合わせをカスタマイズする方法を説明しています。)

それでは本機内のアンプモデルと、そのもとになったアンプについて説明しましょう。

製品名はすべて該当所有者の商標であり、Line 6社との関わりはありません。製品名、説明内容、写真は、本機のサウンドモデル開発中に研究対象となった製品を説明するためにのみ使用しています。

AMP 360

ラリー・グラハム、ジョン・ポール・ジョーンズ、ジャコ・パストリアスが使用したAcoustic 360がモデルです。独立したプリアンプヘッドを持つ70年代初期のAcoustic 360と、18インチスピーカー1基を搭載したローディングホーンのパワードキャビネットを使用したものをモデリングしました。

ファズ、チューナー付きの360はレッド・ツェッペリンのジョン・ポール・ジョーンズなどおなじみのプレーヤーが選びました。ジョン・ポール・ジョーンズは映画「The Song Remains the Same」でこのアンプを2台つないで弾いています。

ウェザー・リポートのメンバーとしてジャコ・パストリアスは素晴しいベースを弾きました。コンサート中のベースソロでは2台のAcoustic 360、ワウ・ペダル、ラックマウントの青いMXRデジタルディレイ、ジャズベースをすべて駆使して弾きまくり、ソロの終わりにはワウペダルを踏みファズをオンにしてStar Spangled Banner（アメリカの国歌）を弾いたものでした。メローなジャズからギンギンのフィードバックまですべてをこのアンプから作り出しました。

JAGUAR

モデルとなったモンスターは、Aguilar DB750。ハイエンドのベーシストにとっては比較的新しいコレクションの一つです。「ハイエンド」と言っても「高域トレブルを上げる」ということではありません。ロールス・ロイスとかフェラーリ、ACコブラのような高級志向ということです。この手作りアンプは超クリーン、超あったかで、音を隅から隅までつぶさに聞きたいというプレーヤーにとっては格好のアンプです。ギターの弦をマメで堅くなった指先がこするようにすべる音まで聴き分けたい、音にうるさい人っているでしょう。このアンプはニューヨークやロサンゼルスの「一級」セッションベーシストの間で人気があり、ジェーンズ・アディクションやアラニス・モリセット、メソッド・オブ・メイヘムで見せるクリス・チェイニーの、本格派ベースの演奏などで聞かれます。

ALCHEMIST

Alembic F-2Bをモデルにしました。60年代中盤から後半にかけて、サンフランシスコ湾地域は、ある文化のホットな中心でした。いわゆる「サンフランシスコのサウンド」がサマー・オブ・ラブのテーマとなり、地元サンフランシスコのミュージシャンの多くが、ヒッピーの「ピース＆ラブ」ムーブメントの先頭で世界からのスポットライトを浴びました。その舞台裏では、アンダーグラウンドの化学者達だけでなくいろんなやからが必死に魔術に取り組んでいました。エレクトロニクスの専門家、ジム・ファーマン（ファーマン・サウンドの創立者）もその文化のるつぼのど真ん中にあって、ジェファーソン・エアプレーンやグレートフル・デッドのために様々なものを料理していました。グレートフル・デッドやジェファーソン・エアプレーン、その他の当時のバンドの写真をよく見ると、ベーシストやギタリストがFender ShowmanやDual Showmanを、オーディオファンのお気に入り、Macintoshパワーアンプの前につないで弾いているのがわかります。ファーマンが作ったAlembic F-2Bは、Showmanよりクリーンで甘美なサウンドを作り出し、信号経路のフロントエンドを改良しました。Bass PODXTのALCHEMISTモデルを選べば、ヒッピーが絞り染めのTシャツをとっかえひっかえ着替えるよりも早ワザで、懐かしのサマー・オブ・ラブ風サウンドの数々を再現できます。それから、忘れてはならないのは、Alembic F-2Bはスタンリー・クラークも愛用していたことです。また、世界に名高いスタジオのラックでも頻繁に使われており、ベーシストやエンジニア、レコードプロデューサーたちにとって、ワールドクラスのサウンドを約束してくれるアンプです。

ROCK CLASSIC

ここ30年間、力強いAmpeg SVTのトーンを耳にし、そのパワーを肌で感じてきました。このアンプは世界中の様々なレコーディングやアリーナに登場しています。オリジナルのSVTや300ワットの純粋のチューブアンプとは比べ物になりません。（ところでSVTのチューブを交換するには、Bass PODPROを購入するより費用がかかります。）最初に登場したのは1969年7月で、パンチ力あるスタンダードでパワフルなベース機材としてそのトーンを確立しました。ローリング・ストーンズからヴァン・ヘイレンまで様々なロックベースプレーヤーが使用しています。

Bass PODXTのモデルとなったのは1974年型Ampeg SVTと70年代のSVT 8X10スピーカーキャビネットの組み合わせです。このヘッドとキャビネットの組み合わせで、かなりの大音量が出ましたが、難点は人の手を借りないと動かせなかったこと。でもBass PODXTならギックリ腰にならずにクラシックなロックのベースサウンドをガンガン鳴らすことができます。

FLIP TOP

60年代Ampeg B-15をモデルにしました。これはいつの時代でも最も人気のあるスタジオベースアンプの一つです。木の素材を厳密に選択した、フロントポート／背面クローズのアンプで、25ワット、15インチのスピーカー1基を搭載しています。このアンプはトーン、キャビネット／スピーカー効率、低域増幅の音色と簡易性における新しいスタンダードを確立しました。その特徴をよく表しているのが1960年代のモータウン／タマラレコードでベースをプレイしているジェームス・ジェマーソンのサウンドです。さらに、シュープリームズ、フォー・トップス、テンプテーションズ、マーヴィン・ゲイ、スティービー・ワンダー等でも聞けます。ジェマーソンはモータウンのヒット曲を他の誰よりもたくさん弾いています。彼のアンプはAmpeg B-15でした。レコードで聞いてみるとそのアンプを通した彼のPベースサウンドが、35年前とは思えないほど新鮮で生き生きとしています。

ADAM AND EVE

デービッド・エデンはSWRのキャビネットを3〜4年間作っていましたが、その後独自のベースアンプとキャビネットを作るようになりました。ジム・デミーターが最初のEdenアンプを設計し、これがまたたく間に広まりました。このADAM & EVEアンプモデルはクリーンでリッチなトーンを生むデービッド・エデンのWT-300からインスピレーションを得ました。

TWEED B-MAN

58年型クラシックのFender Bassman 4x10コンボはすぐにプレイできるアンプでした。もともとはベースアンプでしたがBassmanは6弦ギタリストのブルースの象徴になりました。ドライブ設定を最大にすると、真のベースのオーバードライブが再現できます。また、低域端をもっと出したい場合は、8x10など多少大きなキャビネットのモデルを選択してください。ベースアンプのファットな超低域が出るとともに、高域はFender特有のビヨンビオンしたカントリーっぽい音が聞こえます。たまたま、ジム・マーシャルがケン・ブランと一緒に最初のアンプを作ったときも、このBassmanの初期モデルに大いに影響されました。Bassmanの面白い特長の一つが、中域と高域のコントロールが相互に影響し合

うということです。中域コントロールはふつうのトーンコントロールによく見られるのと違ってバンドパスではありません。高域コントロールがもう一つあるような感覚なのです。この両方が付加されるので、**[MIDDLE]**ノブを半分以上に高く設定すると、**[TREBLE]**ノブで調整する高域が思わぬほど明るくなってしまいます。一方**[MIDDLE]**ノブを低くした場合は**[TREBLE]**をブーストしたほうがいいでしょう。迫力あるベースサウンドにするには、前述したように[DRIVE]ノブを一杯にあげて、これでもか、というヘヴィーなフレーズを弾いてみてください。

SILVERFACE BASS

68年、ビートルズがホワイトアルバムをレコーディングした頃には、Voxアンプをやめて Fenderのシルバーフェイスの新製品を使っていました。ジョン・レノンとジョージ・ハリスンはTwin Reverbを、またポール・マッカートニーは2X15の背の高いBassmanを使用しました。このアンプはビートルズが解散するまでポールのお気に入りで、ビデオRevolutionや（キャビネットは横に寝かせて設置）、映画Let it beでも（映画の終わりのあの屋上でのコンサートでも）みられます。ポールはそのアンプを最初のソロアルバムと、初期ウイングスでのライブでも使用しました。そこで、Bassmanヘッドアンプと、JBL搭載、2X15背面クローズのキャビネットを組み合わせました。このキャビネットのサウンドは、カウボーイが悪者を追っかける時のような勇ましい音楽にピッタリで、たとえばバーニー・ミラー（警官が主役のコメディー番組）からのテーマ音楽や、高校のジャズアンサンブルと一緒に練習した日々を思い出させます。あるいはピーター・ガン（カウボーイの番組）のテーマを知っている人は、これを試してみるといいかも。

DOUBLE SHOW

まともなドラマーがまともなドラムセットを力一杯叩いている傍らで、自分のベース音が聞こえるよう音量を上げた時に、音が歪まないFender Bassmanがあったらなあ、と思ったことはありませんか？アラジンの魔法のランプのように、Fender Dual Showmanは願いごとをかなえてくれます。グレートフル・デッドのフィル・レッシュをはじめとしてBassmanを使った人たちは、もうひと押しアクセントを付けて音がしっかりドンッと聞こえるよう、Dual Showmanを一度は使ったものです。Bassmanよりも多少明るい音色で、2X15のキャビネットを組み合わせたDual Showmanは、多くのロックンローラーの愛用の機材となりました。どのジャンルのバンドでも、規模とボリュームがますます大きくなり、Dual ShowmanもファンクやR&Bのプレーヤーに人気のアンプとなりました。

EIGHTIES

ベースアンプのコレクションと言えばGallien-Krueger 800RBを見逃すわけにはいきません。このアンプがBass PODPROのEIGHTIESのモデルとなりました。80年代当時としては新しいベースアンプのサウンドでした。ゲディー・リーも持っています。またウイル・リーはアメリカの深夜トークショー番組でおなじみのデービッド・レターマンでも使いました。デフ・レパードもポップ・メタルの時代をこれで駆け抜けました。

Gallien-Krueger 800RBはスプーンですくったような周波数曲線を持つサウンドで、ほとんど歪みません。このアンプと、もう一つ80年代の伝説的なキャビネットHartke 410を使ってモデリングしました。このキャビネットは「80年代中ばのメタルベース」トーンを生むことで有名です。

Hiway 100

Hiwatt DR-103をモデルにしました。「本物」のベースにはかなりのワット数が必要だと、楽器用アンプのデザイナーが悟るようになるまでは、ベーシストたちは少なくとも音が聞こえるよう、パワーの足りないベースアンプの限られた選択肢から必死で探したものです。それでも、たまにはパワフルでクリーンなギターアンプに行き当たり、それをベースアンプとしてけっこう活用しました。ザ・フーの今は亡き偉大なベーシスト、ジョン・エントウイスルがステージ上でキース・ムーンのドラムの前を横切って「ピート、キミのHiwattを使ってみてもいい？キミたちの音でベースの音が聞こえないんだよ。」と言った時代があったのです。

Hiway 200

Hiwatt 200 DRをモデルにしました。SVTのサウンドをもっと明るくしアタックも加えれば、この200ワット／30キロ以上の怪物サウンドになる、と考えてください。この素晴らしいサウンドを頭の中で描きながら、60年代、ロックンロールがハードロックに変形していった頃を思い出してみましょう。あのころ、音楽はどんどんボリュームアップ、ヘアスタイルもロングが更に伸びていきました。このアンプは米英ともにローエンドのベーシストにとって一番の選択肢でした。アメリカのミュージシャンならフロントがシルバーのSVTを懐かしく思い浮かべます

が、イギリスではこのHiwattを懐かしがるようです。ブラック・サバスのギーザー・バトラーのお気に入りで、ジェスロ・タルのグレン・コーニックはバンドの全盛期に200 DRを多用したようです。今日まで、多くのアメリカのロックミュージシャン、ことにブリティッシュハードロックにかなりの影響を受けたプレーヤーたちも、Hiwatt 200 DRを気に入っています。チープ・トリックのトム・ピーターソンにとっても「一番のアンプ」で、彼の8弦／12弦ベースから出るあのうなるような轟音には欠かせないものでした。Hiwatt 200をBass PODXTで選んで、アクアラングを着けて思いっきりブリティッシュロックの深淵へダイビング気分！

BRITISH MAJOR

のモデルにはLine 6社内にあった1969年型Marshall Majorを研究しました。調べ始めた段階で、この社内のアンプには間違ったチューブが入っていることがわかり、ヴィンテージのKT-88を探すことになりました。国内の専門家に頼んで「新品」の30年前のチューブを探してもらいました。数ヵ月経ってやっと見つかり、オリジナルのMullardのセットでアンプの研究を再開しました。純正のチューブを純正のアンプで使用すると、これほどサウンドに違いが出るとは！ チャンネル1のインプットをチャンネル2のインプットに通し、高／低チャンネルを組み合わせました（これはベーシストやギタリストがよくやるワザです）。ドライブ設定を高くすると、クリームのレコードや同時代によく耳にしたあの暖かい自然なオーバードライブトーンが聞こえます。

モデルで使用したキャビネットは76年型Marshall 3X15キャビネットです。このサウンドはユニークで素晴しく、Majorアンプとこのキャビネットの組み合わせでSUPER BASSをもとにしたBRIT SUPERモデルより多少暗めの音になります。

BRITISH BASS

1968年型Marshall Super Bass“ plexi ”（ヴィンテージEL-34チューブ搭載）をモデルにしました。Super Bassは一般的にMajorよりも明るく、ドライブ設定を高くするとサウンドが多少ぼやけた感じになります。この時代のMarshallアンプはイギリスのバンドの多くが使用しており、ジョン・エントウイッスル（フー）、アンディー・フレージャー（フリー）、ノエル・レディング（ジミ・ヘンドリクス・エクスペリアンス）、ロン・ウッド（ジェフ・ベック・グループ）、ジャック・ブルース（クリーム）、ティ

ム・ボガート（ヴァニラ・ファッジ）、ロジャー・グローバー（ディープ・パープル）らのサウンドでも聞けます。

このモデルに使用したのが1967年型Marshall 4X12（Rola以前の20ワットCelestionグリーンバック使用）です。このキャビネットはこれまで聞いた中でベストです。暖かく木質の感覚が伝わってくるので、Line 6のスタジオにもありますが、誰もが気に入っています。

CALIFORNIA

これは80年代後半に登場し、500ワットのClass A/B作動、12個の5881アウトプットチューブ、4つの12AX7プリアンプチューブ、シングルチャンネル、音量／低域／中域／高域＋ブライトスイッチ、マスター音量、7バンドのグラフィックイコライザー、パラレルループを特長としています。Bass 400+は10年以上もBoogieのベースアンプの中心的な存在でした。マイケル・アンソニー（ヴァン・ヘイレン）、フリー（レッド・ホット・チリ・ペッパーズ）がツアーで使用しています。マイケル・アンソニー（ヴァン・ヘイレン）、フリー（レッド・ホット・チリ・ペッパーズ）がツアーで使用しています。様々な演奏スタイルに対応する、暖かでダイナミック、純朴なサウンドが特徴です。

JAZZ TONE

Polytone Mini-Bruteをモデリングしたクラシックなトーンです。過去40年間、結婚式のスタンダードやラウンジ用音楽に向いたコンボとして知られています。オリジナルのアンプは15インチのスピーカー1基のみを搭載。これが「親しみのある」「落ち着いた」サウンドを生みます。「内省的」なムード作りに最適です。

STADIUM

ジミ・ヘンドリックス、ノエル・レディング、ピート・タウンゼント、ジョン・エントウイッスル、トニー・アイオミ、ギーザー・バトラー等などが使用し、もちろんWoodstockアルバムの機材リストを見てもわかるように、ウッドストックでも使われました。Sunnアンプが早期ロックミュージックにどれだけのインパクトを与えたかがわかります。面白いのは、このアンプは、コンラッド・サンドホームが兄のノームのために開発したものなのです。当時ノーム・サンドホームは「Louie Louie」で有名なキングスメンのベースでした。このSTADIUMモデル音色と、フロントに12インチのスピーカー、18インチの上向きスピーカー搭載のユニークなSunnのキャビネットを組合わせれば、悩ましい魔法の世界が体験できます。

STUDIO TONE

SM-400を更にたくましく洗練したモデルで、SWRが出した「コンテンポラリー・クラシック」の最新版です。SM-500はコンテンポラリーなベースアンプでも評判／人気のあるアンプの一つで、フルレンジのトーンを提供、特にその高域に特徴があります。この特徴によって、SM-500はどのジャンルでも「スラップ／ポップ」奏法のプレーヤーの人気の的となりました。たいへん人気があるので、コンサートでもスタジオでもどこでも使用されています。元レッド・ツェッペリンのジョン・ポール・ジョーンズも現在使っています。

MOTOR CITY

素晴しいベースアンプの伝説を探究しているうちに、失われた宝を見つけました。Versatone Pan-O-Flexです。シングル12インチのコンボで60年代後半にボブ・ホールが設計し、RCAスタジオなどロスのスタジオでよく使われました。キャロル・ケイはVersatoneアンプを数え切れないほどのセッションで使い、ジャック・キャシディーはSWRアンプと一緒に今でも使用しています。背面密閉のコンボで、内部も遮断されており、実際よりも大きく聞こえます。1/3ほどに上げると暖かいトーンが得られ、それより更に高くするとサスティンを伴ったディストーションになります。

MOTOR CITYモデル音色を選ぶと、音のレンジが[DRIVE]ノブで調整できます。このサウンドの実在感には誰もが納得するハズ。このサウンドがキミの懐刀になるかもしれません。[BASS]ノブと[TREBLE]ノブでクラシックなPan-O-Flexサウンドに調整ができるので、その場合[LOW MID]と[HI MID]のノブは12時の位置に設定してください。次に、Pan-O-Flexサウンドに独自の色合いをつけるには、[HI MID]、[LOW MID]ノブを上下させて、モデリング後の信号をブースト／カットします。

BRIT CLASS A100

Brit Class A100モデル音色は、Vox AC-100をモデルにしました。これは、ポール・マッカートニーが自分のVox T-60を拡張して1965年に使い始めたアンプです。たとえばニューヨークのシェイ・スタジアムでのコンサート、ハリウッドボウルのコンサート、1965年のエド・サリバン・ショーなどです。飾り気のない低域と心地よい高域を特徴としています。Vox AC-100を使ったことがあれば、このアンプに奇妙な癖がいくつかあることをご存じでしょう。そのうちの目立つ癖は、BASSノブが逆方向に機能すること。つまり「低域カット」用のノブなのです。モデルとなったアンプに忠実に再現するよう努力はしていますが、使いやすさを優先するため、このノブは右に回せば低域がブーストされ、左に回せばカットされるようにしました。AC-100のようにBass POD PROの**[BASS]**ノブを逆に回す設計にすると、「あれ？どうもおかしいんじゃないの」と首をかしげる人も出てくるでしょう。そこで設定を上げるほど低域をブーストするようにしました。AC-100のノブと同じレスポンス曲線、周波数コントロールもできます。

Line 6のオリジナルモデル

むかしむかし、エレキベースはあってもベースアンプのない時代がありました。ベースプレーヤーは何でもいいから音を増幅できるものに接続するしかありませんでした。Line 6の巨大なアンプ博物館と大胆なミュージシャンのアプローチも手伝って、私たちは、いろんなことを試し始めました。ギターアンプにベースを接続したらどうなるだろうとか、技術上の細工をしてベースアンプを作ったりとか。こうして、ギターアンプを基にしたベースアンプ、ベースアンプを基にしたギターアンプが数々出来上がりました。物理学の法則と洗練されたセンスによって自由なアイデアが生まれ、もともとはギターアンプのモデル音色だったサウンドや残り物の音色が、立派なベース音色となって皆さんを待ち受けています。

L6 CLASSIC JAZZ

Roland JC120のサウンドを思い浮かべれば、なるほど、とうなずけます。クリーンさ、正確さという特徴で好評を得たアンプです。この2つの特徴は、どんなジャンルのベーシストでも追求しますよね？[CAB/A.I.R.]ボタンを押して、L6 CLASSIC JAZZモデルと8X10 SVTキャビネットモデルを組み合わせてみましょう。

L6 BRIT INVADER

A級アンプのオーバードライブはB級アンプと違うので、頼りになるベースをVox AC 30 Top Boostに接続しました。あの超珍しい青い背面のスピーカーを尊敬するあまり（そして、スピーカーを吹っ飛ばしてしまうことを恐れて）、愛するVoxをMarshall Major 4X15キャビネットの上に置きました。これが思いがけなくビビンッと鳴るサウンドを生み出しました。これならベースやBass PODxtでの音色調整にしっかり反応してくれるはずです。わずかな調整で、どんなサウンドをも突き抜ける超高域から、ジョー・ミークを鼻高々にさせるような包容力と勢いのあるヴィンテージのサウンドまで変化します。

L6 SUPER THOR

ヴィテージの機材に囲まれているあなたなら、背面オープンの小型コンボアンプでベースを弾こうとは思わないでしょう。ところが私たちが最初にベース接続したのがそれだったのです。でも、思いがけないことをするのが好きな私たちですから。とにかく、このSUPER THORというモデル音色は、Supro Thunderbolt、Line 6のベースアンプデザイン、初期レッド・ツェッペリンで有名なSupro S6616をもとにしました。ジミ・ヘンドリックスもSupro Thundreboltを使ったようです。このアンプをスタジオで適切にマイキングすれば、ジミ・ヘンドリックスのビッグなギターサウンドを搾り出せるのであれば、ベース用アンプでもあんな風にビッグなすばらしいサウンドが出せるのでは、と思ったのです。お好み風に音色をアレンジしたら、弦を強く弾くほどビンビンとファズっぽくなるのがわかるはずです。また、SUPER THORは、Bass PODxtのシンセ／フィルターのモデルにも暖かみを加えます。

L6 FRANKENSTEIN

サスティンでいっぱいの、暖かくてもやもやっとしたベースサウンドが夢のサウンド？もしそうなら、その夢が実現します。Line 6のサウンドデザイナーたちがJTS 400-Sをどうやって料理したのかわかりませんが、極秘の処方箋によると、MarshallとFenderを掛け合わせてフランケンシュタインが生まれたそうです。ということは、100ワットのPlexiのフロントを、Dual Showmanのパワーセクションに継ぎ木したようなものでしょうか。とにかく、Line 6のトーン・ラボでよく見かける、ケープとおかしな帽子を着けた音の魔術師たちは、まろやかでモワーッとしたベースを念頭に置いて作り上げたのです。作ってよかった〜！というサウンドです。

L6 EBONY LUX

Fenderのブラックフェース・デラックスにヒントを得ました。ふつう、ベースには使われませんが、このギターサウンドの神器にベースを接続すると、とても楽しい体験ができます。高域端はとってもクリアー、超低域は透明、中域はほどよくへこんで、つつましやかなベース音になります。大事なギターサウンドや優美なピアノサウンドの邪魔になるものは要らん、という気難しいシンガー・ソングライターの伴奏をしている時でも、この音色なら邪魔にならず、すんなり溶け込みます。

L6 DOPPELGANGER

Fender Twinを多少参考にしました。ドップラーギャンガーとは、世の中のどこかに存在しているという、自分と全く似た双児（ツイン）のことで、このモデル音色はFender Twinのドップラーギャンガーというわけです。低域がしっかり聞こえるとともに、耳に馴染むほどよい震えを高中域に入れています。このモデル音色と、そのユニークな特徴を強調するには、背面オープンのスピーカーキャビネットを選んでください。

SUB DUB

この素晴しいサウンドをもたらしてくれたのは、ベック、トリ・エイモス、その他有名なミュージシャンのバンドでベースを弾き、現在はアイマ・ロボットという自分のバンドを率いるジャスティン・メルダル-ジョンソンです。最初のBass PODを作成中に、ジャスティンはラックマウントした自分の機材をLine 6のスタジオに持ち込んで、研究材料として使わせてくれました。その結果できあがったアンプモデルが初代のBass PODに入り、その音色は人気の的になりました。ヒップホップ、エレクトロニカ、トランス、ユーロダンス、レイヴ、その他あらゆるオールタナティブの音色にピッタリです。ドライブ設定を低くするほどクリッピングが生じません。逆にドライブを上げるほど、かなりの矩形波ディストーションが生じて、シンセ・プレーヤーからも羨望のまなざしを受けます。ジャスティンの弁によれば・・・

「このサウンドはMoogよりもずっと深く、とことん低く出したいときとか、808よりもハードにロックしたいときにピッタリ。基本的なトーンで濁りのないきわめて純粋な音を作り出してくれる。18インチのスピーカーを搭載した優れたベースアンプの前に立っているような体験ができる。このサウンドはマッシブ・アタック、Dr. Dre、デアンジェロ、アフェックス・ツイン、キング・タビー、フューチャーサウンド・オブ・ロンドンなど超低音のチャンピオンたちからインスピレーションを得たよ。」

TUBE PREAMP

「PODを手にしたら、きっといろんなことに使いたくなるはず。キーボードサウンドを暖かめにしたり、ドラム音をピシッと決めたりボーカルにファズをかけたり、」と

いうわけでこのモデルを作ったのです。プロデューサーやエンジニアがスタジオでヴィンテージのチューブを使ってよくやるように、どんな音源でも暖かみのあるサウンドにします。ボーカルに切れ味がほしい場合は、ボーカルトラックをPODに通します。あるいはシンセベースのトラックをBass PODPROに通してドライブとEQコントロールを上げて好みのサウンドに仕上げます。このモデルはベースアンプモデルではありませんが、素晴しいベースサウンドも使えます。この場合はリバーブのミックスノブのように、処理したい量をコノントロールするのに使います。PODに通す前のサウンドと通した後のサウンドをミックスすると音がムラになるので、それは避けましょう。その代わり音源を直接Bass PODPROに入れてから、Bass PODPRO処理後のサウンドだけをモニターします。トーンコントロールが12時の位置でEQがフラットになります。

BYPASS

モデル音色が不要なときは、これを選びます。アンプ音色の入らない、Bass PODXTのエフェクトのみのサウンドになります。

キャビネットモデル

Bass PODxtでは次のキャビネットモデルが使用できます。**[CAB/A.I.R.]**ボタンを押したまま**[EFFECT TWEAK]**ノブを回して選んでください。

Cabinet Model	**ベースにしたモデル**
1x12 Boutique	1x12 Euphonics CXL-112L
1x12 Motor City	1x12 Versatone Pan-O-Flex
1x15 Flip Top	1x15 Ampeg B-15
1x15 Session	1x15 SWR Big Ben
1x15 Jazz Tone	1x15 Polytone Minibrute
1x15 Amp 360	1x18 Acoustic 360
1x18 California	1x18 Mesa Boogie
1x18+12 Stadium	1x18+12 Sunn Coliseum
2x10 Modern UK	2x10 Ashdown ABM 210T
2x15 DoubleShow	2x15 Fender Dual Showman D130F
2x15 California	2x15 Mesa Boogie
2x15 Class A	2x15 Vox AC-100
4x10 Line 6	4x10 Line 6 Original Model
4x10 Tweed	4x10 Bassman Combo w/ new speakers
4x10 Adam Eve	4x10 Bassman Combo
4x10 SilverCone	4x10 Hartke 410
4x10 Session	4x10 David Eden
4x12 Hiway	4x12 Hiwatt Bass Cab
4x12 Green 20 's	4x12 1967 Marshall Basketweave with Greenbacks
4x12 Green 25 's	4x12 1968 Marshall Basketweave with Greenbacks
4x15 Big Boy	4x15 Marshall Major
8x10 Classic	8x10 Ampeg SVT Cab
キャビネットなし	ギター以外の音源にチューブのプリアンプを使うときのキャビネットモデル。アンプモデルでTUBE PREAMPを選択すると、初期設定でこれが選ばれます。

製品名はすべて該当所有者の商標であり、Line 6社との関わりはありません。製品名、説明内容、写真は、本機のサウンドモデル開発中に研究対象となった製品を説明するためにのみ使用しています。

ペダル、モジュレーション、ディレイ／リバーブのエフェクトモデル

エフェクト大好き人間集まれ！

ペダル・エフェクターが好きじゃないベーシストなんていないはず、PODxtにはLine 6のDM4 Distortion Modeler、MM4 Modulation Modeler, DL4 Delay Modelerの当社フラッグシップコンボ類から採用したすばらしいペダル・エフェクターのモデルが搭載されています。また、さらにピンポン、ステレオディレイ・エフェクトも搭載しています。

本章ではモデルとなったオリジナルのペダル・エフェクター、モジュレーション、ディレイ／リバーブエフェクトについて説明するだけでなく、その調整方法もご案内します。基本操作を第4章「サウンドの作成と保存」ですでに学んだものとして、ここでは各モデル音色についての詳細に入っていきます。

ペダル・エフェクターのモデル

Bass PODxtは美味しいペダル・エフェクターのモデルを取り揃えています。このエフェクトは基本的に次の2種類に分かれます。

（1） ディストーションとオーバードライブ

（2） コンプレッサー・ペダル

ディストーションとオーバードライブ

ディストーションのかかったベース音を最初に聞いた時の感激を今でも覚えていますか？ビートルズのアルバム「Rubber Soul」でポール・マッカートニーの名前が「Paul on Fuzz Bass（ファズ・ベースのポール）」となっている曲「Think For Yourself?」でしょうか。それとも、クリームのベース、ジャック・ブルースのオーバードライブがかかったMarshallサウンドでしょうか。はたまた、スピリチュアライズドやマイ・ブラディー・バレンタインなどのポスト・モダン・クラシックのサウンドでしょうか？いずれにしても超低域の魅惑の咆哮音は無視できません。歪みがかかってオーバードライブされたベースサウンドは、近代の音楽ではそこらじゅうで聞かれます。ヒップ・ホップからトリップ・ホップ、サイケデリック・トランスにいたるまで、ディストーション／オーバードライブのかかったベースが、ミックスシーン、ライブシーンでそこかしこに目立ってきています。「ドラム＆ベース」という音楽用語がよく使われているのを知らない方は、おそらくこの10年間、眠っていたのでは。

Bass PODxt、Bass PODxt Proにもディストーション／オーバードライブが搭載されているので、ファンクサウンドにもファズがかけられます。

ペダル・エフェクター：コンプレッサー

コンプレッサーは、サウンドレベルの高低を比較的なめらかにする役割を持っています。このため、レベルの高いサウンドがそれほどうるさくならず、レベルの低いサウンドが高いサウンドレベルに近付きます。その結果、ギターを弾いた時に音が減衰していく部分のレベルをブーストして、音のディケイ部分を長くします。つまり、アンプの前でコンプレッサーのペダルを踏むと、サスティンが強調されるわけです。おまけに、コンプレッサーによってアタック部分の粒が揃い、ゲイン補正でレベルを上げることもできます。（つまり、アンプのフロントエンドで強く弾いても、ふつうならアンプへの入力レベルをブーストするとディストーション・ペダルが生み出すようなディストーションが生じません）。PODxtには数々のコンプレッション・ペダルのモデルが入っていますから存分に楽しんでください。

ではオーバードライブとディストーションから説明しましょう。

BASS OVERDRIVE

Tech 21 Bass Sansアンプをもとにして、Line 6のサウンドデザインチームがアイデアを広げました。Sansアンプはどんな状況でも静かですがすがしいサウンドを出す一方、とても上品なディストーションも提供するので有名です。金属的でしかも不快感のない音質は、ポスト・メタルファンやインダストリアル・バンドに受け、あらゆるジャンルのプロデューサーも、クランチーなループサウンドを作るために、このBass Sansアンプを愛用しました。BASS OVERDRIVEもだいたい同じですが、Line 6風に味付けしてあります。このディストーションなら、たちまち仲良しになります。

SCREAMER

スティービー・レイ・ボーンからマイケル・ランドウまで、シンプルなIbanez Tube Screamerは世界中でよく耳にするオーバードライブです。このゲインが中程度のペダルは80年代初期に登場しました。ブルース仲間の間では、これを使わずにソロをプレイするのは厳禁になっています。

何年もわたって、Ibanezはこの尊敬すべきTube Screamerの様々なバリエーションを作りましたが、いずれも、TS-808（写真のモデル）のようなステータスを築くことはありませんでした。もちろん、ヴィンテージの808のどれをモデリングするかを

じっくり考えましたが、結局この緑の宝石をモデルにしたら、PODxtには貴重なアイテムになるのではないかと思ったのです。

CLASSIC DIST

70年代後半に生まれ育ったProCo Ratは、ディストーションボックスの新世代の始まりでした。ファズよりも怒ったような攻撃的なサウンドは、次第に頭角を現わしてきた新しいタイプのメタルバンドで使われるようになりました。

Ratは様々な仕様変更を経てきましたが、全員一致で選んだのは、写真のモデルです。この2つのRatは同じ基板を使っており、回路もまったく一緒です。（モデリングには小さい方を使いました。）

PODxtのRatモデルでの**[TONE]**ノブはオリジナルのフィルター・コントロールと同じで、設定を低くすると明るいサウンドに、設定を高くすると暗いサウンドになります。一度使ってみれば、Rat（ねずみ）の名の通り「食い込む」ようなサウンドです。

FACIAL FUZZ

1966年の終わり頃、悪名高き丸いペダル・エフェクターがロンドンのミュージック・シーンに登場しました。製作したのはArbiter Music社。Fuzz Faceという名前で、伝説のギタリスト、ジミ・ヘンドリックスも使って有名になりました。

初期のペダル・エフェクターと同様、このFuzz Faceも様々な設計変更や改訂を行いました。モデル対象としたのは、ゲルマニウム・ダイオードを使用したものです。上の写真はかなり初期のユニークな「グレーのボディーに黒いスクリーンを付けた」オリジナルのArbiter Fuzz Faceです。PODxtのFuzz Faceモデルを呼び出してドライブをガンガンに上げれば、目の前に“ パープル・ヘイズ ”が見えてくるかも。

FUZZ PI

イギリスに負けじと、アメリカでもファズ人気に乗じて色々なファズ・エフェクトが作られました。Electro-Harmonixではマイク・マシューズと彼の仲間たちはすでにいろんなエフェクトの構想を練っていましたが、中でもディストーション／ファズペダルに注目しました。一番人気があったのは、Electro-Harmonix Big Muff Pi

で、ファジーなサウンドというよりも甘いサスティンで知られました。

Electro-Harmonixは余った部品を使うことで有名で、その結果、回路設計や部品仕様がくるくるとよく変わりました。上記の写真はBig Muffですが、これらのペダル・エフェクターは、マイクと仲間達がその場で見つけた部品を使ったので、それぞれ外観が違っています。一番かわいいのは真ん中のペダルで、ノブが三角状に並んでいるので「三角ノブ」モデルと呼ばれています。Pi（パイ）と呼ぶからには、アップルパイか何かの一切れに似ているのかと思わせますが、実際には想像もつきません。

OCTAVE FUZZ

なんだこのサウンドは？過去の偉大なギタリストの幽霊に取り憑かれたお化けギターのようなサウンド、それならたぶんTycobrahe Octaviaのエフェクトでしょう。

Octaviaはファズ＋オクターブエフェクトの例です。このエフェクトのパイオニア的なユーザーはジミ・ヘンドリクスです。Tychobrahe Octaviaは特に、ジェフ・ベックが使用し、またマイケル・ランドウの音造りキットの要素となっています。

Octaviaはオーディオ出力トランスフォーマーと、ギター信号の整流用に2つのゲルマニウム・ダイオードを使っており、高いオクターブタイプのサウンドを作り出します。PODxtのモデリングには、上記の写真にある甘美なサウンドのペダルを使いました。

BRONZE MASTER

ベースのディストーションの最高傑作としてよく挙げられるのが、Maestro Bass Brassmasterです。これは70年代初期に、シンセの天才、トム・オーバーハイムがMaestroのためにデザインした稀な逸品です。70年代中期のイエスのツアーでクリス・スクワイヤーの機材リストにも登場しました。実際、ベーシストを頭に置いてデザインされたディストーション・ペダルとしては、このBrassmanが最初だったと思います。それにしても、オーバーハイム氏はよくやってくれました。オリジナルのペダルには、別々のハーモニック用にアクセントをつけるための2つの別個のボリューム／切り替えスイッチなど、かなり凝ったコントロール類がありました。Bass PODxtのBRONZE MASTERは、あの複雑な仕組みを完全に再現したわけではありませんが、大切な低域端を除去せずにまともなディストーションをかけた、オリジナルアンプの超甘美なベースのファズを再現する肉感的なパレットを提供しています。

コンプレッサー

コンプレッサーはベーシストのベストフレンドです。Bass PODxtには複数のコンプレッサー・エフェクトが入っており、Bass PODxtをお持ちの耳の肥えたベーシストのために、新しいベストフレンドをいくつか用意しました。**[COMPRESS]**ノブでコントロールする人気のLA 2Aのほかに、ペダル・エフェクターの設定でいくつかのコンプレッサーがあります。

コンプレッションのトリックをご紹介しましょう。ペダル・エフェクター（ストンプ・エフェクト）をオフにして、アンプモデル音色にTUBE PREAMPを選び、世界中のラジオから聞こえてくるヒット曲のサウンドかと思うクリーンなベースサウンドを出します。**[COMPRESS]**ノブを10時の位置に設定して、プロデューサーがレコーディングでやるような要領で、ダイナミックスを多少抑えます。次に[STOMP]ボタンを押して点灯させ、今度は2回続けて押してペダル・エフェクターのエディット画面を表示させます。そして、**[COMPRESS]**ノブでコントロールするLA 2Aモデルと同時に、もう一つのコンプレッサーを選びます。このテクニックは、世界中の腕利きプロデューサーが使うダブル・コンプレッションという手です。まずフロント・エンドのコンプレッサーで基本的な音色とダイナミクスを形成し、次のコンプレッションで[COMPRESS]ノブを使って、スタジオ音質のスムーズなサウンドに磨きをかけます。

BLUE COMP

Roland/Bossはこのモデル、コンプ／サスティンCS-1でコンプレッサーのペダル・エフェクター市場に参加しました。圧縮比が固定されているので、PODxtのモデルではコンプレッサー回路のスレッショルドを変化させるSUSTAINパラメータがあります。LEVELはレベルを調整します。

RED COMP

70年代、これはベーシストの間では最も人気のあるペダル・エフェクターでした。値段も手ごろなのにしっかり圧縮してくれるので、ベーシストが最初に手にする（足にする？!）ペダルでした。小さなクラブから巨大なスタジアムまでどんなステージ上でも、ベース信号の経路には重要な一部分でした。もっとも広く使われているペダル・コンプレッサーで、よく比較対象になる業界標準のDynacompは、圧縮比が固定、スレッショルドとゲインは可変です。PODxtではそれをそのまま再現しました。

VETTA COMP

Line 6のオリジナルです。圧縮比が2.35:1、スレッショルドはSENSノブで－9dB～－56dBの範囲で調整します。LEVELノブで最高12dBまでのゲイン調整が可能です。つまり、SENSの下のノブで信号を好きなだけ圧縮し、LEVELの下のノブで音量を調整します。Bass PODXTを複数の目的で使用する場合は、これをTUBE PREAMPモデルと組み合わせれば、とっても高価そうなボーカルプロセッサーで作ったようなサウンドが出ます。

AUTO WAH

ファンクがいい？ファンクが欲しい？これこそファンク。フィルター好きのまともなベーシストなら、ジョージ・クリントンらの使ったMu-Tron IIIエンベロープ・フォロワーがなくては始まらない。

オートワウとトリガーフィルターを足して2で割ったもので、Mu-Tron IIIをモデルにしたエフェクトは両方向のワウ効果が可能です。シャツの胸元を開けてベルボトムのジーンズを履けば、気分はもう70年代にタイムスリップ!

SENSで演奏に対するフィルターの感度を調整し、**Q**でフィルターの幅を設定します。

モジュレーションのモデル

モジュレーション・エフェクトは、フェーズ・シフターからフランジャー、コーラスまで、音にうねりやパルス、震えを加えます。モジュレーションとは「変調」のことで、低周波を使って、信号の振幅や周波数を変調することです。変調波とは、うねり、パルス、震えを生み出すものです。

モジュレーション・エフェクトには**スピード(SPEED)**と**デプス(DEPTH)**パラメータがあります。**SPEED**は変調波のうねる速さを、**DEPTH**は変調波の全体の振幅、つまりエフェクトの強さを設定します。**MIX**パラメータなどもあります。詳細は各エフェクトのリストをご覧ください。

Bass PODXTには次のモジュレーション・エフェクトがあります。

DELUXE CHORUS

アナログのCE-1コーラスとは対照的なデジタルコーラスです。サイン波がモジュレータ。**[BASS]**コントロールと**[TREBLE]**コントロールはそれぞれ低域、高域を調整します。のどごしに気持ちいいエフェクトです。ハーモニクスの入ったパートを作ったら、このエフェクトをかけると、今は亡き偉人、ジャコ・パストリアス風のサウ

ンドを彷彿とさせます。サイン波のコーラスはとても心地よいぬめらかな感覚を、高域の弦でダブルストップした時のサウンドに加えてくれます。

ANALOG CHORUS

コーラスペダルの元祖Boss CE-1がなければ、PODxtは完成しません。CE-1が登場したのは1977年。暖かくグルーヴィーでビッグなコーラスサウンドで評判になりました。アンディー・サマーズがすぐに取り入れて愛用し、ポリスのアルバムで聞くことができます。コントロール類にはスピード、デプス、コーラス／ヴィブラートモード切り替えスイッチがあります。CE-1は空間の広がりを感じさせ、ディストーションをかけたアンプに入るとすばらしいサウンドが生まれます。

PODxtのCE-1モデルもオリジナルと同様、暖かく心地よいサウンドです。

「ちょっと待てよ、オリジナルのCE-1には便利なピッチヴィブラート・モードがあったんじゃないの。」と思い出した方はご安心ください。コーラスとはピッチヴィブラートをドライ信号とミックスしたもので、CE-1のヴィブラート・モード・スイッチの機能は、このドライ信号をオフにすることでした。この機能を再現するには、**[MIX]**ノブを100%ウェットにします（つまり右いっぱいに回します）。また、**DEPTH**でエフェクトを好みの強さに設定します。

DELUXE FLANGER

CONFIGパラメータをPOSTに設定すると、燦然と輝くエフェクトです。ステレオのスウィープをオフセットさせて、官能的ハーモニクスのゆらめきを生みます。

JET FLANGER

スタジオでも安心して使えるA/DAフランジャーをモデルにしました。このペダル・エフェクターはスウィープ範囲が35〜1、トーン回路と共に作動するコンプレッサーを内蔵して、A/DAの有名なジェット機音のスウィープ効果を作り出します。ユニークな波形でドラマチックなエフェクトを提供し、極端な設定ではリング・モジュレータのような効果も出すことができます。

DEPTHの下のノブでスウィープレンジを調整し**FDBK**でフィードバック（エフェクトのかかった信号をどれだけエフェクトの入力に再入力させるか）を調整します。**MANUAL**はスウィープにかけてフランジ効果を生じさせる、極端に短いディレイの長さを設定します。

デプスとフィードバックを上げればジェット機も離陸準備完了！

PHASER

この写真にある、楚々としたメタルのボックスこそが、世界を変えたフェイザー、MXR Phase 90です。Phase 90は他のフェイザーに比べると効果が微妙なので、エフェクト自体が自らスポットライトを浴びるというよりも、音色の一部となっているような地味な効果があります。みずみずしく有機的、かつグルーヴィーな渦巻きが、ヴァン・ヘイレンの最初の2枚のアルバムや、ジミー・ペイジの「Physical Graffiti」で聴けます。

Phase 90は4段のフェイザーで、一つのノブを使ってスピードのみをコントロールします。本機のモデルは**MIX**コントロールで柔軟性を、**FEEDBACK**コントロールでエフェクトを強調することを追加しました。

U-VIBE

今では伝説的となったUni-Vibeも、元はといえば1969年にジミ・ヘンドリックスがその名を広めてくれました。4段のフェイズシフターで、官能的なトーンで知られています。ジミ・ヘンの「Machine Gun」を聞けば、なるほどとわかるはずです。ベースとは関係ないと思ったら大間違い。ジミ・ヘンが新しいサウンドを探究するごとにベースもこれに追い付くべく努力が必要でした。ビリー・シーン、ダグ・ウインビッシュ、マイク・エリザンドなど、力強いプレーヤーが演奏する、エフェクトが深くかかったベースラインを聞いてみましょう。Line 6のU-Vibeエフェクトを使ってトリップ・ホップのベースラインを弾けば、これがどういうことかすぐにわかるはずです。CE-1モデルの「隠密」的なヴィブラート・モードと同様、Uni-Vibeのヴィブラート・スイッチの効果を再現するには、**MIX**設定を100%ウェットに設定します。（これもオリジナルのモデルでのヴィブラート・スイッチをシミュレート）。**DEPTH**コントロールはこのU-Vibeをさらに際立たせます。

Opto Trem

64年型Deluxeや65年型Twin Reverbなど、ブラックフェースのFenderアンプで使用したオプチカル・トレモロ回路をモデルにしました。基本的には電球とフォトレジスタで、明かりが明るくなるほど、トレモロのレベルも大きくなります。とても滑らかで、Fenderのアンプモデルに最適です。

Bias Trem

古いけれど人気のあるVoxトレモロ（およびブロンドやブラウンのFenderアンプに搭載された同様の回路）をモデルにしました。パワーアンプチューブの偏差（バイアス）を変化させることでパルスを発生します。これによって、実はアンプの出力チューブの寿命が縮まったのですが、美しく流れるような、しかも不揃いでけっこう凹凸のあるサウンドは、Uni-Vibeや他のフェイズシフターに似た所があります（これは、チューブのバイアスをこれほど無造作に扱ったためにフェイズシフトが生じたためです）。

ROTARY DRUM

回転スピーカーを収納したキャビネット、レスリーは、もともとオーガニストのために作られました。ギタリストたちがレスリーを使いはじめると、Fenderも独自のギター専用の渦巻きマシンを作ることにしました。12インチのスピーカーの前で発砲スチロールの防音装置が回転して、サウンドを四方八方に送り出します。Fender Vibratoneのサウンドで有名なのは、スティービー・レイ・ボーンの「Cold Shot」です。ロータリースピーカーのパワーを手にするのは、今度はベーシストたちの番です。

ディレイ・エフェクト

サウンドにスペース感を加えたい場合は、**[DELAY/VERB]**ボタンを押せば、よだれが出るようなディレイ、エコー、リバーブのごちそうにありつけます。

ANALOG DELAY

DM-2のようなアナログエコーはそれ以前に使われていたテープエコーを改善したもので、「バケツリレー式」電子回路を採用したので、テープによるディレイよりも信頼性があり、電池でも作動する低電力回路という利点も兼ね備えたエコーでした。

アナログディレイの好まれる点は、暖かく歪んだトーンを生むことです。PODXTのDM-2モデルもデジタルの世界ながらも同じようなアナログ的効果を生み出します。ピンク・フロイド・・・、「おせっかい」・・・、「吹けよ風、呼べよ嵐」のオープニングのベースライン・・・、ロジャー・ウオーター・・・と思い浮かべてみれば納得？

ANALOG W/MOD

他のアナログエコーの「バケツリレー式」回路を使用し、コーラス回路を加えたペダル、Electro-Harmonix Deluxe Memory Manをモデルにしました。調整自在なコーラスはエコーのみにかかるので、ダイレクト信号には影響ありません。

Memory Manは暖かで歪んだサウンドとヒタヒタと寄せる波ようなエコーで多くのギタリストにとって大切なツールとなり、最初のU2のアルバムのギターサウンドでは重要な役目を果たしました。

Deluxe Memory Manがどうしてデラックスかというと、ディレイタイムが500ミリ秒もあるからです。VettaのMemory Manではディレイタイムを2秒に延長して、このクラシックなMemory Manをシミュレートします。

2ページ目には**MOD SPEED**、**MOD DEPTH**パラメータがあり、ディレイにかかるコーラスを設定します。ボタンを押してANALOG W/MODを選べば、「エッジ」風味を加えられます。ペダル・エフェクターに好みのディストーションのモデルを選び、その後にこれを入れてみてください。

TUBE ECHO

クラシックなエフェクター、1963年のMaestro EP-1はEchoplexシリーズの最初の製品で、シカゴのハリス・テラーが作成しました。Maestroの広告でも唱われていたように、Echoplexの「特殊なエフェクトは巧妙なハイスピードリバーブからドキドキ胸いっぱいのエコーまでを網羅」しています。

Echoplexのデザインの主な特長は、1/4インチの特殊なループテープカートリッジで、テープが別個の録音ヘッドと再生ヘッドを通過することです。再生ヘッドを移動してディレイタイムを60～650ミリ秒の範囲で調整できました。VettaのEP-1モデルはクラシックなEchoplexのサウンドに2秒のディレイタイムを加えています。

エディット画面2ページ目には**FLUT**（ワウ／フラッター）、**DRIVE**パラメータがあり、オリジナルサウンドのチューブ（真空管）の暖かいサウンドをシミュレートするだけでなく、キャプスタンが汚くてテープがすべるようなユニークなサウンドも提供します。

MULTI-HEAD

Bossブランドのペダルが発売される以前、Space Echoはエフェクター市場に進出したローランドの最初の製品でした。Echoplexのような可動再生ヘッドの代わりに、複数の静止ヘッドを搭載していました。このヘッド間を切り替えることでディレイタイムを変更し、モーターの速度コントロールでディレイタイムを微調整しました。このエフェクターの面白い点は、複数のヘッドで同時再生するとマルチタップ・ディレイ効果が得られたことです。これが発売されるやいなや、ベーシストたちはRE-101を使って実験し始め、一番速い設定にすれば超低域をファットにできることがわかりました。Bass PODxtのベータ版で試験使用した人は、以前、このアンプを2台のAmpeg SVTの間にはさんで使ったことがあるそうです。今のBass PODxtより180ポンド以上も重い設定です。時代がなんと変化したことか・・・。エディット画面の2ページ目には**HEADS**パラメータがあり、Space Echoモデルの4つのバーチャル・テープヘッドの組み合わせを選択できます。またEchoplex EP-1モデルと同様、**FLUT**（ワウ／フラッター）パラメータもあります。

SWEEP ECHO

Line 6のオリジナルモデルです。最初に登場したのはDL4 Delay Modelerですが、ユーザーの間でけっこう人気になりました。

2ページ目のノブは、スウィープフィルターのスピードと深さを設定します。スウィープ**SPEED**はフィルター・スウィープの速さを、スウィープ**DEPTH**はフィルターがかかる周波数レンジを設定するので、音色を様々に変化させることができます。微妙なニュアンスからまったく奇妙きてれつなサウンドまで、このエフェクトは様々な顔を持ちます。FBXペダルでミックスをコントロールし、比較的短いディレイを使ってみると面白いでしょう。

DIGITAL DELAY

このモデルは**BASS/TREBLE**トーン・コントロールが2ページ目にある、基本的なデジタルエコーです。クリーンなエコーをてっとりばやく使いたいベーシストのための設定です。

REVERSE

!にうよのズルトービやスクッリドンへ・ミジ・・・（後ろから読んで!）。新しいリバース・ディレイでタイムトラベルしてみましょう。最高2秒まで設定したディレイが弾いた音にかかって、逆に演奏されます。このエフェクトをうまく使うには、リバース再生を無視してとにかくレガートのフレーズを弾いてみます。レガートで長い持続音を弾くほど面白いフレーズになって返ってきます。トム・ペティーのギタリスト、マイク・キャンベルがLine 6 DM4 Delay Modelerペダル・エフェクターのリバース・ディレイを利用して、逆さまのギターソロをライブで弾いていたのをテレビで見たことがあります。

このモデルを使う時は、**[MIX]**ノブを右いっぱいに回して（100%ウェット）リバースサウンドだけが聞こえるようにすると、逆さまのギターソロがすぐに聴けます。もう一つの隠しワザは、まずREVERSEディレイを選択してから、テンポをタップしてディレイタイムを四分音符にロックします。フィードバックを0%、ミックスを65%に設定すれば、スラー部分でうまくかかる弓のようなエフェクトが得られます。

VERB

Bass PODxtの製作に取りかかった時、妥協ない真のエフェクトを開発することにもかなりのエネルギーを注ぎました。

Bass PODxtのリバーブモデルには、ルームやホールなどの物理的な環境をシミュレートしたものがあります。また、大きなスチールのプレートや金箔、スピーカー、プレートの振動を拾う複数のピックアップを使用したプレートリバーブも持っています。ギタリストが一番良く知っているスプリングリバーブ、聴いてみないとわからない新しいユニークなモデルなどもあります。

スプリングリバーブ

スプリングリバーブといえばサーフ・ミュージック。あと必要なのは、ベーシストが波にのってキミのアンプに突っ込んだ衝突音でしょう。

Lux Spring
2つのスプリングリバーブのタンクを内蔵したブラックフェースのFender Deluxeアンプをモデルにしました。

STD Spring
ブラックフェースのFender Twin Reverbが長年愛用されてきたのは、そのリッチで密度の高いリバーブサウンドです。3つのスプリングでFender初期のスプリングリバーブより更に複雑なサウンドを生み出します。

King Spring
Line 6のオリジナルで、高級スプリングベッドのマットレスに感化されました。3つのスプリングがカッコいいなら、キングサイズのベッドにいっぱい詰まったスプリングのリバーブはいかが？もっとリッチで密度も高く、熟睡できること間違いなし。

ルームリバーブ

何年もの間、創作的なレコーディングエンジニアたちは、どんな部屋でも無理矢理リバーブの効く部屋に仕立て上げました。階段、廊下、地下室などは人気の場所でした。Bass PODXTは素晴らしいルームリバーブを提供します。

Small Room
昔はデジタルリバーブなんてありませんでした。レコーディング時にサウンドに部屋の臨場感を与えたかったので、音がよく反響する大きなからっぽの部屋を作ったらどうか、というアイデアが生まれました。部屋の中にスピーカーを置き、そのスピーカーからサウンドを出して、マイクから残響を拾って元の音楽にミックスするというものです。このような初期のリバーブチェンバー（ルーム）にはそれぞれ個性があり、そのリバーブサウンドゆえに名声を覇せたスタジオもありました。Bass PODXTのSmall Roomモデルは60年代にあった中規模のスタジオのリバーブチェンバーをモデルにしています。

Tile Room
ギターを大きな浴室で録音したようなものです。陶器の床やバスタブは素晴らしい残響を作り出します。昔はサックス演奏者がよく風呂場で録音したようです。少なくとも、そのようにサックス演奏者たちは語り継いでいますが…。

Brite Room
生き生きと明るいルームを再現しています。

ホール

これは居間と寝室の間にあるホールのことではありません。もっと大きい空間を指します。

Dark Hall
反射音の多い大きなコンサートホールです。設定を最大にしてもけっして邪魔にならない背景リバーブに最適です。

Medium Hall
反射音のかなり多い中程度の大きさのホールです。

Large Hall
これより大きいホールはないという、広いコンサートホールです。

チャンバー
ひと昔前までは、デジタル・リバーブなるものは存在しませんでした。でも、サウンドにもっとスペース感を加えたい人も多く、音が心地よく反射する大きい空き部屋を作ればいい、というアイデアが浮かびました。そこにスピーカーを積み上げ、そのスピーカーから音を出し、部屋に置いた複数のマイクで拾うと、部屋の音響、雰囲気も一緒に録音されたわけです。このような部屋はリバーブ・チャンバーと呼ばれ、そのチャンバーごとに固有の特性を持っていました。この独自のリバーブサウンドによって有名になったスタジオもいくつかあります。

Rich Chamber
クランチサウンドがさらにファット（太く）になります。

Chamber
典型的なスタジオルームで、どんなサウンドにも合います。

Cavernous
実は、Large Hallより大きいホールでした。

プレート

プレートリバーブは最初の「メカニカル」なリバーブです。基本的な設計は、大きなスチール板か金箔のシートとそれをドライブするスピーカー、それにプレートの振動を拾う複数のピックアップから構成されています。

Slap Plate
サム・フィリップスがエルビス・プレスリーで有名になったメンフィスのサン・スタジオで録音したような初期のロックンロールの残響です。

Vintage Plate
いつまでも心に残る、ヴィンテージのプレートリバーブです。

Large Plate
ホールにLarge HallとCavernousがあるので、プレートも対抗してビッグにしました。バックグラウンドのビッグなリバーブとして最高です。

エディットとMIDIコントロール

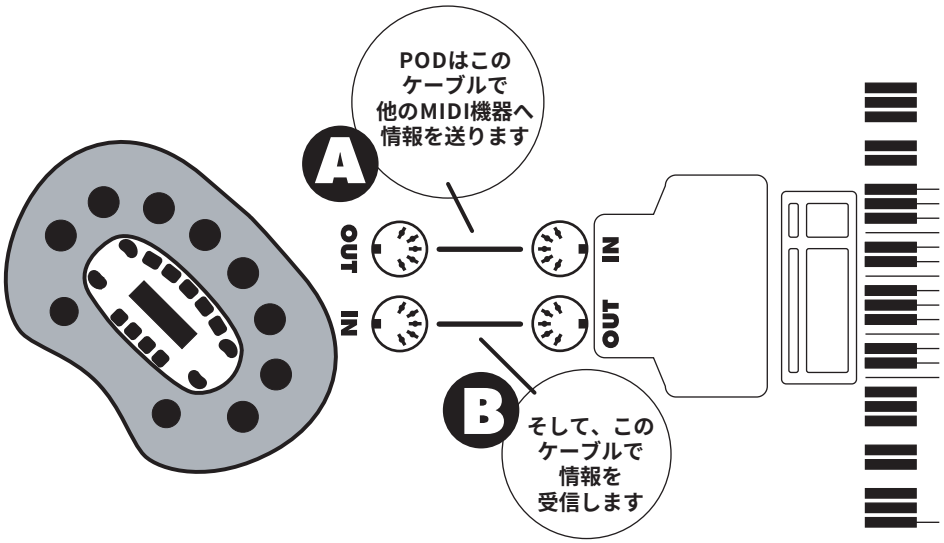
MIDIの基本

MIDIとは？

MIDI（Musical Instrument Digital Interfaceの略）は音楽を作るためのさまざまな機器の間で情報を交換するための共通の通信言語です。すべての機器がそろって作動するように、常に1台の機器がその他の機器をコントロールします。

MIDI IN、MIDI OUT

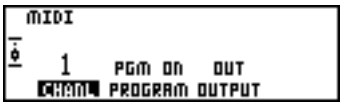
Bass PODxtには**MIDI IN端子**、**MIDI OUT端子**が1つずつあります。この端子とMIDIケーブルでBass PODxtを他の機器に接続します。接続はそれぞれ片方向です。つまりMIDI情報を**MIDI OUT端子**から別の機器の**MIDI IN端子**に送信します。情報を受信するにはもう1本のMIDIケーブルでBass PODxtの**MIDI IN端子**と別の機器の**MIDI OUT端子**を接続します。



MIDIチャンネル

MIDI情報はMIDIケーブルを介し16チャンネルを使って受送信されます。MIDIチャンネルはBass PODxtのサウンドを保存するプリセットチャンネルとは関係ありません。

テレビやラジオ放送でチャンネルを選ぶように、Bass PODxtでMIDIチャンネルを選び、Bass PODxtと接続した機器が同じチャンネルでMIDI情報を送信するように設定します。Bass PODxtのMIDIチャンネルは[TUNER]ボタンで設定します。このボタンを押すとボタンのインジケータが点灯します。



CHANL（チャンネル）
CHANLパラメータの下にあるボタンを押し**[EFFECT TWEAK]**ノブを回すと、MIDIチャンネルが変わります。チャンネル1～16またはOMNI（全MIDIチャンネル）から選択します。他にMIDI機器が接続されていなければ、OMNIでもかまいません。システムエクスクルーシブメッセージはどのチャンネルでも受信できるので、システムエクスクルーシブメッセージのみを扱う場合は、この設定によって、Bass PODXTの送信チャンネルが決まります。

PROGRAM（プログラム・チェンジ）
入力されるMIDIプログラム・チェンジ・メッセージを処理するか（**PGM ON**）、メッセージを無視するか（**PGM OFF**）、受信メッセージをそのまま通すか（**PGM ECHO**）を選択します。

OUTPUT（アウトプット）
このパラメータをOUTにすると、**MIDI OUT**からはBass PODxtで生成したMIDIメッセージが送信されます。MIDI THRUにもできます。その場合は出力MIDIメッセージを生成せず、MIDI INで受信したメッセージをそのままMIDI OUTから出力するので、Bass PODxtが受信したものと全く同じMIDIメッセージを接続MIDI機器に送ることができます。スルーモードでは、MIDI INで受信した信号がそのままMIDI OUTから出力されますが、入力メッセージとBass PODxtのMIDIメッセージが一緒に組み合わされるわけではありません。

MIDIメッセージ

MIDIでさまざまな目的のためにメッセージを送信できます。

MIDIプログラムチェンジ
サウンドやセットアップを切り替えるメッセージです。Bass PODXTではチャンネルメモリーが切り替わります。たとえばプログラムチェンジナンバー1を受信すると、バンク1、チャンネルAが選ばれます。プログラムチェンジナンバー2を受信するとバンク1、チャンネルBに切り替わります。詳細は付録Bをご覧ください。

MIDIコントローラー
機器のパラメータをリアルタイムでコントロールします。たとえばMIDIコントローラーを使ってBass PODXTの**ドライブ**設定や**リバーブ**レベルを変更します。Bass PODXTのパラメータはそれぞれMIDIコントローラーに割り当てられているので、Bass PODXTをこのメッセージで完全にコントロールできます。各Bass PODXTのパラメータに割り当てられているコントローラーと、コントローラーの機能を付録Cに記載しています。Bass PODXTに接続したFBV/FBVシュートボードのワウペダル、ボリュームペダルもMIDIを介してMIDIコントローラーメッセージを送信します。

MIDIシステムエクスクルーシブ
システムエクスクルーシブメッセージは特定の機器だけに通用する特殊なコマンドです。ほとんどすべてのMIDI機器が送受信できるプログラムやコントローラー、その他の一般的なメッセージと違って、その機器だけ（exclusive）に使用されるのでエクスクルーシブと呼ばれます。Bass PODXTはシステムエクスクルーシブメッセージを使って、チャンネルメモリーを別の機器に送信したり、新しいチャンネルを他の機器から受信したりします。このデータのやりとりを「ダンプ」と呼びます。システムエクスクルーシブメッセージはBass PODXTの任意のチャンネルで受信できます。MIDIチャンネルの設定によって、Bass PODXTがシステムエクスクルーシブメッセージを送信するチャンネルが決まります。

Bass PODxtのプログラムを他の機器にバックアップ

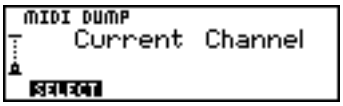
Bass PODxtにプログラムしたサウンドを他の機器にバックアップして、万一のときにはそのバックアップが利用できるようにしてください。Bass PODxtから他のMIDI機器（MIDIファイルプレーヤー、シーケンサー、キーボードワークステーションなど）にサウンドを転送してバックアップするのは、Bass PODxtからBass PODxtへのサウンド転送とほとんど同じ要領です。この場合もMIDIケーブルが必要です。

Bass PODxtのMIDI OUT端子を受信側MIDI機器のMIDI IN端子に接続します。Bass PODxtの**[TUNER/SYSTEM]**ボタンを押すとボタンのインジケーターが点灯します。**[SELECT]**ノブを回してMIDIページを表示します。

全チャンネルの送信

Bass PODxtのプリセットをすべて接続MIDI機器にバックアップします。

[SAVE]ボタンを1回押し、**[SELECT]**ノブを回して次の画面を表示させます。



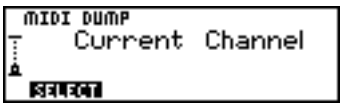
SELECTパラメータの下にあるボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブを左に回してAll Channelsを表示させます。

[SAVE]ボタンをもう一度押すと送信が行われます。画面に**SENDING SYSEX... STANDBY**と表示され、送信が終わると消えます。

一部データの送信

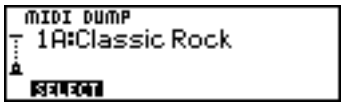
特定のチャンネル・メモリー、エフェクト設定、あるいはアンプモデルだけを接続MIDI機器に送信します。

[SAVE]ボタンを1回押し、**[SELECT]**ノブを回して次の画面を表示させます。



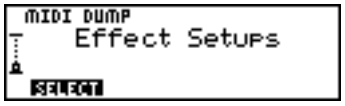
SELECTパラメータの下にあるボタンを押し、**[EFFECT TWEAK]**ノブを左に回して送信したいチャンネル・メモリー、アンプモデル、エフェクト設定などを選択します。

任意のチャンネル・メモリー



アンプモデルすべて（カスタムのモデルも含む）

エフェクト設定すべて（カスタムの設定も含む）



[SAVE]ボタンをもう一度押すと送信が行われます。

データの呼び出し

Bass PODxtにデータを呼び出すには特別な操作は不要です。MIDIでBass PODxtにデータを送信すると、データが受信され、どのデータが受信されたかが画面に表示されます。

MIDIを使ってできること

MIDIプログラムチェンジでBass PODxtのチャンネル切り替え

MIDIでできる一番基本的なことは、チャンネル切り替えです。MIDIプログラムチェンジメッセージを送信するフットコントローラーやその他の機器をお持ちの場合は、その**MIDI OUT端子**をBass PODxtの**MIDI IN端子**に接続し、両方の機器のMIDIチャンネルを同じ設定にして、**付録B**を参照しながら、フットコントローラーのどのプログラムナンバーがBass PODxtのチャンネルを切り替えるかを調べます。**マニュアルモード**も**チューナーモード**もMIDIプログラムチェンジメッセージで選べます。またMIDIシーケンサーからBass PODxtにプログラムチェンジメッセージを送信して、シーケンスに同期したBass PODxtのサウンド切り替えも可能です。

MIDIコントローラーを使ったBass PODxtのサウンド調整

MIDI「フェーダーボックス」、アサイナブルMIDIコントローラーのあるキーボード、MIDIシーケンサー（単体またはコンピュータソフトウェア）などをお持ちの場合は、MIDIでBass PODxtのパラメータを調整できます。**付録C**はBass PODxtのパラメータをコントロールするMIDIコントローラーの表です。Bass PODxtとコントロール側の機器のMIDIチャンネルを必ず一致させてください。**MIDIでパラメータをコントロールするときにノイズを最小限に抑えるには、設定を徐々に変更していくといいでしょう。**

Bass PODxtのMIDIオートメーション

MIDIシーケンサーでBass PODxtを使う場合、MIDIコントローラーメッセージでBass PODxtのパラメータをオートメーションできます。Bass PODxtのフロントパネルのノブからは（別売のFBVフットコントローラーのワウペダル、ボリュームペダルも同様）、MIDIコントローラーメッセージが送信されるので、MIDIシーケンスに合わせてBass PODxtを通して演奏しながらMIDIトラックに記録できます。

Bass PODxtのMIDI OUT端子をシーケンサーのMIDI IN端子に接続し、シーケンサーのMIDI OUT端子をBass PODxtのMIDI IN端子に接続します。Bass PODxtとシーケンサーが同じMIDIチャンネルになるよう設定します。**TUNE/SYSTEM**モードでの**MIDI OUTPUT**設定が**OUT**になっていることも確認してください。また、シーケンサーでMIDI EchoまたはSoft Thru機能をオフにして、Bass PODxtから送られたMIDIデータすべてがまたBass PODxtに戻ってしまわないようにしてください。

MIDIオートメーションを行うには、シーケンサーのMIDIトラックにBass PODxtのMIDI OUT端子からのデータを記録します。手順は、まずBass PODxtのMIDI OUTからのデータを受信するためのMIDIトラックをセットアップし録音可能状態にしてから、シーケンサーの録音を始めます。次にBass PODxtの**[DRIVE]**ノブをいっぱいまでゆっくり上げてから今度はいっぱいまで下げ、シーケンサーを停止します。今シーケンサーのMIDIトラックに記録されたのは、MIDIコントローラー#13のメッセージです。これはBass PODxtのドライブパラメータに割り当てられているコントローラーです。Bass PODxtを通して演奏しながら録音したMIDIトラックを再生すると（またはBass PODxtを通して録音されたギターを再生すると）、ドライブが変化するのがわかるはずです。**MIDIでパラメータをコントロールするときにノイズを最小限に抑えるには、設定を徐々に変更していくといいでしょう。**

MIDIセットアップ時のトラブルシューティング

1. SoundBlasterなどのカードには複数のMIDIドライバーがついています。システムは通常、カード上の内蔵シンセ用ドライバーを初期設定として使用するので、外部MIDI端子は選択されません。つまりソフトウェアがBass PODxtを認識するためには、まず正しいドライバーを選択することが肝心です。
2. MIDIケーブルは必ずMIDI OUTとMIDI INを接続してください。（Bass PODxtのMIDI INとコンピュータのMIDI INを接続しないでください。Bass PODxtのMIDI IN端子は必ずコンピュータのMIDI OUTと接続します。）情報が流れる方向を考えてみましょう。Bass PODxtから出て（OUT）コンピュータへ入る（IN）。コンピュータから出て（OUT）Bass PODxtへ入る（IN）。という具合です。
3. MIDIチャンネルを必ず一致させてください。一番単純なのは、Bass PODxtのMIDIチャンネルを**OMNI**にすることです。

フット・コントローラの利用

FBVシリーズ・フット・コントローラ

Bass PODXT用のフット・コントローラとして、オプションのLine 6 FBV/FBV Shortboardフット・コントローラがあります。FBVはVettaシリーズのアンプ用に必要なフット・コントロール機能をすべて搭載しているため、Bass PODXTでは使用しないコントロール類もたくさん入っています。一方、FBV ShortboardはBass PODXTの機能に焦点を当てているため、ここではFBV Shortboardの使い方について説明します。標準のFBVをお持ちの方も使い方は同じです。

FBV Shortboardについて

FBV Shortboardは特にライブ演奏などでBass PODXTをコントロールするときに威力を発揮します。FBV ShortboardはBass PODXTの機能を操作するフット・スイッチであり、ワウ・ペダルやボリューム・ペダルとしても使え、またLine 6のエクスプレッション・ペダルEX-1用のインプットとしても機能します。

FBV Shortboardの接続

FBV Shortboardには接続に必要なケーブルが同梱されていますので、そのケーブルをBass PODXTの背面にある**[PEDAL]**端子に接続してください。（新しいケーブルを購入する場合は、標準のCAT-5 Ethernetケーブルをお求めください）。FBV Shortboardはケーブルから電源をとりますので、電源コードは不要です。

スイッチ操作

1 BANK ▲/▼

Bass PODXTのチャンネル・メモリーの16バンクから任意のバンクを選択します。チャンネル・メモリーをロードするには、[CHANNEL A/B/C/D]のいずれかを押します。[BANK]スイッチを押したままにすると、バンクナンバーがスクロールします。

2 CHANNEL A/B/C/D

現在のバンクにある4つのチャンネル・メモリーの一つをロードします。

3 FX LOOP

Bass PODXT Proのループをオン／オフします。他のFBVスイッチは踏むたびに働きますが、これは足を離さないとループを切り替えません。Bass PODXTをお持ちの方は、付属のCOMPステッカーをこの文字の上に貼れば、コンプレッサーのオン／オフスイッチになります。

4 STOMP

ペダル・エフェクターをオン／オフします。オンにするとスイッチの上のインジケータが点灯します。

5 STOMP BOX 2（Shortboardにはありません）

Bass PODXTのEQをオン／オフします。オンにすると、スイッチの上のインジケータが点灯します。

6 STOMP BOX 3（Shortboardにはありません）

Bass PODXTのゲートをオン／オフします。オンにすると、スイッチの上のインジケータが点灯します。

7 REVERB

Bass PODXTのディレイ／リバーブをオン／オフします。オンにすると、スイッチの上のインジケータが点灯します。

8 MODULATION

モジュレーション・エフェクトをオン／オフします。オンにするとスイッチの上のインジケータが点灯します。

9 DELAY

ディレイ・エフェクトをオン／オフします。オンにするとスイッチの上のインジケータが点灯します。

10 TAP

2回タップして、Bass PODXTのテンポを設定します。現在のテンポ（BPM）に合わせてスイッチの上のインジケータが点滅します。**[TAP]**スイッチを2秒間押さえると**チューナー**機能が起動します。FBV Shortboardのディスプレイには弾いた音名が

表示されるので、シャープかフラットかがわかります。

11 [WAH]/[VOLUME]インジケータ

FBV Shortboard搭載のペダルでワウまたはボリュームのコントロールをする時は、このいずれかのインジケータが点灯します。エクスプレッション・ペダルを接続してボリューム・コントロール用に設定すると、**[VOLUME]**インジケータは点灯しません。

12 ワウ／ボリューム・ペダル

このペダルをつま先いっぱいまで踏んでトー・スイッチを押すと、ペダル機能が**ワウ**または**ボリューム**になります。エクスプレッション・ペダルをFBV Shortboardの背面にある1/4インチ端子に接続して**ボリューム**・コントロール用に設定すると、FBV Shortboardの方は**ワウ**のコントロールのみになり、トー・スイッチはワウのオン／オフスイッチになります。エクスプレッション・ペダルで**EFFECT TWEAK**パラメータをリモートコントロールする場合は、**ワウ／ボリューム**・ペダルは**ワウ**と**ボリューム**間で切り替わります。詳細は、**4章の「サウンドの作成と保存」**をお読みください。

13 外部ペダル端子

Line 6 EX-1などのエクスプレッション・ペダルを接続する1/4インチ端子です。接続したペダルは**ボリューム**または**EFFECT TWEAK**パラメータをコントロールするよう設定できます。エクスプレッション・ペダルの設定については、**4章の「サウンドの作成と保存」**をお読みください。

注： Bass POD$_{XT}$で使用しないFBVスイッチは、Bass POD$_{XT}$のMIDI OUT端子からMIDIメッセー ジを送信するので、他の機器をコントロールできます。詳細は、付録Cをお読みください。

FBV Shortboardを使った保存とネーミング

保存操作を行う前にまず工場プリセットのサウンドを試聴して、どのサウンドが欲しいか不要かを決め、不要なサウンドは後で上書きできるよう、バンクナンバーとチャンネルをメモしてください。

1. **保存：[FX LOOP (COMP)]**スイッチを押したままにして**NAME EDIT**を表示させます。
2. **ネーミング：**FBV Shortboardの**[STOMP]**および**[MODULATION]**スイッチ（小さい文字で**CURSOR**（カーソル）とも記載されています）で、変更したいチャンネル名の文字を選択します。**[DELAY]**および**[REVERB]**スイッチ（小さい文字で**CHARACTER**（文字）とも記載されています）で、文字／数字／記号を選択

します。名前を変更したら次のステップ3に進みます。

3 **バンクの選択：[BANK]▲/▼**スイッチで保存先のバンクを選択します。

4 **最後に：[CHANNEL A/B/C/D]**のいずれかのスイッチを押して、チャンネル・メモリーをバンクに保存します。ディスプレイには**「SAVING**（保存中）**」**と表示されます。

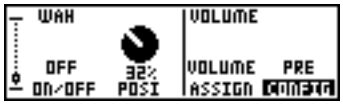
操作のキャンセル
[TAP]スイッチを押すと保存操作がキャンセルされます。

注： FBVをお持ちの方も保存操作は同じですが、[REVERB]と[PITCH/TREMOLO]スイッチがカーソル機能、[MOD]と[DELAY]スイッチが文字機能になります。

EX-1の使用

FBV ShortboardにはLine 6のEX-1などエクスプレッション・ペダルを接続して、ボリューム・ペダルとして使用したり、**[EFFECT TWEAK]**ノブに割り当てられているパラメータをリモートコントロールします。これによって、たとえばロータリー・ドラム・スピードをリモートコントロールすると同時に、FBV Shortboard搭載ペダルで**ワウ**や**ボリューム**をコントロールできます。これはチャンネル・メモリーと一緒に保存もできるので、演奏中に簡単に切替が可能です。次の手順で設定します。

1 [EDIT]ボタンを押し[SELECT]ノブを回してWAH/VOLUMEパラメータを表示させます。



2 **PEDAL**パラメータの下にあるボタンを押し、ボリュームをコントロールするなら**VOLUME**を、**EFFECT TWEAK**パラメータをコントロールするならTWEAKを選択します。

3 変更内容を必要に応じて保存します。

PEDALパラメータを**EFFECT TWEAK**に設定すると、接続したEX-1をヒール・ポジションからトー・ポジションに動かした時に、**FX TWEAK**で割り当てられたパラメータが最小値から最大値に変化します。一方、**PEDAL**を**VOLUME**に設定すると、FBV Shortboardの[VOLUME]インジケータが消灯し、EX-1はBass POD XTのボリュームをコントロールし、FBV Shortboard搭載ペダルはワウ・ペダル専用になります。ディレイ／モジュレーション・エフェクトと同様、ボリューム・ペダルの位置を**PRE**（アンプモデル前）または**POST**に設定することもできます。

付録A：アンプモデル

アンプモデル名	対象アンプ
Tube Preamp	Line 6 Original
L6 Classic Jazz	Line 6 Original
L6 Brit Invader	Line 6 Original
L6 Super Thor	Line 6 Original
L6 Frankenstein	Line 6 Original
L6 Ebony Lux	Line 6 Original
L6 Doppelganger	Line 6 Original
Sub Dub	Line 6 Original
Amp 360	Acoustic 360
Jaguar	Aguilar DB750
Alchemist	Alembic F-2B
Rock Classic	Ampeg SVT
Flip Top	Ampeg B-15
Adam and Eve	Eden Traveller WT-300
Tweed B-Man	Fender Bassman Combo
Silverface Bass	Fender Bassman Head
Double Show	Fender Dual Showman
Eighties	GK 800 RB
Hiway 100	Hiwatt DR-103
Hiway 200	Hiwatt 200DR
British Major	Marshall Major
British Bass	Marshall Super Bass
California	Mesa Boogie Bass 400+
Jazz Tone	Polytone Minibrute
Stadium	Sunn Coliseum
Studio Tone	SWR SM-500
Motor City	Versatone Pan-O-Flex
Brit Class A100	Vox AC-100

Fender、Marshall、Vox、Boogie、Soldano、Roland、Matchless、Budda、Arbiter、その他のアンプモデル名とエフェクト名はすべて該当する所有者の商標で、Line 6とは何の関わりもありません。このような商標や名前はLine 6のモデリング技術で作り出したアンプサウンドを説明するためにのみ使用しています。

付録B：MIDIプログラムチェンジ

MIDIプログラムチェンジでBass PODxtのチャンネル切り替えができます。MIDI機器によってはデバイスナンバーが0で始まるものと1で始まるものがありますが、Bass PODxtでは0で始まります（マニュアルモード）。次の表は保存チャンネルに対するプログラムチェンジナンバーの割り当てです。

Bass PODxtのチャンネル	MIDIプログラムチェンジ	Bass PODxtのチャンネル	MIDIプログラムチェンジ	Bass PODxtのチャンネル	MIDIプログラムチェンジ	Bass PODxtのチャンネル	MIDIプログラムチェンジ
Manual	0	5A	17	9B	34	13C	51
1A	1	5B	18	9C	35	13D	52
1B	2	5C	19	9D	36	14A	53
1C	3	5D	20	10A	37	14B	54
1D	4	6A	21	10B	38	14C	55
2A	5	6B	22	10C	39	14D	56
2B	6	6C	23	10D	40	15A	57
2C	7	6D	24	11A	41	15B	58
2D	8	7A	25	11B	42	15C	59
3A	9	7B	26	11C	43	15D	60
3B	10	7C	27	11D	44	16A	61
3C	11	7D	28	12A	45	16B	62
3D	12	8A	29	12B	46	16C	63
4A	13	8B	30	12C	47	16D	64
4B	14	8C	31	12D	48	Tuner	65
4C	15	8D	32	13A	49		
4D	16	9A	33	13B	50		

付録C：MIDIコントロール

パラメータ	ノート	コントロール No.	送信MIDI コントロールNo.	受信MIDI コントロールNo.
Amp Settings				
Amp Setup	Recalls an Amp Setup	11	0-28	0-28
Amp Model	Doesn ’t recall Amp Setup	12	0-28	0-28
Drive		13	0-127	0-127
Bass		14	0-127	0-127
Lo Mid		15	0-127	0-127
Hi Mid		16	0-127	0-127
Treble		21	0-127	0-127
Chan Vol		17	0-127	0-127
D.I.				
DI>MDL	D.I. Signal fed to Model signal path	48	0-127	0-127
DI DLY	Adjusts D.I. phase vs Model	49	0-127	0-127
A.I.R. Settings				
Cabinet Model	0-22	71	0-22	0-22
Mic Selection	0=Tube 47 Near, 1=Tube 47 Far, 2=112 Dynamic, 3=20 Dynamic	70	0-3	0-3
Room Level	0-100%	76	0-127	0-127
COMPRESSOR				
Compression		5	0-127	0-127
EQ				
Frequency 1		20	0-127	0-127
Frequency 2		32	0-127	0-127
Frequency 3		42	0-127	0-127
Frequency 4		60	0-127	0-127
Frequency 5		68	0-127	0-127
Frequency 6		77	0-127	0-127
Gain 1		114	0-127	0-127
Gain 2		115	0-127	0-127
Gain 3		116	0-127	0-127
Gain 4		117	0-127	0-127
Gain 5		118	0-127	0-127
Gain 6		119	0-127	0-127
EQ Pre/Post	Pre, Post	46	Pre=0/Post=127	0-63=Pre 64-127=Post
EQ On/Off	On, Off	63	Off=0/On=127	0-63=Off 64-127=On

パラメータ	ノート	コントロール No.	送信MIDI コントロールNo.	受信MIDI コントロールNo.
STOMP				
STOMP Model	0=Bass Overdrive, 1=Screamer, 2=Classic Dist, 3=Facial Fuzz, 4=Fuzz Pi, 5=Octave Fuzz, 6=Bronze Master, 7=Blue Comp, 8=Red Comp, 9=Vetta Comp, 10=Auto Wah, 11=Dingo-Tron, 12=Buzz Wave, 13=Seismik Synth, 14=Rez Synth, 15=Saturnn 5 Ring M, 16=Synth Analog, 17=Synth FX, 18=Synth Harmony, 19=Synth Lead, 20=Synth String	75	0-20	0-20
STOMP Param 1	Not Used	27	0-127	0-127
STOMP Param 1 Note value	Not Used	78	*注意1 (9-6ページ)	*注意1 (9-6ページ)
STOMP Param 2	Model-dependent	79	0-127	0-127
STOMP Param 3	Model-dependent	80	0-127	0-127
STOMP Param 4	Model-dependent	81	0-127	0-127
STOMP Param 5	Mix/Gain	82	0-127	0-127
Stomp Enable	On, Off	25	Off=0/On=127	0-63=Off 64-127=On
EQ				
Modulation Model	0=Deluxe Chorus, 1=Analog Chorus, 2=Deluxe Flanger, 3=Jet Flanger, 4=Phaser, 5=U-Vibe, 6=Opto Trem, 7=Bias Trem, 8=Rotary Drum, 9=Hi-Talk, 10=Line 6 Rotor, 11=Random S H, 12=Tape Eater	58	0-12	0-12
MOD Param 1	Speed	29	0-127	0-127
MOD Param 1 Double Precision	Speed	61	0-127	0-127
MOD Param 1 Note value		51	*注意1 (9-6ページ)	*注意1 (9-6ページ)
MOD Param 2	Model-dependent	52	0-127	0-127
MOD Param 3	Model-dependent	53	0-127	0-127
MOD Param 4	Model-dependent	54	0-127	0-127
MOD Param 5	Model-dependent	55	0-127	0-127
MOD Volume/Mix	0<>100%	56	0-127	0-127

パラメータ	ノート	コントロール No.	送信MIDI コントロールNo.	受信MIDI コントロールNo.
Mod X-Over	Lo-Cut filter in the wet path of the Mod effect, used to avoid muddy sound when Mod effects are used	44	0=Off, 1-127	0=Off, 1-127
Mod Pre/Post	Pre, Post	57	Pre=0/Post=127	0-63=Pre 64-127=Post
Mod Enable	On, Off	50	Off=0/On=127	0-63=Off 64-127=On
DELAY/VERB				
Delay/Verb Model	0=Analog, 1=Analog w/Mod, 2=Tube Echo, 3=Multi-Head, 4=Sweep Echo, 5=Digital Delay, 6=Reverse Delay, 7=Lux Spring, 8=Std Spring, 9=King Spring, 10=Small Room, 11=Tiled Room, 12=Brite Room, 13=Dark Hall, 14=Medium Hall, 15=Large Hall, 16=Rich Chamber, 17=Chamber, 18=Cavernous, 19=Slap Plate, 20=Vintage Plate, 21=Large Plate	88	0-21	0-21
DELAY Param 1	Time	30	0-127	0-127
DELAY Param 1 DBL Precision	Time	62	0-127	0-127
DELAY Param 1 Note value		31	*注意1 (9-6ページ)	*注意1 (9-6ページ)
DELAY Param 2	Model-dependent	33	0-127	0-127
DELAY Param 3	Model-dependent	35	0-127	0-127
DELAY Param 4	Model-dependent	85	0-127	0-127
DELAY Param 5	Model-dependent	86	0-127	0-127
DELAY Volume/Mix	0<>100%	34	0-127	0-127
REVERB Decay	Model-dependent	38	0-127	0-127
REVERB Pre-Delay	Model dependent	40	0-127	0-127
REVERB Tone	0<>100%	39	0-127	0-127
REVERB Mix	0<>50%	18	0-127	0-127
DELAY/VERB X-OVER	Lo-Cut filter in the wet path of the Delay/Verb effect, used to avoid muddy sound when Delay/Verb effects are used	44	0=Off, 1-127	0=Off, 1-127

パラメータ	ノート	コントロール No.	送信MIDI コントロールNo.	受信MIDI コントロールNo.
Delay/Verb Enable	On, Off	28	Off=0/On=127	0-63=Off 64-127=On
GATE				
Gate Threshold	0 to -96dB	23	0-96	0-96
Gate Decay Time	0=.1 mS; 127= 1 Sec	24	0-127	0-127
Noise Gate Enable	On, Off	22	Off=0/On=127	0-63=Off 64-127=On
WAH				
Wah Position	0<>127	4	0-127	0-127
Wah Enable	On, Off	43	Off=0/On=127	0-63=Off 64-127=On
VOLUME PEDAL				
Vol Pedal Position	Value Not Stored	7	0-127	0-127
Volume Pre/Post	Pre, Post	47	Pre=0/Post=127	0-63=Pre 64-127=Post
Volume/Tweak Pedal Assign		65	Volume=0 Tweak=127	0-63=Volume 64-127=Tweak
TEMPO Settings				
Tempo MSB	30.0-240.0 BPM	89	0-127	0-127
Tempo LSB		90	0-127	0-127
Tap	Tap	64	Tap Button or FBV sends 127	64-127=a Tap
Tweak	Tweak Controller	1	0-127	0-127
EFFECTS Setups				
Effect Setup	EFFECTS knob, Value Not Stored	19	0-63	0-63
Tweak Param Select	Valid values vary depending on loaded effects	108	0-13	0-13

注1：

ノート値　　コントローラの値

1 ＝ 全音符
2 ＝ 付点二分音符
3 ＝ 二分音符
4 ＝ 二分三連符
5 ＝ 付点四分音符
6 ＝ 四分音符
7 ＝ 四分三連符
8 ＝ 付点八分音符
9 ＝ 八分音符
10 ＝ 八分三連符
11 ＝ 付点十六分音符
12 ＝ 十六分音符
13 ＝ 十六分三連符

付録D：FBVシリーズMIDIコントロール

Bass PODxt パラメータ	FBVコントロール	コントロール No.	送信MIDI コントロールNo.
STOMP/STOMP 1 On/Off	FBV“ Stomp 1 ”switch FBV Shortboard“ Stomp ”switch	25	Off=0/On=127
Modulation On/Off	“ Modulation ”switch	50	Off=0/On=127
DELAY/VERB On/Off	“ Delay ”switch	28	Off=0/On=127
DELAY/VERB On/Off	“ Reverb ”switch	28	Off=0/On=127
Tap (momentary)	“ Tap ”switch	64	Off=0/On=127
Wah	Left pedal on FBV Shared pedal on FBV Shortboard	4	0-127
Volume	Right pedal on FBV Shared pedal on FBV Shortboard	7	0-127
Tweak	Volume pedal can be assigned via Bass PODxt Edit pages to operate Tweak parameter	1	0-127
EQ On/Off	FBV“ Stomp Box 2 ”switch FBV Shortboard“ FX Loop ”switch controls this parameter when connected to Bass PODxt ; this parameter cannot be controlled from a Shortboard connected to Bass PODxt Pro	63	Off=0/On=127
Gate On, Off	FBV“ Stomp 3 ”switch (not available on Shortboard)	22	Off=0/On=127
Do not control Bass PODxt parameters; can be used for control of other connected MIDI devices	FBV“ Amp 1 ”switch	111	Off=0/On=127
	FBV“ Amp 2 ”switch	112	Off=0/On=127
	FBV“ Pitch/Tremolo ”switch	113	Off=0/On=127
FX Loop On/Off (Bass PODxt Pro only)	“ FX Loop ”switch	107	Off=0/On=127